

生物多様性 わかもの白書

**Biodiversity Youth Report
in Japan**

Vol. 3

2020年5月

Published by

生物多様性わかものネットワーク

はじめに

失われゆく生物多様性

地球上に初めて生命体が誕生してから、40億年もの長い時を経て、様々な環境に適応した多種多様な生きものが誕生しました。その生物多様性から人々は様々な恵み（＝生態系サービス）を享受して、豊かに暮らしています。

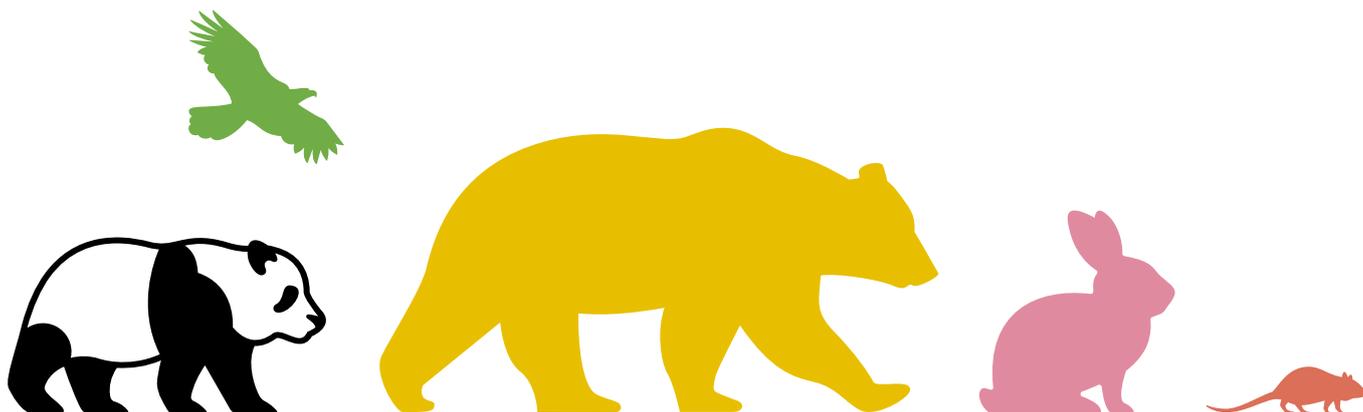
しかし現在、開発や乱獲、外来種の侵入や気候変動など、様々な人為的影響により生きものたちは急速に地球上から姿を消しています。地球の歴史の中で大量絶滅が過去5回起こっていますが、わたしたちが生きる現代において、過去に例を見ないスピードの大量絶滅が人間の活動が原因で起ころうとしています。

わたしたちの暮らしは、生物多様性と密接に関わっています。危機に瀕している生物多様性の損失を止めるためには、多くの国や人々が行動することが必要です。

2020年とその先

「自然との共生」を目指し、世界的な生物多様性の枠組みである愛知目標が作成されてから、10年が経とうとしています。しかし、2020年になっても生物多様性への関心の高さや保全活動は十分であるとはいえず、目標で目指していた社会とは程遠いのが現状です。

生物多様性に関わる問題は、10年前よりも更に深刻化、多様化しています。日本では、人間活動や開発による危機だけでなく、人間の働きかけの減少や人間が持ち込んだ外来種などによる危機、気候変動なども、生物多様性の損失に大きな影響を及ぼしていると考えられています。生物多様性を保全するためには、現在行われている活動を継続し、更に発展させていく必要があります。



生物多様性とは？

生物多様性とは、「生きものたちの豊かな個性と、そのつながり」のことです。地球上にはわたしたち人間だけでなく、大型動物から植物、微生物に至るまで、数多くの生きものたちが暮らしています。生きものはただ1種、1つだけでは生きていくことができません。支え合いながら生きているのです。生物多様性は捉えようがないですが、わたしたちの生活を支えてくれています。

生物多様性は、以下の3つの多様性を含んでいます。



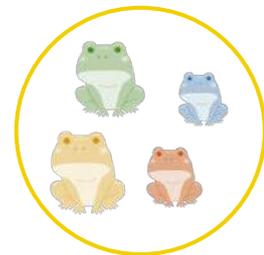
①生態系の多様性

山、川、海、まちなど
環境の多様性を指します



②種の多様性

哺乳類、爬虫類、昆虫、植物など
様々な種類の生きものがいます



③遺伝子の多様性

色、模様、形など同じ種にも
それぞれの個性があります

①生態系の多様性：自然環境と繋がりがたくさんあること

里や海、山、草原など、それぞれの「生態系」にそれぞれ特有の生きものたちが住んでいます。それぞれの生きものは、それぞれ適した環境に住み、そしてさらに環境に適応し、そこに住む生きもの同士で、競争し、共生し、とても複雑な関係を築き上げています。このような生態系（つながり）の多様性を「生態系の多様性」といいます。

②種の多様性：生きものの種類がたくさんあること

多様な種の生きものは、食物連鎖の関係でお互いにつながっています。そのため、生きものの種類がたくさんあると、もし1つの種が絶滅したとしても、他の種への影響は少なくなります。様々な種が共存し、多様であることを、「種の多様性」といいます。

③ 遺伝子の多様性：1つの種でも違いがたくさんあること

同じ人間でも1人1人、容姿や性格が異なるように、種が同じ生きものでも各々遺伝子が異なります。例えば、農業の分野などで同じ遺伝子の農産物を大量に育てると、病気や害虫による全滅の危険性が高まることとなります。個体ひとつひとつが、それぞれの遺伝子を持ち、その違いが異なり多様であることを「遺伝子の多様性」といいます。

『生物多様性わかもの白書』の 今までとこれから

生物多様性わかものネットワークでは、過去に2回『生物多様性わかもの白書』として、学生団体による生物多様性に関する活動の実態把握を目的に、生物多様性に関する活動についてのアンケート、インタビューを行いました。過去2回の結果から、生物多様性に関する活動を実施していても、活動者自身が生物多様性との関わりを認識していないケースが多く存在していることがわかりました。

この『生物多様性わかもの白書』では、国内の“わかもの”による意識的、無意識的な生物多様性の保全と持続可能な利用に向けた活動を把握、発信することを目的としました。そして、読者の皆様にとって、本白書が生物多様性を守るための行動を始めるきっかけや、さらなる活動の発展に繋がることを目指しています。

過去のわかもの白書

過去2回の白書は2015年・2017年にそれぞれ発表しています。環境に関心のある学生団体や、第一次産業に関わるユースを対象に、アンケートやインタビューを実施しました。過去の白書のバックナンバーは、右にある特設サイトからダウンロードすることができます。



白書特設サイトについて

生物多様性わかものネットワークでは、今後も定期的にアンケートやインタビューを行い、生物多様性に関する活動を行っている“わかもの”の活動を調査する予定です。白書に関する活動は、わかもの白書特設サイトに掲載しています。ぜひご覧ください。



白書を読むにあたって

“Vol.3”の狙い

本アンケートは、生物多様性という言葉を知らずに活動している方々にも答えやすいようなアンケートを目指しました。そのため、“食べる”・“触れる”・“伝える”・“守る”・“選ぶ”の5つのキーワードごとにアンケートを作成しました。各キーワードに対応した質問項目と共通の質問項目を組み合わせることで、より詳細に活動や意見を収集しました。この5つのキーワードは、My行動宣言の5つのアクションを参考にしています。

My行動宣言とは？

日頃の暮らしの中で、生きものとのつながりを意識し、それらを守るためにわたしたちができる「5つのアクション」をまとめたのが“My行動宣言”です。2010年に名古屋で開かれたCOP10をきっかけに設立された、国連生物多様性の10年日本委員会が推進しています。以下に掲載しているURLから、わたしたちができる行動を宣言することができます。

いつもの行動を変えることが、生物多様性を守ることにつながることが実感できるものになっています。詳しくは、以下のQRコードかURLから、My行動宣言の公式サイトをご覧ください。

<https://undb.jp/spread-action/entry/>



食べよう

地元でとれたものを食べ、
旬のものを味わおう。

触れよう

自然の中へと出かけ、動物園、水族館や植物園などを
訪ね、自然や生きものに触れよう。

伝えよう

自然の素晴らしさや季節の移ろいを感じて、
写真や絵、文章などで伝えよう。

守ろう

生きものや自然、人や文化との「つながり」を守るため、
地域や全国での活動に参加しよう。

選ぼう

エコラベルなどが付いた
環境に優しい商品を選んで買おう。

生物多様性わかものネットワーク とは？

「生物多様性」をキーワードにわかものが集まり、自然と共生した社会の実現を目指して活動しています。大学や年齢にとらわれず様々なメンバーが日本各地で活動しています。

活動の3つの柱



普及啓発

生物多様性とのつながりを実感できていない団体を対象にその団体の活動と生物多様性の問題とのつながりが見える機会をつくる



ネットワーク

生物多様性をキーワードに、活動分野問わず様々な人とつながり、協働する



政策提言

ネットワークや普及啓発の活動から見えた、日本のわかものが直面する生物多様性の課題を解決するために、生物多様性条約や日本の政策に対してわかもの意見の提言をする

公式サイトとSNS

生物多様性わかものネットワークでは、上の3つの活動軸を中心に様々な活動を行なっています。活動については本白書のコラムにて紹介させていただいている他、弊団体の公式サイトでも詳しくご紹介しています。

公式サイトでは、団体や活動についての紹介のほか、生きものや自然の魅力、生物多様性についての情報など、わかりやすく掲載しています。各種SNSではサイトの更新情報も投稿していますので、ぜひフォローをお願いします！



Webサイト



Twitter



Facebookページ



Instagram



目次

| | |
|----------------------------------|-------------------|
| はじめに | P. 1 |
| 白書を読むにあたって | P. 4 |
| 目次 | P. 6 |
| 第1章 ○○×生きものの暮らしアンケート | P. 7 |
| アンケートの概要 | P. 8 |
| 総合的な分析結果 | P. 15 |
| ① 基礎情報 | P. 16 |
| ② 5つに共通した質問項目の分析結果 | P. 18 |
| ③ 過去とのデータの比較 | P. 21 |
| ④ まとめ | P. 27 |
| "食べる"の分析結果 | ① 各アンケートの分析 P. 29 |
| | ② "食べる"のまとめ P. 37 |
| "触れる"の分析結果 | ① 各アンケートの分析 P. 39 |
| | ② "触れる"のまとめ P. 47 |
| "伝える"の分析結果 | ① 各アンケートの分析 P. 49 |
| | ② "伝える"のまとめ P. 57 |
| "守る"の分析結果 | ① 各アンケートの分析 P. 59 |
| | ② "守る"のまとめ P. 68 |
| "選ぶ"の分析結果 | ① 各アンケートの分析 P. 69 |
| | ② "選ぶ"のまとめ P. 77 |
| 第2章 生物多様性保全や環境問題に取り組む団体紹介 | P. 79 |
| ① "わかもの"が活躍する団体紹介 | P. 80 |
| ② 全アンケート回答者活動団体リスト | P. 90 |
| 第3章 おわりに | P. 91 |

第1章

〇〇×生きものの暮らし アンケート

意識的、無意識的な生物多様性に関わる活動を
見える化！

アンケートの概要

アンケートの目的

このアンケートでは、自分をユース（わかもの）と認識している個人を対象に、意識的、無意識的な生物多様性に関わる活動を考慮した質問項目を作成し、①生物多様性、愛知目標に関する認知度 ②活動内容、③その他で関心のある社会的活動を調査し、活動の実態、意見、他分野との協働の可能性を可視化することを目的としました。

調査対象・調査期間

<調査対象者>

キーワードごとに、以下のハッシュタグに関心のある人を、アンケートの対象に想定しました。



#食 #狩猟 #地産地消 #地域活性化 #農業 #家庭菜園 #第一次産業 #料理 #食育
#自給自足

食べる



#自然 #動物園 #水族館 #植物園 #昆虫 #採集 #森林 #海 #アウトドア #旅行
#鳥獣対策

触れる



#環境教育 #地域活性化 #写真家 #博物館 #デモ活動 #イベント作り #歌手 #詩人
#絵本作家 #画家

伝える



#環境保全 #ゴミ拾い #地域文化 #絶滅危惧種 #生きもの #伝統行事 #郷土芸能

守る



#エシカル消費 #フェアトレード #寄付 #パームオイル #ビジネス #政党
#マイクロプラスチック

選ぶ

<調査期間> 2019/12/13 ~ 2020/2/8

<調査人数> 103人

調査方法

今回のメインとなるアンケートは、以下の形式で実施しました。

配布方法

インターネット上で回答することのできるGoogleフォームを活用して実施しました。フォームへのQRコードを載せたビラやアンケートサイトURLを共有することで、回答を収集しました。

- ① 生物多様性わかものネットワークのSNSや、メンバー個人による拡散
- ② 過去の『わかもの白書』で回答のあった団体、メンバーと繋がりのある団体における所属メンバーへの拡散
- ③ ecocon2019 でのチラシの配布

アンケートサイトでは、回答者自身が自分の活動に関連していると思うキーワードを選択することで、それぞれのキーワードに対応するGoogleフォームによる、Webアンケートに回答できるという形式で実施しました。

より自分の関心に近いものを選んで回答していただきました

| 食べる ×生きものの暮らし | 触れる ×生きものの暮らし | 伝える ×生きものの暮らし |
|--|--|--|
| #食 #狩猟 #地産地消 #地域活性化 #農業 #家庭菜園 #第一次産業 #料理 #食育 #自給自足 | #自然 #動物園 #水族館 #植物園 #昆虫 #採集 #森林 #海 #アウトドア #旅行 #鳥獣対策 | #環境教育 #地域活性化 #写真家 #博物館 #デモ活動 #イベント作り #歌手 #詩人 #絵本作家 #画家 |
| アンケートへ | アンケートへ | アンケートへ |
| 守る ×生きものの暮らし | 選ぶ ×生きものの暮らし | |
| #環境保全 #ゴミ拾い #地域文化 #絶滅危惧種 #生きもの #伝統行事 #郷土芸能 | #エンカ消費 #フェアトレード #寄付 #パームオイル #ビジネス #マイクロプラスチック #政党 | |
| アンケートへ | アンケートへ | |

実際のGoogleフォーム

調査項目

アンケート項目は以下の4つに大別されます。

1. 回答者自身の属性を問う項目
2. 回答者が関心を持つ「〇〇×生きものの暮らし」に対する活動状況などを問う項目
3. 生物多様性に関連のあることや言葉の認知度、考え方を問う項目
4. 〇〇×生きものの暮らし以外で回答者が関心を持つ社会問題を問う項目

1. 回答者自身の属性を問う項目

氏名、所属、年齢、出身地（愛着のある土地）、性別など、回答者の属性を問う項目です。5つすべてのアンケートで、同じ質問をしています。

2. 回答者が関心を持つ「〇〇×生きものの暮らし」に対する活動状況などを問う項目

この項目は、更に2つに分かれています。

i) 活動の特徴

回答者が選んだ「〇〇×生きものの暮らし」に対して実際にどのような活動をしているのか、誰とどこで活動しているのかなどを尋ねました。全てのキーワードで共通の質問と、キーワードごとに個性のある質問を用意しました。この項目では現代のわかものが日本でどのように生きものに関わっているのかを知る意図があります。

ii) 活動しているユースの気持ちと抱えている課題

活動をする上でのモチベーションや困っていることを問う項目を用意しました。また、活動している理由や気をつけていることに関する質問では、選択肢にそれぞれ愛知ターゲットに関連させ、無意識な活動を調査しました。ここでは、わたしたち生物多様性わかものネットワークが生きものの暮らしを守る活動を広げていくうえで参考となるデータを収集することを意図しています。

2. の項目では、キーワード独自の質問 [○]、キーワードごとに違和感がないように修正しているが5つのアンケートで同じ意図で問う質問 [◇]、共通の質問 [☆] があります。それぞれ質問の冒頭に、対応する記号を付記して分類しているので、見比べる際に参考にしてください。

3. 生物多様性に関連のあることや言葉の認知度、考え方を問う項目

3. では、生物多様性に関連のあることや言葉の認知度を問いました。過去の2回の白書でも同様の認知度の調査を行っています。また、生物多様性に関連があると思う行動と、日常で行っている行動について同じ選択肢で問い、生物多様性に関する行動と考え方を調べました。

4. ○○×生きものの暮らし以外で回答者が関心を持つ社会問題を問う項目

4. では、SDGsの項目ごとに関連するワード群を設定し、回答者にどのワード群に関心があるかを問いました。この項目では○○×生きものの暮らしの選択によって、わかものがどの社会問題に関心があるのかを把握し、今後の弊団体の企画に活かそうと考えています。ワード群は下記の表をご覧ください。

SDGsの各目標と対応するワード群

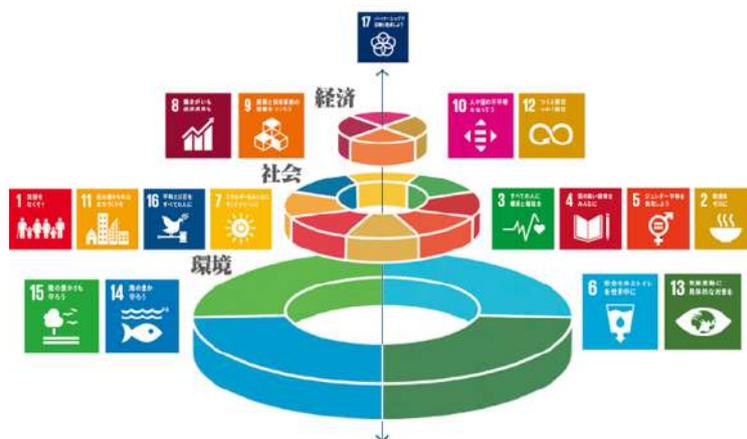
| | | | |
|---|--|--|---|
|  <p>1 貧困をなくそう</p> | <p>目標1: 貧困をなくそう</p> <p>#貧困</p> |  <p>2 飢餓をゼロに</p> | <p>目標2: 飢餓をゼロに</p> <p>#食料生産 #農業 #林業 #漁業 #狩猟</p> |
|  <p>3 すべての人に健康と福祉を</p> | <p>目標3: すべての人に健康と福祉を</p> <p>#健康と福祉</p> |  <p>4 質の高い教育をみんなに</p> | <p>目標4: 質の高い教育をみんなに</p> <p>#教育</p> |
|  <p>5 ジェンダー平等を実現しよう</p> | <p>目標5: ジェンダー平等を実現しよう</p> <p>#ジェンダー平等</p> |  <p>6 安全な水とトイレを世界中に</p> | <p>目標6: 安全な水とトイレを世界中に</p> <p>#衛生的な環境づくり #汚染問題</p> |
|  <p>7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに</p> | <p>目標7: エネルギーをみんなにそしてクリーンに</p> <p>#エネルギー</p> |  <p>8 働きがいも経済成長も</p> | <p>目標8: 働きがいも経済成長も</p> <p>#観光 #労働問題 #ビジネス</p> |
|  <p>9 産業と技術革新の基盤をつくろう</p> | <p>目標9: 産業と技術革新の基盤をつくろう</p> <p>#インフラづくり #資源の有効利用</p> |  <p>10 人や国の不平等をなくそう</p> | <p>目標10: 人や国の不平等をなくそう</p> <p>#平等 #差別反対</p> |
|  <p>11 住み続けられるまちづくりを</p> | <p>目標11: 住み続けられるまちづくりを</p> <p>#街づくり #地域活性化 #ゴミ #防災</p> |  <p>12 つくる責任 つかう責任</p> | <p>目標12: つくる責任 つかう責任</p> <p>#生産 #消費</p> |
|  <p>13 気候変動に具体的な対策を</p> | <p>目標13: 気候変動に具体的な対策を</p> <p>#気候変動</p> |  <p>14 海の豊かさを守ろう</p> | <p>目標14: 海の豊かさを守ろう</p> <p>#海 #海の生きもの</p> |
|  <p>15 陸の豊かさを守ろう</p> | <p>目標15: 陸の豊かさを守ろう</p> <p>#陸の生きもの #生態系</p> |  <p>16 平和と公正をすべての人に</p> | <p>目標16: 平和と公正をすべての人に</p> <p>#平和 #非暴力</p> |
|  <p>17 パートナリシップで目標を達成しよう</p> | <p>目標17: パートナリシップで目標を達成しよう</p> <p>#ネットワークづくり #協力 #国際交流</p> |  <p>独自項目: 政策を提言しよう</p> <p>#政策提言 #発信</p> | |

世界目標の紹介と国際会議について

持続可能な開発目標（SDGs）とは？

国連サミットにて採択された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標。17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind）」ことを誓っています。環境の観点からは、17つの目標の相互関係について「環境を基盤とし、その上に持続可能な経済社会活動が存在している」と捉えることができます。この解釈をわかりやすく示した図として「SDGsのウェディングケーキ」があります。「環境(生物圏)」に関する4つの目標を土台として「社会」に関する8つの目標、その上に「経済」に関する4つの目標が成り立つということを示しています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



illustrated by Johan Rockstrom and Pavan Sukhdev

画像の出典：

Stockholm Resilience Centre

<http://www.stockholmresilience.org/research/research-news/2016-06-14-how-food-connects-all-the-sdgs.html>

愛知目標とは？

生物多様性の問題は深刻な状態に陥っています。この問題を解決するためには、世界みんなが取り組むことが必要です。2010年に愛知県で、192カ国の代表が集まり、生物多様性について話し合う国際会議（COP10）が開催されました。この会議で、世界の国々は2020年までに生物多様性を守るため、20の約束を決めました。この約束を**愛知目標**といいます。

愛知目標は2020年までに達成すべき20の個別目標から成り、それらの個別目標は5つの戦略目標に分けられます。

これらの目標は、それぞれが深く関わりあっています。例えば、海の保護地域を作ること（個別目標11、戦略目標C）は、サンゴ礁の回復（個別目標10、戦略目標B）につながります。それによって海の生態系が改善し、漁獲量の回復（個別目標14、戦略目標D）に繋がるということがあります。1つの行動が、いくつもの目標を達成することに貢献していきます。

愛知目標 個別目標一覧

| | |
|--|---|
| A グループ 目標1 普及啓発 目標2 各種計画への組み込み 目標3 補助金・奨励措置 目標4 生産と消費 | B グループ 目標5 生息地の破壊 目標6 過剰漁獲 目標7 農業・林業・漁業 目標8 化学汚染 目標9 外来種 目標10 脆弱な生態系の保護 |
| C グループ 目標11 保護地域 目標12 種の保全 目標13 遺伝的多様性 | D グループ 目標14 生態系サービス 目標15 復元と気候変動対策 目標16 ABS |
| E グループ 目標17 効果的・参加型戦略 目標18 伝統的知識 目標19 知識・技術の向上と普及 目標20 人材・資金 | 20 個の愛知目標 5 つの戦略目標に分けられている |

2020年である今年までに、目標に貢献するような活動は行われたものの、達成には程遠い状況です。現在の状況のままでは、生物多様性や生態系機能が急速に減少し続け、SDGsやパリ協定など、他の目標を達成することすら難しくなると予想されています。現在のシステムや価値観を変えるような社会変革が必要だと考えられるため、次に作成される2020年以降の目標にも注目が集まっています。

それぞれの戦略目標・個別目標について詳しくは「にじゅうまるプロジェクト」のホームページをご覧ください。



国際条約と日本のユースについて

愛知目標は2020年までの短期目標です。様々な国の人が集まって、より良い目標を考えるために国際会議を開きます。ところで、皆さんは国際会議にわかものが参加しているのをご存知でしょうか？GYBN（Global Youth Biodiversity Network）というユース団体が精力的に活動しています。GYBNには様々な国のユースが参加しており、普及啓発、ワークショップなどによる能力育成、国際会議にユースが参加するための調整などを行っています。日本にも、GYBN JapanというGYBNの支部が存在しており、チームで活動しています。現在所属しているのは以下の2つの団体の有志です。

生物多様性わかものネットワーク

団体が行う国内での活動を活かしながら、国際会議に日本ユースの想いや意見を届けられるように活動しています。また、国内で国際条約の実行が確実に進むよう、提言活動等も行っています。

COND

(Change Our Next Decade)

「自分達の生きる未来は自分たちで守る」という信念の下、生物多様性保全に関心のある日本のユースを巻き込み、活動しています。「行動を起こしたい」ユースが、普及啓発・政策提言・現地での活動等を行っています。

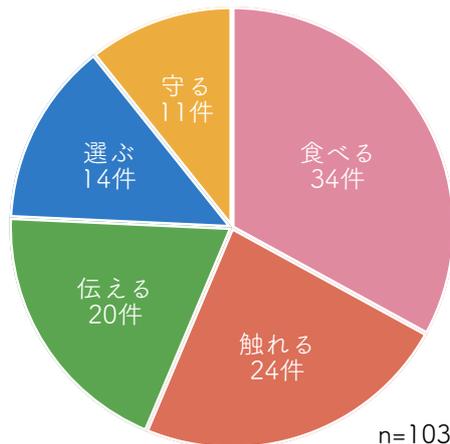
国際会議に参加したユースが、いったい何をするの？と思われる方は、ぜひ生物多様性わかものネットワークのウェブサイトに掲載している国際会議レポート（<https://bd-wakamono.net/cbdreport>）や、CONDが作成した生物多様性条約ガイドユース版（<https://cond2020-44733.firebaseio.com/guide-cbd.pdf>）をご覧ください！



総合的な分析結果



5つのアンケートの回答状況



最も回答数が多かったのは"食べる"には34人の回答が集まりました。他の4つのキーワードに比べて身近な活動であり、多くの方々が食を「生物多様性にとって身近なもの」と認識していると推測できます。

続いて"触れる"、"伝える"では、それぞれ24人、20人が回答しました。要因としては他のキーワードに比べて活動のために必要なコストが少ないと考えられます。

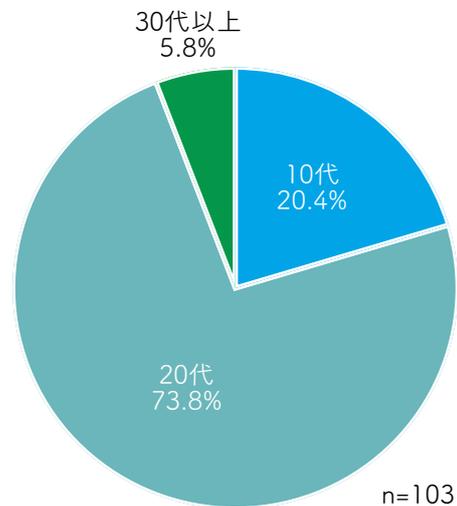
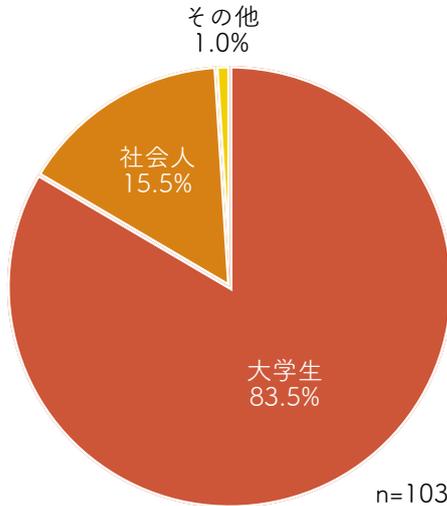
回答数が少なかったのは"選ぶ"と"守る"でそれぞれ14人、11人でした。"選ぶ"に関しては経済活動と密接につながっていることもあり、企業との協働を考える上で今回の結果は物足りないものとなりました。今後この分野に関して改善していく必要があります。"守る"に関しては最も回答数が少ない結果となりました。生きものを"守る"活動は専門知識や特殊な技能が要求される一面もあり、わかものにとって活動を行う上での障害が多いことが推測されます。



① 基礎情報



所属・年齢



所属については、全体の回答者の83.5%が大学生、そして15.5%が社会人という結果になりました。今回のアンケートに回答した方が所属している団体については、本白書のP.90 に記載しているのでご参照ください。

年齢については、20代の回答者が圧倒的に多いことがわかります。30代以上の回答者が5.8%いることから、生物多様性は30代以上の方にとっても興味深いトピックであり、また弊団体のような学生中心の団体の活動に興味を持っているということが読み取れます。

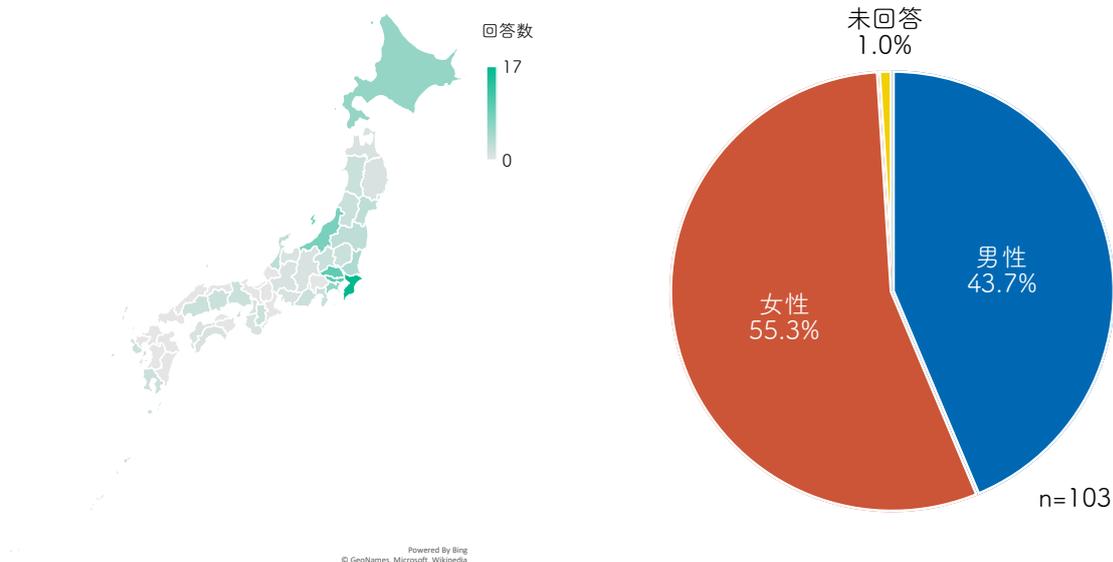
① コラム①：ユースとは？

今回のアンケートは、ユース世代を対象にしています。それでは“ユース”とはなんでしょうか？スポーツの世界では、育成世代を指すことも多いです。社会問題に取り組む団体では、ユースとは18歳から30歳（35歳）など、明確な定義を決めて活動している場合もあります。日本では“青年”や“わかもの”という言葉もユースと同じような意味で使われます。

今回のアンケートでは、具体的に年齢は定めませんでした。自分たちの社会を自分たちが変える力があると考え、その力を使って自分たちのために変えたいと思う人であれば、みんな「ユース」と言えるのではないのでしょうか。



出身地(愛着のある土地)・性別



出身地(愛着のある土地)については、北は北海道、南は鹿児島まで計18都道府県からの回答を得ることができました。

特に回答者が多かったのは、順に千葉、東京、埼玉であり、弊団体の拠点が関東であることが一因と考えられます。

性別に関しては、女性55.3%、男性43.7%、未回答1.0%というように、比較的バランスが取れた回答を得ることができました。どちらかといえば、女性のほうが男性より回答者数が多いことから、生物多様性を身近なトピックとして考えるのは男性より女性のほうが多いかもしれないということが考えられます。

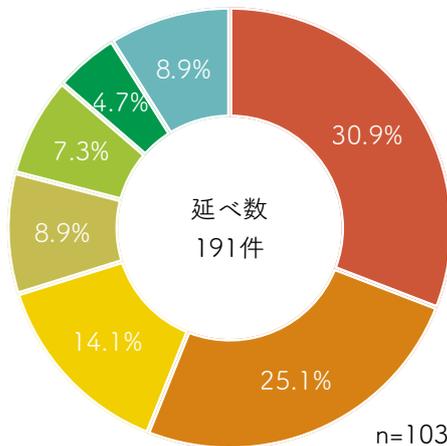
📌 コラム②：ジェンダーと生物多様性

生物多様性の保護をしていくうえで、ジェンダーの観点を見逃すことはできません。例えば、沿岸地域では男性が漁業に勤しみ、女性は農業に勤しむことがよくあります。しかし、ジェンダーの壁があると、お互いの生業に干渉することがタブー視され、意見交換する場がもたれず、生物多様性の保全が進まないことがあります。仮に農業によって土壌を豊かにすることが海洋資源の豊かさに繋がるということを女性が知っていたとしても、漁業が男性の役割と決まっていると、一緒に協働する動きが減ってしまいます。生物多様性に貢献するためにはジェンダーの壁を取り払い、日頃からお互いを尊重しあうことが大切です。

② 5つに共通した質問項目の分析結果



一緒に活動している主体



[グラフ凡例]

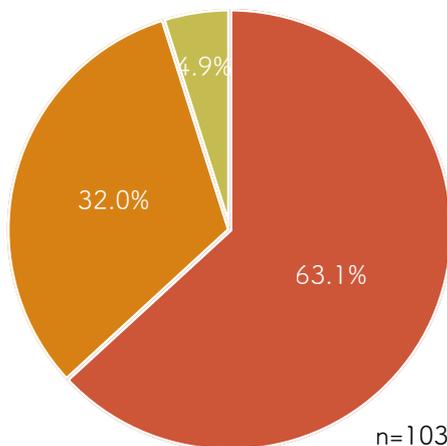
- 学生と
- 1人で
- NGOやNPOなどの団体のメンバーと
- 地域の人と
- 専門家(大学の教授や研究所の方など)と
- 会社の社員と
- その他

わかものの活動は「1人で」もしくは「学生と」ともに活動することが多く、この2項目で約半数を占めています。わかものにとって学生との繋がりや協働は広げやすく、一緒に活動している例が多いことが読み取れます。

次に多いのは「NGOやNPOなどの団体のメンバーと」で14.1%でした。一方で「地域の人と」が8.9%、「専門家(大学の教授や研究所の方など)と」が7.3%、「会社の社員と」が4.7%とこの3項目ではあまりわかものとの協働がみられませんでした。



“生きもの”や“生きものの暮らし”への関心



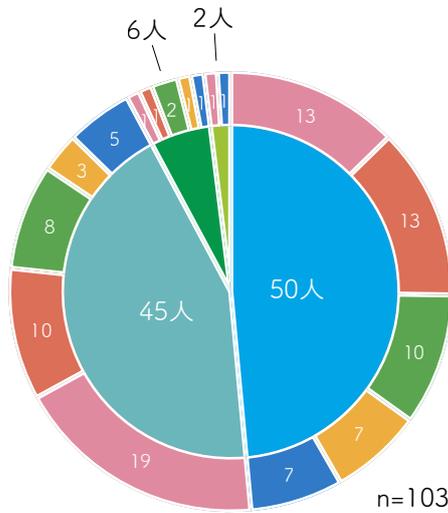
[グラフ凡例]

- 関心がある
- 少し関心がある
- まったく関心がない
- わからない

アンケートの性質上、回答者の多くが生きものの暮らしに関心を持っていることが予想されましたが、95.1%の人が「関心がある」か「少し関心がある」と回答しており予想通りの結果となりました。



“生物多様性”の認知度



[内グラフ凡例]

- 人に説明できる
- 言葉の意味は知っている
- 意味は知らないが、言葉は聞いたことがある
- 知らない

[外グラフ凡例]

- 食べる
- 触れる
- 伝える
- 守る
- 選ぶ

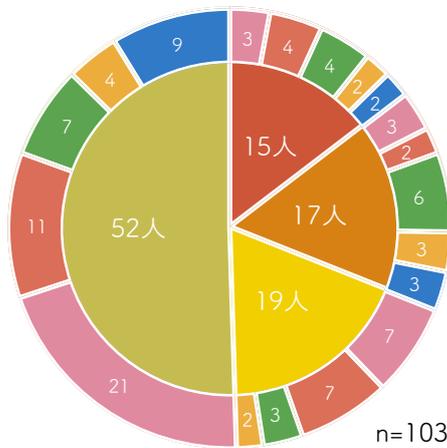
“生物多様性”の認知度

「人に説明ができる」と回答した人数が多い順に、“食べる”・“触れる”、“伝える”、“守る”・“選ぶ”という結果になりました。“食べる”と“触れる”が最高値の13人でした。103人の回答者のうち、「生物多様性」という言葉自体を知っている・聞いたことがあると答えた人数が101人であったことから、言葉の認知度は高いと言えます。割合で考えると、“食べる”のアンケートの回答者の中での認知度は低かったものの、そもそもの回答者数が5つのキーワードの中でもっとも多かったことから、人数で比較すると“食べる”の回答者の認知度がもっとも多い結果となりました。同じ理由で、“触れる”の回答者の中での認知度も高かったと考えられます。

また、“守る”・“触れる”・“伝える”の回答者のなかに「知らない」と回答した方々がいなかったのも注目すべき点です。一方で、「知らない」と回答した人がいたのは“食べる”と“選ぶ”のキーワードでした。これは、他の3つのキーワードと比べて、必ずしも生きものや自然と直接関わらなくても日常行動として行う項目であったことから、より広い回答者層が得られたためだと考えられます。



“愛知目標”の認知度



[内グラフ凡例]

- 人に説明できる
- 言葉の意味は知っている
- 意味は知らないが、言葉は聞いたことがある
- 知らない

[外グラフ凡例]

- 食べる
- 触れる
- 伝える
- 守る
- 選ぶ

“愛知目標”の認知度

「人に説明ができる」と回答した人数が多い順に、“触れる”・“伝える”、“食べる”、“守る”・“選ぶ”という結果になりました。生物多様性の認知度と比較して全体的に愛知目標の認知度は低く、「説明できる」と回答したのは全体の回答者の103人中15人に留まる結果となりました。生物多様性に関心はあっても、生物多様性保全のために締結された「愛知目標」への認知度は低く、まだ団体レベルや個人レベルで愛知目標がまだあまり意識されていないということが考えられます。5つ全てのアンケートにおいて「知らない」と答えた人数が選択肢の中で最も多かったことから、見聞きする機会自体も少ないということが考えられます。短期目標である愛知目標は、2020年までの目標です。新たな目標が発表された後、日本の各地で活動しているユース団体が目標についての認知度を深め、つながりを意識しながらそれぞれ取り組むことで、活動の新たな意義にもなるのではないのでしょうか。

“生物多様性”、“愛知目標”の認知度の推移

生物多様性と愛知目標の認知度は、過去のわかもの白書でも調査を行ってきました。次のページでは、2015年、2017年、2020年の白書の結果と、環境省が実施している世論調査の結果を比較しています。今年度は選択肢が少し異なりますが、グラフでは統一して表示しています。どのように読み替えているかは、P.22の表をご覧ください。

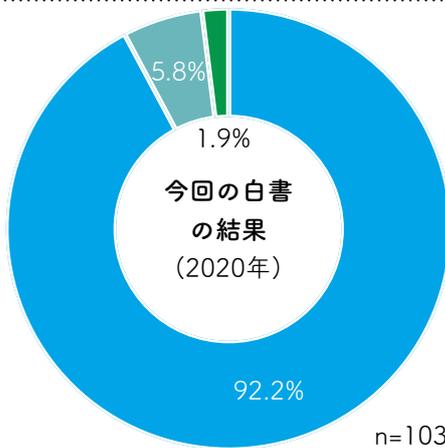
③ 過去のデータとの比較

“生物多様性”の認知度

“生物多様性”という言葉に対する認知度について、過去の白書は対象をより環境意識の高い学生に絞っていたにもかかわらず、今回のアンケート結果の方が高い認知度となりました。これは、一般的に生物多様性という言葉の認知度が向上したからではないかと考えられます。世論調査では、6割以上が知っている、聞いたことがあると回答しました。白書の結果よりも低い数値ではありますが、過去の調査より向上しています。

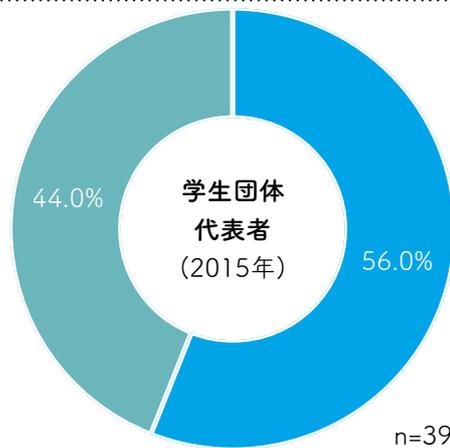


“生物多様性”の認知度①



n=103

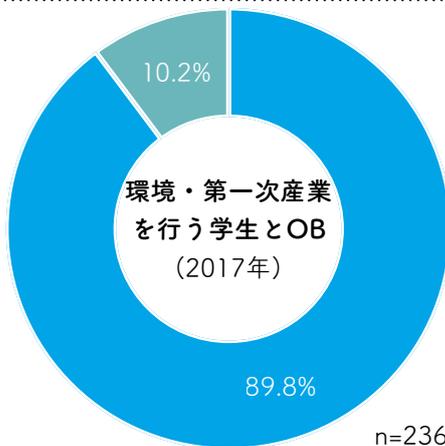
- 言葉の意味を知っている
- 意味は知らないが聞いたことがある
- 聞いたこともない
- わからない



n=39

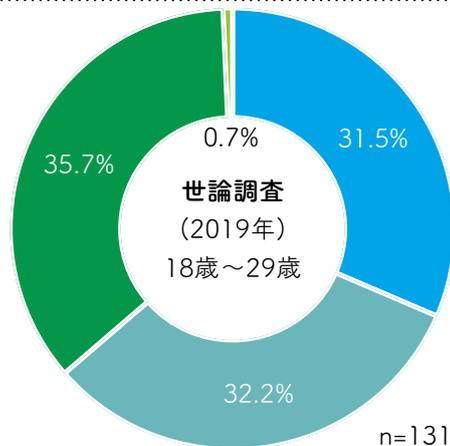


“生物多様性”の認知度②



n=236

- 言葉の意味を知っている
- 意味は知らないが聞いたことがある
- 聞いたこともない
- わからない



n=131

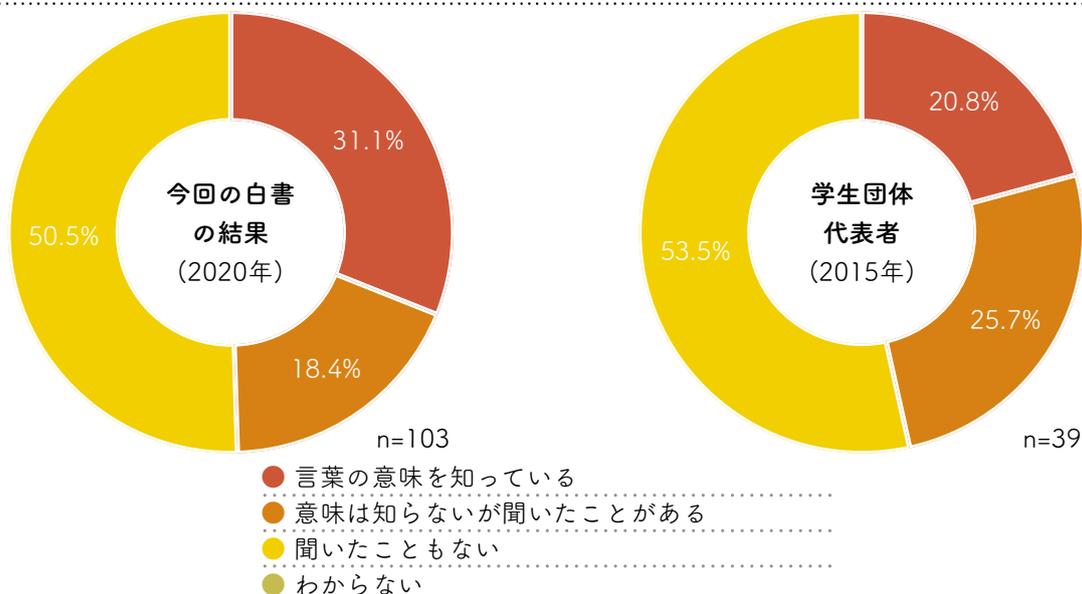
| [本白書での質問] | | [グラフでの表現] |
|----------------------|---|------------------|
| 人に説明できる/言葉の意味は知っている | → | 言葉の意味を知っている |
| 意味は知らないが、言葉は聞いたことがある | → | 意味は知らないが聞いたことがある |
| 知らない | → | 聞いた事もない |
| - | → | わからない |

“愛知目標”の認知度

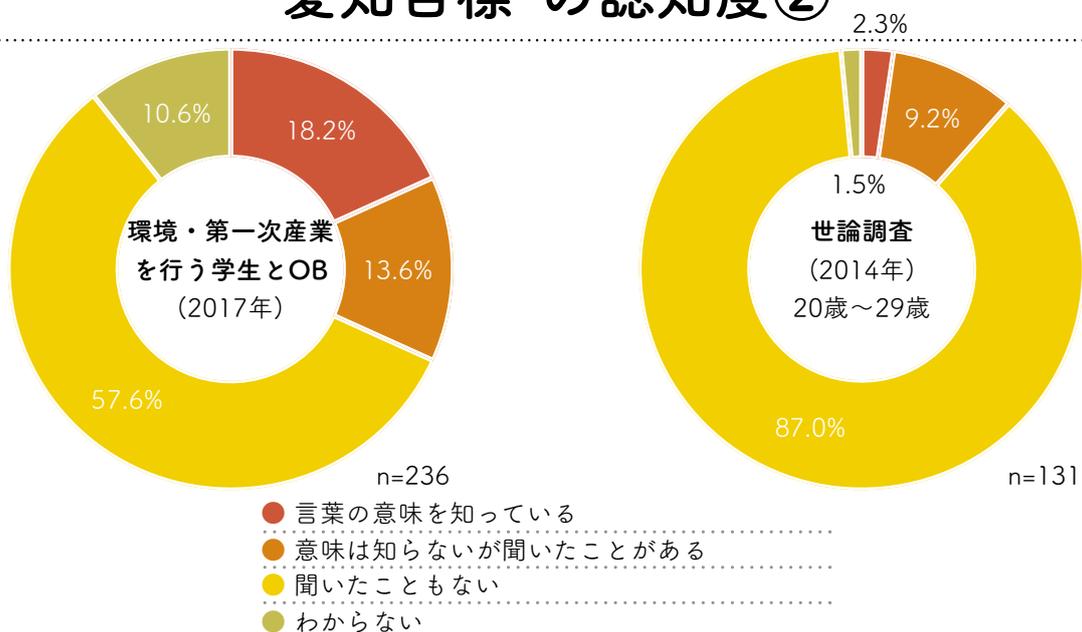
"生物多様性"の認知度に比べ、"愛知目標"の認知度はどの調査でも低い結果となっています。「聞いたこともない」という回答者は減少していますが、「言葉の意味も知っている」回答者は3割にとどまっています。日常生活で国際条約に関する話題があがることが少ないため、2020年に新たに目標が定められた後、国際的な目標への関心や理解のためには、**今までとは異なる普及啓発が必要**だと考えられます。



“愛知目標”の認知度①

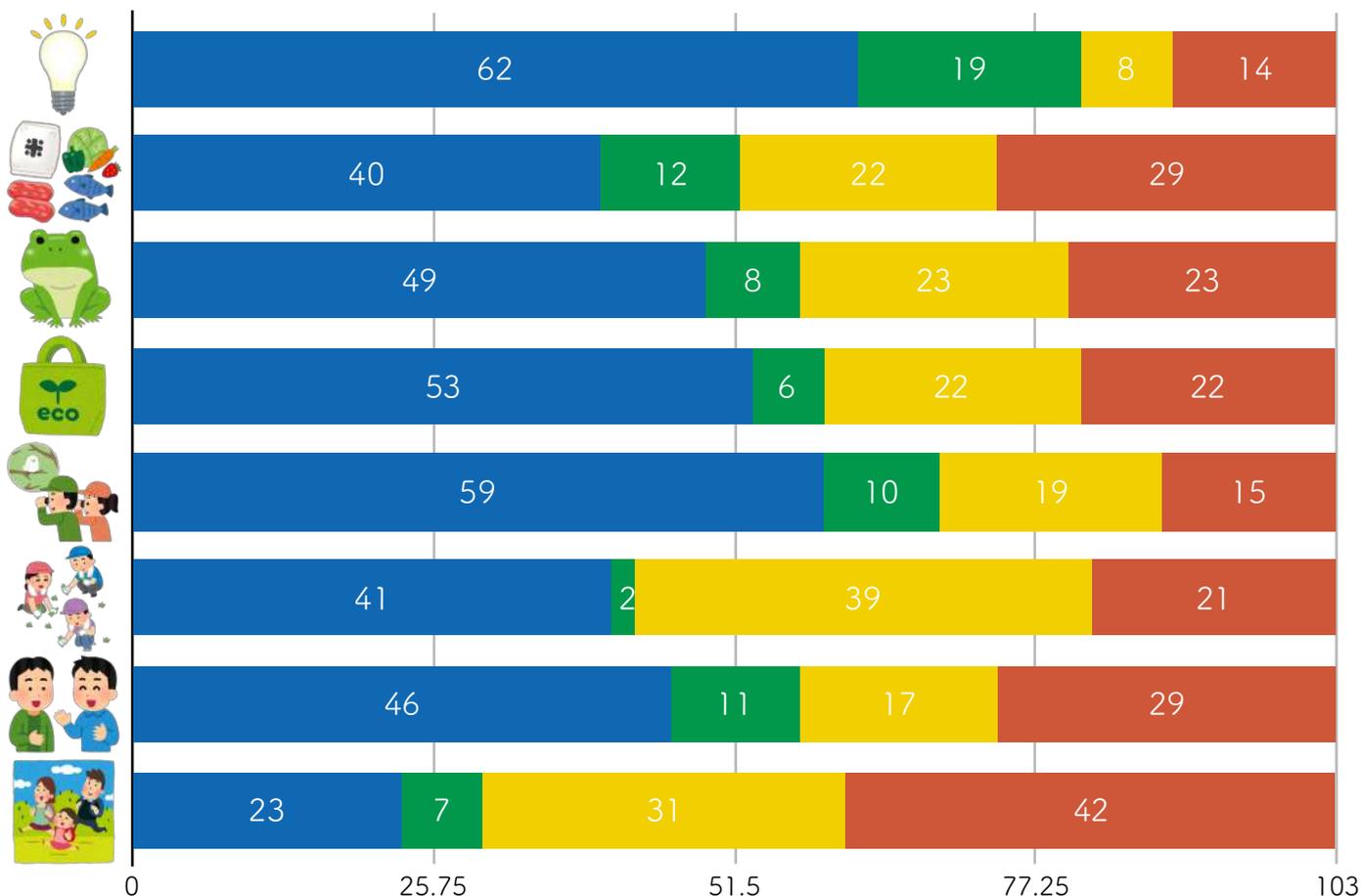


“愛知目標”の認知度②



生物多様性に寄与する日常行動の状況

- 生物多様性に寄与していると意識しながら行動している(A群)
- 生物多様性に寄与していると意識していないが、行動している(B群)
- 生物多様性に寄与すると思っているが行動できていない(C群)
- どちらでもない(D群)



- 節電や適切な冷暖房温度の設定を心がける(以下、節電)
- 旬のもの、地域のものを選んで買う(以下、旬・地域)
- 生きものを最後まで責任を持って育てる(以下、責任)
- 環境に配慮した商品を優先的に買う(以下、環境配慮)
- 身近な生きものを観察したり、外に出て自然とふれあう(以下、ふれあう)
- 自然保護活動や美化活動に参加する(以下、保護・美化)
- 自然や生きものについて、家族や友人と話す(以下、話す)
- エコツアーや自然体験会に参加する(以下、エコツアー)

1) 生物多様性に寄与する日常行動の概要

生物多様性に寄与する日常行動をわかものがどの程度意識しているのか、またどの程度行動しているのかについて調査するために「①以下の行動について、日頃から行っている行動があったら選んでください」と「②以下の行動について、生物多様性の保全につながると思う行動を選んでください」の二つの質問を左ページの8つの行動について尋ねました。左ページのグラフは「①、②両方の質問において選択した人数(以下、A群)」、「①の質問にのみ選択した人数(以下、B群)」、「②の質問にのみ選択した人数(以下、C群)」、「①、②どちらの質問に対しても選択しなかった人数(以下、D群)」をまとめたものです。ここでは初めに全体の分析、その次に行動ごとの分析を行います。

2) 日本のわかものの日常行動にみられる生物多様性意識

全体として「エコツアー」を除くすべての行動についてA群がもっとも多いという結果になりました。その中でも「節電」、「ふれあう」、「環境配慮」の3つの行動でA群が半数を超えました。A群はそれぞれの行動について生物多様性につながっていることを意識しながら活動していることを示しており、理想的な状況を表しています。そのため、この結果から回答者の生物多様性の意識の高さと行動力が伺えました。

また、平均でC群とD群が拮抗しておりB群が最も少ない結果となりました。B群は生物多様性に貢献することを意識しないまま(知らないまま)行動をしていることで啓発活動が必要になります。C群は生物多様性に良いことを理解しているにもかかわらず行動できていないことを表しており、そこに存在する障害を見出し、取り除く努力をする必要があります。D群はいずれでもなく、生物多様性との関わりを啓発したり、必要に応じて生物多様性以外のアプローチ方法・行動を促すことが必要です。今後、弊団体はB群、C群をA群にD群をそれぞれの事情に合わせてB群、C群に移行させる取り組みを行いたいと思います。

3) それぞれの活動の特徴

続いて行動別の特徴をみていきます。まず、「節電」については他の行動と比べてA群とB群の割合が大きく、日常的な行動となっているようです。要因としては「節電」はエコの基本であり義務教育時代からの徹底した啓発が大きいと考えられます。

「旬・地域」についてはA群において「エコツアー」の次に回答者数が少ない結果となりました。A群が少ない要因としてはB群とC群を比較するとC群が多いことから、旬の食材や地域の食材を使うことが生物多様性の保全に寄与することを理解しながら、行動できないことを表しています。行動できない理由としては、アンケートの回答者の中心が学生であったことから、料理をする機会が少なく、故に旬や地域の農産物を買うことが少ないのかもしれないと推測しました。

「責任」ではA群とB群の合計がC群とD群の合計を上回る結果となり、生物多様性との関わりを認識の有無に関わらず責任持って生きものを最後まで飼育していることがわかります。また、C群とD群であっても生きものをそもそも飼育していない方も回答していると考えられるためA群の予備群は多いと考えられます。

「環境配慮」では、類似している「旬・地域」と比べてB群、D群が減少し、A群が増加していることがわかります。この差を生み出す要因として2つ考えられました。1つ目は「環境配慮商品を選ぶことのほうが「旬・地域」の食べものを選ぶことよりも生物多様性への貢献が見えやすいことが推測されます。実際にA群とC群の合計は「環境配慮」の方が多く、「環境配慮」の方が生物多様性との関連性がわかりやすいという結果となりました。2つ目は「旬・地域」が食べ物のみを対象にしているのに対し、「環境配慮」は食べ物以外にも他の商品やサービスを含んでいることから、購入できるものの絶対数が多いということです。また回答者の性質上、大学生が多く、実家暮らしの場合食料品を日常的に買う機会がないことも要因として考えられました。

「ふれあう」は「節電」に次いでA群が多く、D群が少ない結果となりました。一方、「節電」と比べてB群、C群の多寡が逆転しています。これは、都市で暮らしている場合、いきものと「ふれあう」ことが「節電」よりも活動のために時間やお金がかかるため、生物多様性に寄与すると認識していてもなかなか行動に移せない方々が多いということが推測できます。

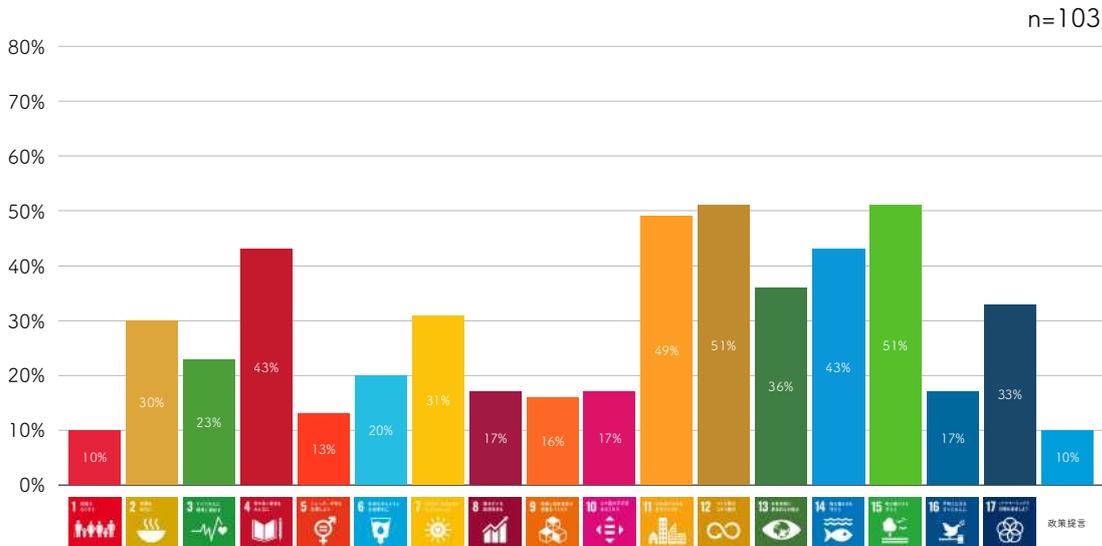
「保護・美化」ではC群の回答者数が全活動中最も多い結果となりました。この結果は「保護・美化が最も活動障壁が大きい」ということを示しており、解決の余地があります。また、少数ですがB群もみられました。個々の「保護・美化」の行動と生物多様性との関連性が結びつきづらいことも考えられますが、活動に対する目的が不明瞭になっている場合も考えられます。後者の場合は活動に対する動機付けができる機会の創出が期待されます！(P.76コラム⑥エコラボ)

「話す」行動はA群が5番目に多い一方でD群の人数も同率で2番目に多い結果となりました。注目すべきはB群よりC群の人数の方が多いことで、C群の人は生きものについて話したいことがあるにも関わらず、話す機会がない方々がいることが想像されます。このことから自然や生きものについて話せる場づくりや語り合いやすい環境づくりが急務です。

「エコツアー」では他の活動とは違いD群が最も多い結果となりました。この結果はエコツアーや自然体験会に対する認知が低いことを示していると考えられます。また、認知をしている層においてもエコツアーという言葉からむしろ、環境に悪い印象や環境を破壊する印象を持った方がいることも考えられます。近年は観光による環境破壊が取り沙汰されており「オーバーツーリズム」という言葉もよく聞かれるのでこのような結果になったと考えられます。



日頃の活動に関連するワードとSDGs



回答者が選んだ割合が多かったのは、目標12（つくる責任、つかう責任）、目標15（陸の豊かさを守ろう）の51%と、目標14（海の豊かさを守ろう）の49%で、約半数の方々が選択しています。一方、最も活動していないと考えられるのは、目標1（貧困をなくそう）と、本白書で独自に追加した18番（政策）の10%でした。**貧困は、生物多様性に関わる問題の解決を目指すうえで、根本的な障害となる社会的な課題となっている地域も存在しますが、日本のユースでは取り組んでいる方々は少ない**と考えられます。政策については、関心の低さだけでなく、関わる機会がそもそも少ないことが課題として考えられます。

SDGs全体への関心度（選択された目標数（複数選択あり）÷回答者数）は、高い順に、“伝える”、“選ぶ”、“触れる”、“守る”、“食べる”でした。**“伝える”を選んだ回答者**は、より多くの方々に自分の活動や生きものの暮らしについて発信したい思いがあるため、様々な人と関わる中で、**多様な興味を持つようになった**のではないかと考えられます。“守る”の回答者は、生きものそのものに関心のある方々が多く、間接的に関連のあるその他の課題・問題については、関心が薄いのではないかと考えられます。“食べる”という行動は、どのような人にとっても身近な行動であるため、他のキーワードに比べ、回答者の層が広がったことが特徴でした。そのため、様々な環境意識を持つ方が回答したと考えられます。

④ まとめ

5つのアンケートの総回答件数は103件でした。回答件数が多い順に“食べる”（34件）、“触れる”（24件）、“伝える”（20件）、“選ぶ”（14件）、“守る”（11件）でした。“食べる”という行動が日常的なものであり、生物多様性との関連性への関心が高いことが推測できます。また、今回のアンケートには生きものに“触れる”ような保全活動に関わっている学生が多く回答していたことから、“触れる”の回答件数が多くなったのではないかと分析しました。

所属・年齢については回答者の大多数が大学生、20代という結果になりました。出身地については、北は北海道、南は鹿児島まで計18都道府県からの回答を得ることができました。性別については、女性55.3%、男性43.7%、未回答1.0%という結果になりました。**生物多様性は性別を問わず関心を集めるトピックである**と言えるのではないのでしょうか。

一緒に活動している主体については、「学生と」という回答がもっとも多い結果となりました。「1人で」の回答が2番目に多かったものの103人の回答人数に対して191件の回答数が得られたことから、個々の回答者が複数の主体と一緒に活動を行っていることが推測できます。他にも「NGOやNPOなどの団体のメンバーと」、「地域の人と」という回答も見られました。**生物多様性に関連したNGOやNPO、地域の団体がわかものも巻き込んで活動を行っている**ということが推測できます。

“生きもの”や“生きものの暮らし”への関心については、回答者全体の約95%が「関心がある」、または「少し関心がある」と回答しました。「まったく関心がない」と回答した方々がおらず、アンケートの性質上“生きもの”や“生きものの暮らし”に興味関心がある方が集まったと言えます。

“生物多様性”の認知度は103人のうち、「知っている」と答えたのが95人でかなり高いと言えます。このうち、「人に説明できる」と回答したのは50人で、理解度が高い方も約半数いるということがわかりました。2015年に学生団体代表者を対象としたもの、2017年に環境・第一次産業活動を行う学生とOBを対象としたもの、2019年の世論調査、どれと比べても、2019年に実施した本アンケートの回答が認知度が高い結果でした。生きものや環境に関心があるわかもの間で**年々“生物多様性”に対する認知度が高まっている**ということがわかります。さらに、世論調査では「聞いたことがある」、「意味を知っている」と回答した人が63.7%であったのに対し、本アンケートでは98.0%もの回答が得られたことから、“生きもの”に関心のある層にアプローチしたと言えます。

“愛知目標”の認知度は103人の回答者のうち過半数の回答者が「知らない」と回答したことから、**生物多様性に関心はあっても、生物多様性保全のために締結された「愛知目標」への認知度は低い**ことがわかりました。日本各地で生物多様性保全に関わる活動をしているわかものが“Think Global, Act Local”という言葉があるように、条約や国家戦略を意識しながら、それぞれの地域で

活動していくことがこれからの課題であると考えます。また、2014年の世論調査、2015年に「学生団体代表者」を対象としたもの、2017年に「環境・第一次産業活動を行う学生とOB」を対象としたものと比較して、2019年に実施した本アンケートの回答のほうが“愛知目標”の認知度が高い結果となりました。先述したように、本アンケートの回答者は比較的“生きもの”に関心のある層ではあったものの、「学生団体代表者」や、「環境・第一次産業に関わっている」などの縛りがなかったにもかかわらず、過去のものより高い認知度の結果が得られました。このことから、“愛知目標”についても年々少しずつではありますが認知度が高まっていると推測できます。

i コラム③：愛知目標の現状とこれから

①愛知目標に向けた取り組み

2010年から2020年にかけて、日本国内の生物多様性保全のために、様々な主体によって多くの取り組みが行われてきました。愛知目標に取り組む活動を登録できる「にじゅうまるプロジェクト」という仕組みがあり、そこには729の団体、1054の事業が登録されています。（2020年5月20日時点）愛知目標の達成に向けて、政府や非営利団体だけでなく、地方自治体、企業、農林漁業団体、教育研究機関、市民などあらゆる立場の人々が活動をしています。しかしながら、2020年になった今、愛知目標はほとんど達成できていないのが現実です。愛知目標の中間評価を行うために作成された、「地球規模生物多様性概況第4版」によると、評価の指標となった56つの要素のうち86%において「達成には不十分」、または「進展なし・後退している」と評価されました。目標達成のためにはさらなる活動が必要です。

②次の10年の目標、“ポスト愛知目標”

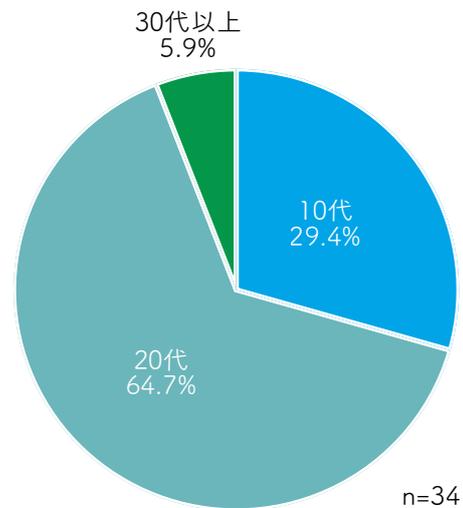
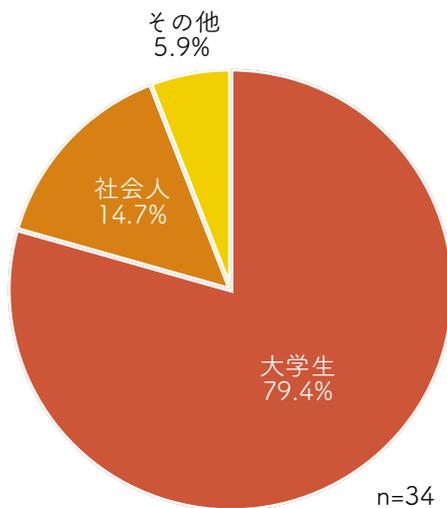
2020年から2030年の生物多様性の世界目標として、現在、ポスト愛知目標（仮称）が作られています。2020年1月には国連の生物多様性条約事務局によってその草案が発表されました。その中には、長期目標として「2030年・2050年ゴール」が設けられました。具体的には30年までに生物多様性の損失を実質ゼロに、50年までに20%以上向上させることを意味します（2020年、藤田）。正式には生物多様性条約第15回締約国会議(COP15)にてポスト愛知目標が決まります。ポスト愛知目標では、気候変動枠組条約やSDGsとの相乗効果を考慮したり、目標のモニタリング指標の設定するなど、これまでの愛知目標よりも目標の実装を意識しています。

“食べる”の分析結果

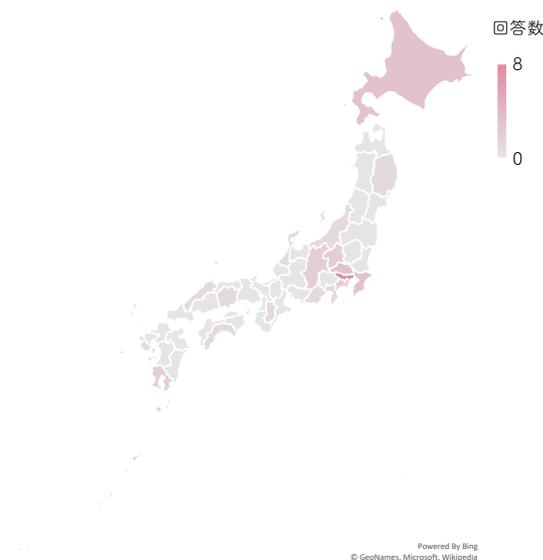
① 各アンケートの分析



所属・年齢

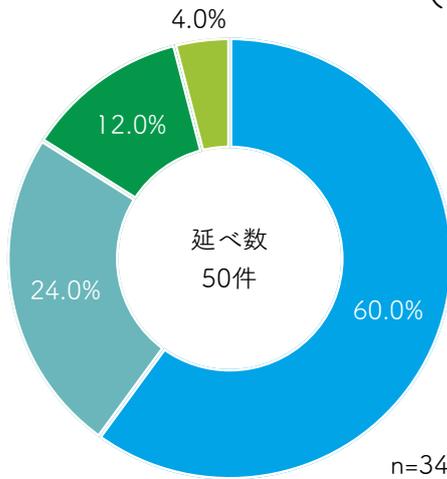


出身地(愛着のある土地)



🍴 生きものの暮らしや食にどう関わっているか

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 生きものを「食べる」ことに関わっている
- 生きものを「生産する」ことに関わっている
- 生きものを「捕る(採る)」ことに関わっている
- その他

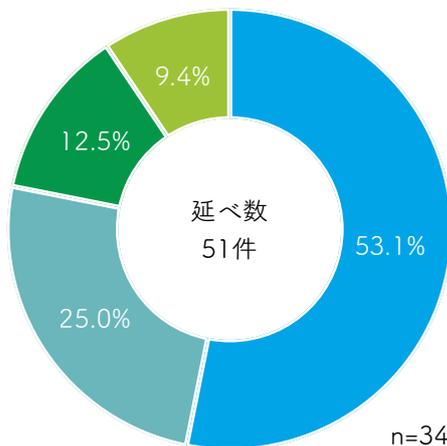
[比較対応記号]

○¹

多くの回答者が、生きものを「食べる」ことに関わっていると答えました。その他の回答には、生きものを食品として「販売する」ことや、「部屋にいる虫を殺す」ことで関わりを感じているなどがありました。

🍴 “食べる”ことに関して、実際に活動していること

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 食べ物の調理、料理などに関わる活動
- 農業など、第一次産業に関わる活動
- 狩猟に関わる(関する)活動
- その他

[比較対応記号]

○²

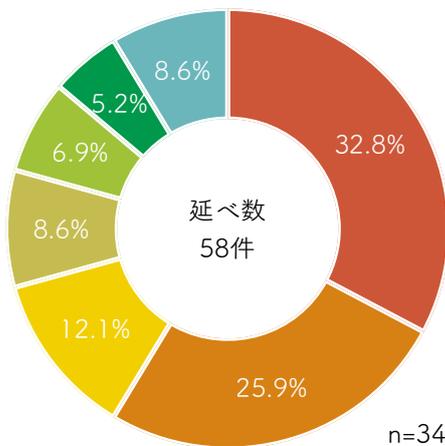
実際に活動している内容について尋ねたところ、「食べ物の調理や料理」に関わることを通して、生きものの暮らしに関わる場合が多いということがわかりました。次に多い回答は、農業などの第一次産業を通して“食べる”ことに関わる活動をしているという回答でした。少数ではありますが、実際に狩猟に関する活動を行っているわかものもいることがわかりました。

その他の回答には、「子ども食堂」での活動や「農業に関わる活動をしている方々の相談にのっている」といった回答がありました。



誰と活動しているか

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 1人で
- 学生と
- 地域のひと
- 会社の社員と
- NGOやNPOなどの団体のメンバーと
- 専門家(大学の教授や研究所の方など)と
- その他

[比較対応記号]

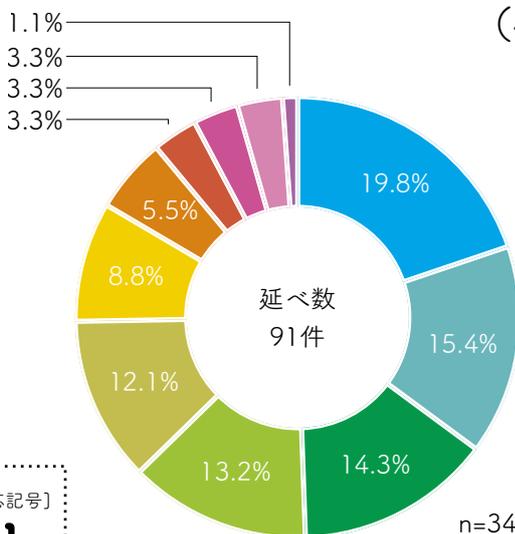


特に回答数が多かったのは、「1人で」・「学生と」という回答でした。また、その他では「家族と」、「研究室の仲間と」、「飲食のアルバイト仲間と」というような回答も見られました。



“食べる”に関する活動を行う上でのモチベーション

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 食べ物の生産・狩猟採集・食事に関わるのが好きだから
- 生きものやその環境が好きだから
- 周りの人と一緒に活動するのが楽しいから
- 活動が自分の癒し、リラックスになるから
- 生活、給料のため
- 生きものやその環境の価値や現状を表現したいから
- 仕事の一部、信念(ライフワーク)だから
- 自分のせいで犠牲になる生きものを減らしたいから
- 良いことをした気分になるから
- 特に意識したことはない
- その他

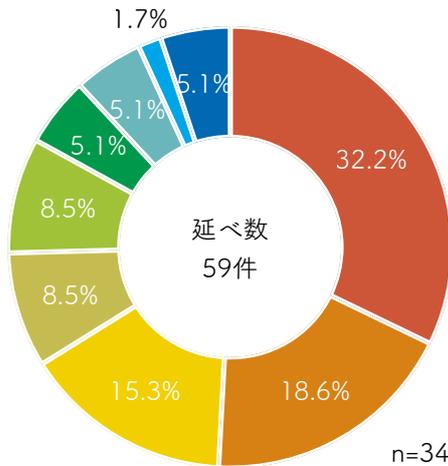
[比較対応記号]



自分が行っている活動そのものや食べるのが好きという回答が特に多い結果となりました。それに続いて、「生きものやその環境が好きだから」、「周りの人と一緒に活動するのが楽しいから」などの選択肢が多くの回答数を集めました。また、その他の回答として、「食べることは生きることだから」という回答がありました。

④ “食べる”活動を続ける上で困っていること

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 値段が高いこと
- 技術、知識、経験不足
- 手に入りにくいこと
- 周りからの理解
- 特に困っていることはない
- 人手不足
- 資金繰り
- 法制度、手続きのわずらわしさ
- その他

[比較対応記号]



特に回答数が多かったのは、「値段が高いこと」、「技術・知識・経験不足」、「手に入りにくいこと」などの選択肢でした。生きものの暮らしに配慮した食べる活動を行う上で、そもそもあまり普及していないことと、高価格であることが活動の障害となっていることがわかります。その他の回答の中には、「食事付きのところに住んでいるので食べるものをなかなか選べない」などの回答がありました。

④ コラム④：イベント紹介 〈TABLE FOR EARTH〉

皆さんは普段食事をする時に、その食べ物がどこから来たのか、考えることはありますか？

弊団体とTABLE FOR TWO-University Association(TFT-UA)とがコラボすることで実現したこのイベントでは、食べ物の産地が抱える環境問題を学びながら、地球の健康を考えた料理を作りました。

TABLE FOR TWO とは、開発途上国の飢餓と先進国の肥満や生活習慣病の解消に同時に取り組む、日本発の社会貢献運動のことで、TFT-UAは、TFTの活動を行う学生たちが集まる連合組織です。

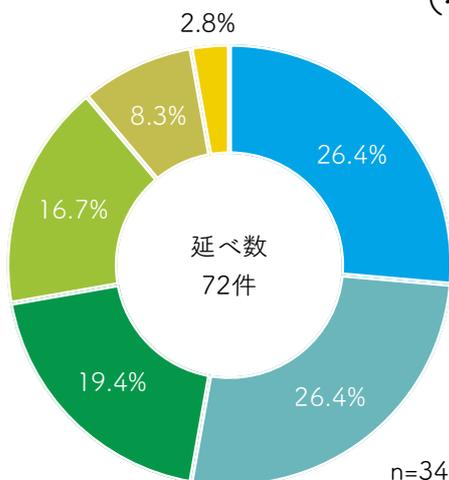
日頃「ヘルシーな食事」とは何かを考えているTFT-UAのみなさんと、「地球のヘルシー」を考えたこの企画は、他分野で活動する皆さんとの交流の場となり、我々にとっても新たなチャレンジとなりました。皆さんも、美味しく食べながら、みんなの健康も、生きものの暮らしのことも大切に活動する、はじめませんか？

TABLE FOR TWO
公式サイト



🍴 食料の生産・狩猟採集・食事などをするとき、気を付けること

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 地元で採れた（獲れた）ものを食べる、地産地消する
- 旬の食材を選ぶ
- 材料や、原料が作られる地域の人々や環境にやさしい食べ物を選ぶ
- 農薬などを極力使わず、健康にも良いものを選ぶ、作る
- 計画的に生産されているもの、乱獲されていないものを食べる
- その他

[比較対応記号]



[関連する愛知目標]

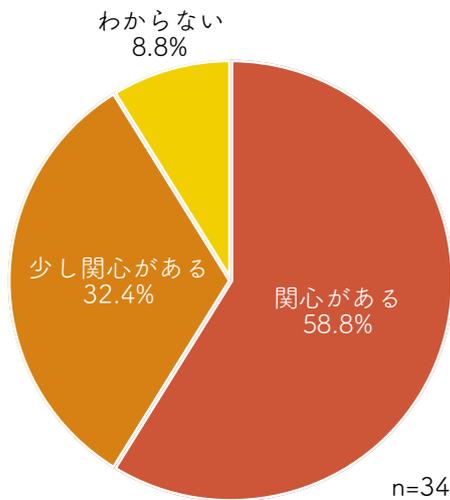
[対象の選択肢]

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
|  | 目標4: 生産と消費 環境に無理をさせず続けられる生産と消費を行おう。 | ● | | | |
|  | 目標5: 生息地の破壊 森など 生きものが暮らす場所が失われるスピードを半分まで抑えよう。ゼロを目指そう。 | ● | | | |
|  | 目標6: 過剰漁獲 魚や貝など水産資源は、これからも無理なく続けられるように漁獲しよう。 | ● | | | |
|  | 目標7: 農業・林業・養殖業 農業・養殖業・林業が行われる地域を、長く無理なく活動できるよう管理しよう。 | ● | ● | ● | ● |
|  | 目標8: 化学汚染 化学物質・肥料・農薬は、生物多様性に有害でない範囲まで抑えよう。 | ● | | | |
|  | 目標18: 伝統的知識 生きものや自然にまつわる伝統的な知識を大切にしよう。 | ● | | | |

回答者数の中で、少なくとも70%の方々が、愛知目標7に貢献する活動を行っていることがわかりました。特に回答数が多かった選択肢は、「地産地消をする」、「旬の食材を選ぶ」という結果になりました。また、その他の回答には、「餌、薬品などの休薬」、「廃棄間際の商品を購入する」などがありました。

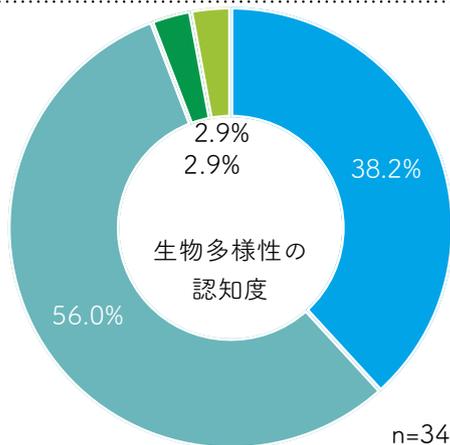
選択肢のうち、「計画的に生産されているもの、乱獲されていないものを食べる」は最も少ない回答数でした。この結果は、消費者が食べる際に乱獲などの基準を判断できる仕組みが、少ないからではないかと考えられます。FSC認証など、消費者が判断しやすい仕組みのさらなる導入が求められます。「旬の食材を選ぶこと」や「地産地消をする」ことは、回答者にとって行いやすい行動であることがわかりました。これらの行動は、目標4.7.18などに何かしら貢献する活動であると考えられます。

④ “生きもの”や“生きものの暮らし”への関心

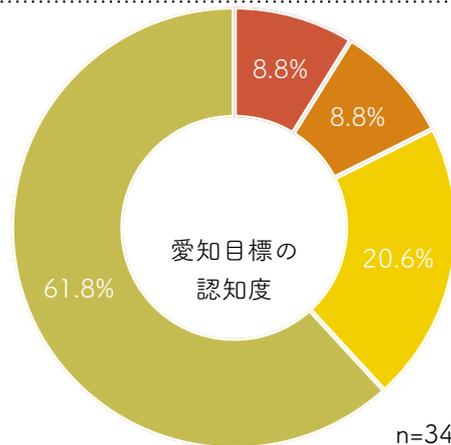


58.8%の方が「関心がある」と回答しました。現代社会では、生きものの住む環境や暮らし方を知ったうえで、食材を選んだり、食事をしたりする機会が少ないですが、それにも関わらず半数を超えました。

④ “生物多様性”と“愛知目標”の認知度



- 人に説明できる
- 言葉の意味は知っている
- 意味は知らないが、言葉は聞いたことがある
- 知らない



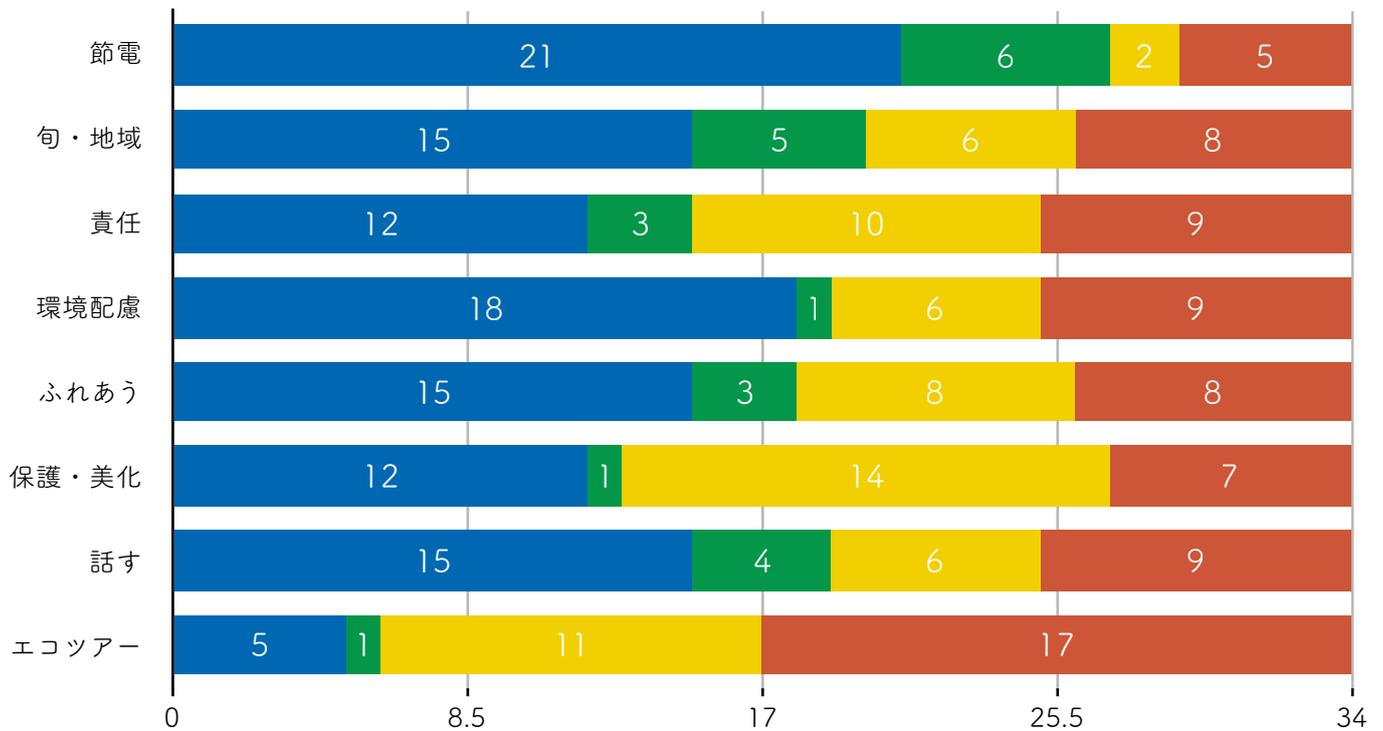
- 人に説明できる
- 言葉の意味は知っている
- 意味は知らないが、言葉は聞いたことがある
- 知らない

生物多様性については、**9割以上の回答者が「人に説明できる」、「言葉の意味は知っている」と回答**しました。生物多様性とは何なのかを説明できる回答者の割合は5つのキーワードの中で最も低く、「言葉の意味は知っている」を選んだ回答者も最も少なかったです。**耳にする機会は多いものの、生物多様性そのものについて学ぶ機会はなかなかないのではないかと考えられます。**

愛知目標については、「知らない」と答えた割合は、「選ぶ」の回答者に次いで2番目に低い割合となりました。「人に説明できる」回答者の割合も8.8%と最も低い結果でした。

生物多様性に寄与する日常行動の状況

- 生物多様性に寄与していると意識しながら行動している(A群)
- 生物多様性に寄与していると意識していないが、行動している(B群)
- 生物多様性に寄与しているが行動できていない(C群)
- どちらでもない(D群)



※それぞれの群の説明、行動の説明は、総合的な分析のグラフ（本白書 P.23）にあります。

「食べる」のキーワード選択者の生物多様性に寄与する日常行動の状況は以上の結果となりました。群ごとの割合はA群が41.5%、B群が8.8%、C群が23.2%、D群が26.5%でした。これは他の4つのキーワードと比較して、A群がワースト、B群が3番目、C群が同率で2番目、D群が1番目に多い結果となりました。

次に行動ごとの結果を見ていきます。「節電」はA群が61.8%、B群が17.6%、C群が5.9%、D群が14.7%でした。A群、B群が他の7つの行動と比べて最も多く取り組みやすい活動である事が分かります。

「旬・地域」はA群が44.1%、B群が14.7%、C群が17.6%、D群が23.5%でした。この行動は食べることに密接に関連すると考えられるためA群、B群の割合が他のキーワードと比べて大きいことが予想されました。結果、A群とB群の合計は「選ぶ」に次いで2番目に多い結果でした。

「責任」はA群が35.3%、B群が8.8%、C群が29.4%、D群が26.5%でした。A群の割合がもっとも高かったものの他の4つのキーワードと比較するとA群の割合がワーストでその代わりにC群、D群がそれぞれ2番目に多い結果となりました。「責任」ではそもそも生きものを飼育していない可能性があるため、評価が難しいところですがD群が多い点は啓発活動によって克服するべき点です。

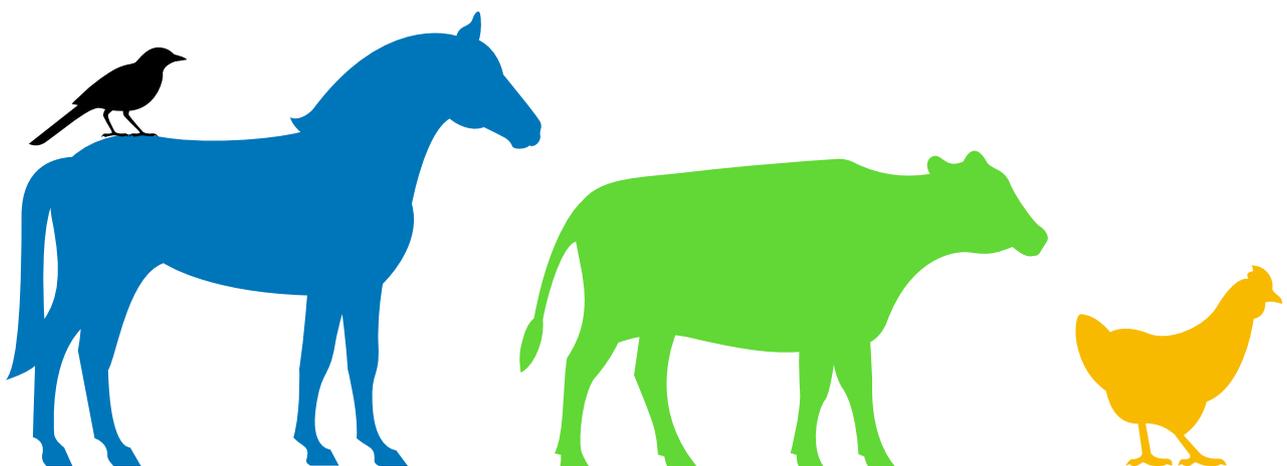
「環境配慮」はA群が52.9%、B群が2.9%、C群が17.6%、D群が26.5%でした。A群がもっとも高い割合であった一方で、D群が他の4つのキーワードと比較して、最も大きい結果となりました。B群とC群を比較するとC群が大きいので、生物多様性に寄与すると理解していても行動に移ることが難しいことが考えられます。これは、**「環境配慮」商品を購入することが経済的に負担である**ことが要因だと考えられます。そして、「食べる」の回答者で特に「環境配慮」のD群が他の4つのキーワードの回答と比較して多かった要因は上述のC群が大きかった理由に加え、「環境に配慮している」とは言っても、それが生物多様性にも寄与するという連関性に気づいておらず、行動に移す一歩まで踏み出さないと考えられます。

「ふれあう」はA群が44.1%、B群が8.8%、C群が23.5%、D群が23.5%で、A群が最大という結果でした。しかしながら、D群では他の4つのキーワード中、最も多い結果となりました。こちらも「環境配慮」のところと同様でC群がB群より大きいことから、なんらかの障害によって「ふれあう」行動が妨げられていると考えられます。考えられる理由としては経済的理由よりも時間的余裕がないことやきっかけがないことが挙げられます。このような**「ふれあう」機会の創出**を弊団体も進めていきたいと思えます。

「保護・美化」はA群が35.3%、B群が2.9%、C群が41.2%、D群が20.6%でした。他の4つのキーワードと比べるとA群がワーストであった一方でC群が最も多かったです。また、「食べる」の他の7つの行動と比較してもC群の割合が最も大きい結果となりました。**「保護・美化」活動は参加する上で多くの障壁がある**と考えられるためひとつひとつ除去していく努力が必要です。

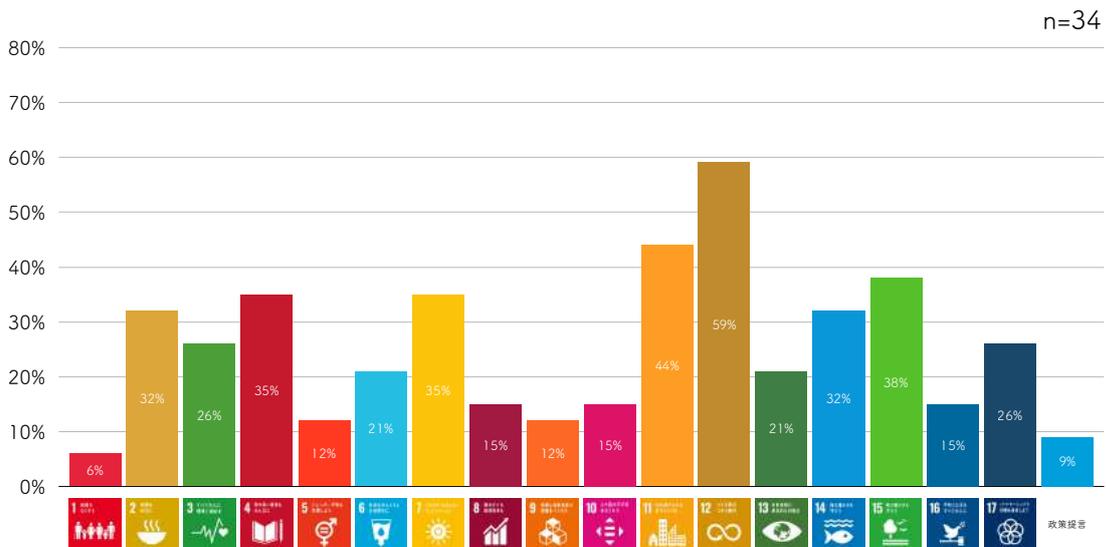
「話す」はA群が44.1%、B群が11.8%、C群が17.6%、D群が26.5%でした。A群が最大で他の4つのキーワードと比較しても遜色ない結果となりました。

「エコツアー」はA群が14.7%、B群が2.9%、C群が32.5%、D群が50.0%でした。D群が最大で他の4つのキーワードと比較しても最も多かったです。**「食べる」に関連する活動を行う回答者はあまり「エコツアー」に親しみがない**ことが分かります。今後は「エコツアー」による環境へのダメージに気を配りつつ、食をテーマとしたエコツアーや自然体験会などの企画を充実させる必要があります。





日頃の活動に関連するワードとSDGs



“食べる”×生きものの暮らしのアンケートの回答者は、目標12（つくる責任、つかう責任）に関連するワードの回答が59.0%でした。これは18個の選択肢の中で最も回答の割合が大きいです。その次に選択した割合が大きかったのは目標15（陸の豊かさを守ろう）でした。他の4つのキーワードのアンケートの回答に比べると、1人当たりが選択した目標の数が少なく、社会的な課題への関心が少し低いと考えられます。目標1（貧困をなくそう）が6%と最も低いことが印象的でした。わかものにとって、貧困問題に現実味を感じないこと、貧困問題にアプローチできる手段があまりないことなどが理由として考えられます。

② “食べる”のまとめ

“食べる”は5つのキーワードの中で最も回答数が多いキーワードでした。多くのわかものにとって身近なキーワードであり、回答者の属性も多様である印象を受けました。

活動としては、生産、販売などの回答もありましたが、「食べることによって生きものや生きものの暮らしに関わっている」と多くの方が答えていました。具体的な行動としては「食べること」が最も多く、他に狩猟や子ども食堂という回答がありました。

“食べる”活動は1人や学生、地域の人と共に活動する人が多いことがわかりました。その他の回答としては家族というものがありました。選択肢にあればもっと回答があったと考えられます。

活動を行うモチベーションとしては、「食に関わる活動そのものが好きであるから」と答えている方が多かったです。一方、困っていることとしては「値段が高いこと」や「技術・知識・経験不足」というものが挙げられました。

また、愛知目標に絡めて「活動する上で気をつけていること」を尋ねました。結果、「**地産地消**」や「**旬の食べ物**」を選ぶ方々が多く、愛知目標別にみると少なくとも70%が目標7に貢献しており、最多でした。

"食べる"のアンケート回答者の生物多様性に寄与する日常行動と意識の質問では活動しつつ、生物多様性を意識している層が最も多い結果となりましたが、他の4つのキーワードと比較すると少なかったです。これは"食べる"が最も回答数が多く、多様な興味を持つ方が回答者に含まれていたからだと考えられます。

SDGsに関連させて社会課題に対する興味を尋ねる質問では、"食べる"を選択した回答者は他の4つのキーワードのアンケート回答者に比べて、**一人当たりの興味を持っている社会課題が少ない**結果となりました。これも生物多様性に寄与する日常行動・意識と同じ理由が考えられます。**最も選ばれたのは目標12（つくる責任、つかう責任）**に関連するワードの回答が約59%でした。

わかものネットとして

食というものがわかものにとって生きものとの繋がりを感じる最も身近なツールであることが分かりました。それを踏まえて、弊団体としてはより生きものや生きもの暮らしに関心をもつ方々の裾野を広げるために、食と生物多様性を結び付けたイベントを外部の団体と協働していきます。

今回のアンケートでは"食べる"活動で困っていることとして「**値段が高いこと**」、「**技術・知識・経験不足**」というものが挙げられました。この結果を見ると逆に料理の技術や節約料理の作り方について関心があることが伺えます。旬の食材や地産地消を取り入れることは生物多様性や環境の観点から、さらには家計の観点からも有用なことです。また、SDGsの目標12に対する関心も強かったことから食材の無駄のない調理法への関心も高いと考えられます。

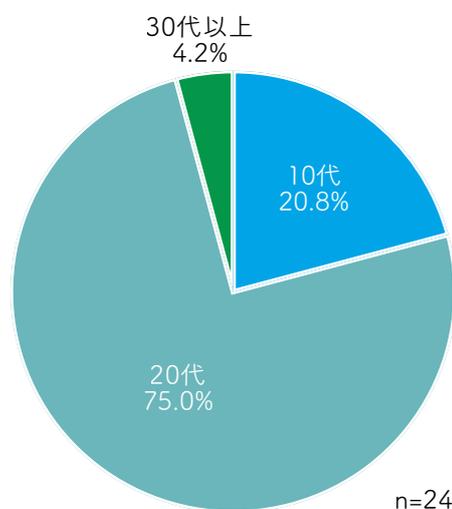
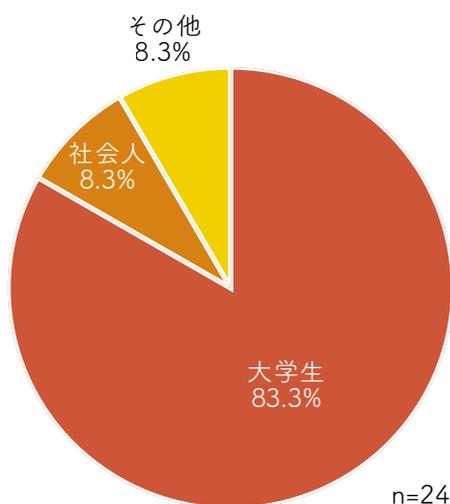
これらのことから、**旬の食材や地元の特産品を用いた郷土料理の作り方、食材の無駄のない調理法を学ぶイベントは、生物多様性と参加者の関心の両方に貢献できるため、弊団体としても積極的に開催していきたい**と思います。

“触れる”の分析結果

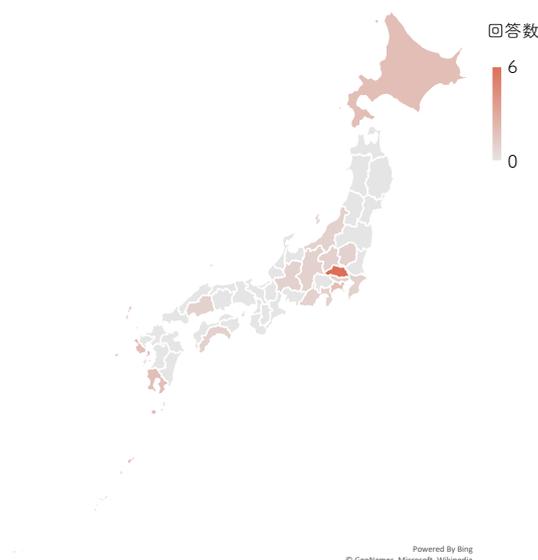
① 各アンケートの分析



所属・年齢



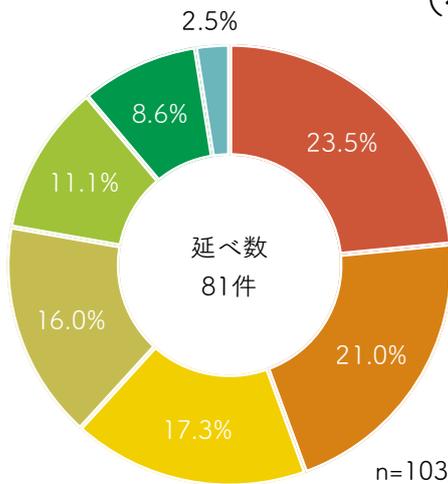
出身地(愛着のある土地)





どんな自然に触れているか

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 森林
- 里山
- 川・湖
- まち (都市を含む)
- 海
- 湿地
- その他

[比較対応記号]

○1

最も回答数が多かったのは、順に「森林」、「里山」、「川・湖」でした。回答者の数が24人だったのに対して、延べ数が81件であったことから、それぞれが複数の自然に意識的に触れていることがわかります。

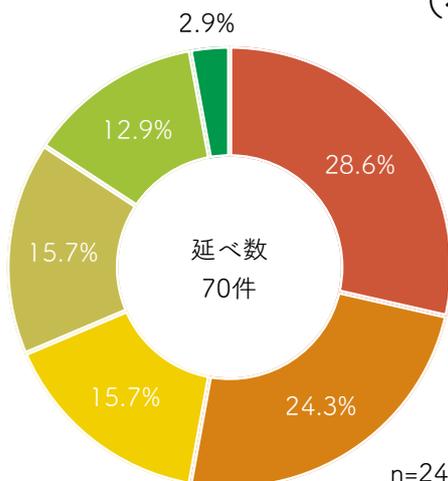
具体例：

安平、鶴居、キナンベツ、北海道駒ヶ岳、大沼国定公園、北海道豊平川、石狩川、札内川、釧路湿原、北海道、津軽海峡、高尾山、福島県只見町、水元公園、御岳山、多摩川、奥多摩、東京湾、神奈川県三浦郡葉山町、厚木、三浦半島、相模川、静岡県安倍川、静岡市梅ヶ島大代地区、富士宮市稲子地区、長崎、キャンパス内、実家の近所、さいたま北部の田園風景、自宅周辺、キャンパスとその周辺の河川など



自然にどのように触れているか

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 自分に身近な自然を、見たり聞いたり感じたりして
- 様々な地域に旅行に行ったり、出かけたりする中で
- 生きものを育てたり、環境を管理したりして
- 自然について研究したり、調査したりして
- 自然環境の中でスポーツをしたり、アクティビティをして
- 思想や宗教心から

[比較対応記号]

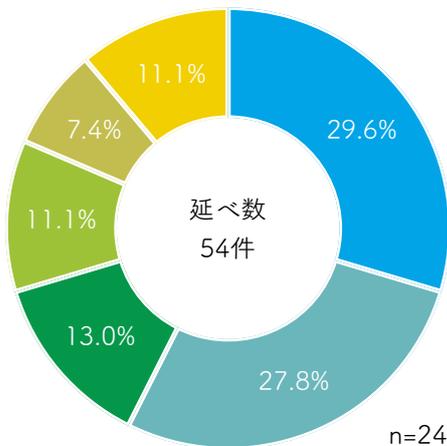
○2

「身近な自然」、「旅行中に」、「育成、管理」、「研究」などで自然に触れているという傾向が見られました。24人の回答者数に対して、延べ数70件の回答が得られたことから、1人の回答者が複数の方法・機会自然と触れているということがわかります。



誰と一緒に活動しているか

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 学生と
- 1人で
- 専門家（大学の教授や研究所の方など）と
- NGOやNPOなどの団体のメンバーと
- 地域の人と
- その他

[比較対応記号]

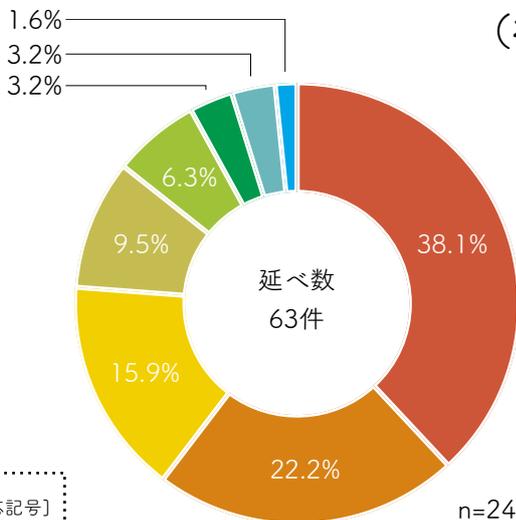


「1人で」・「学生と」という回答が約60%を占める結果となりました。その他の回答では「家族と」、「友人と」等が見られました。



自然に“触れる”活動に取り組む理由

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 生きものやその環境が好きだから
- 周りの人と一緒に活動するのが楽しいから
- 生きものやその環境の価値や現状を表現したいから
- 自分のせいで犠牲になる生きものを減らしたいから
- 仕事の一部、信念（ライフワーク）だから
- 良いことをした気分になるから
- 特に意識したことはない
- その他

[比較対応記号]

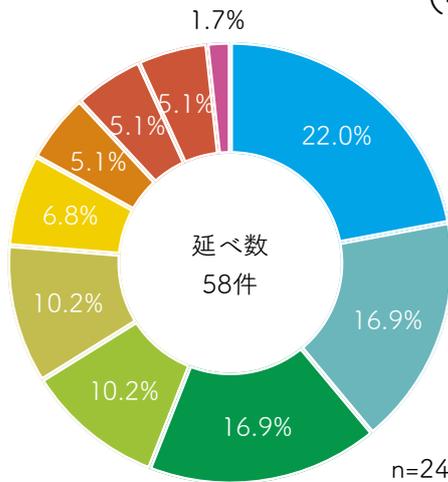


特に回答数が多かったのは、「生きものやその環境が好きだから」、「周りの人と一緒に活動するのが楽しいから」という回答でした。自分の興味や関心、楽しさの追求の先に自然に“触れる”という活動があるということがわかりました。また、その他の回答には「自然環境に興味を持っている人や専門家の人と繋がりたい」というものがありました。



“触れる”活動する上で困っていること

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 資金繰り
- 活動場所のアクセス
- 技術、知識、経験不足
- ネットワーク不足
- 人手不足
- 周りからの理解
- 活動場所の確保
- 法制度、手続きの煩わしさ
- 特に困っていることはない
- その他

[比較対応記号]

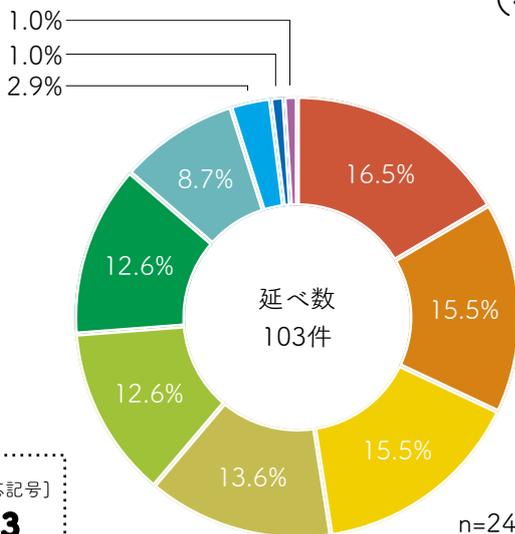
◇2

多くの回答者が活動する上で困っていることとして、「資金繰り」、「活動場所のアクセス」、「技術、知識、経験不足」を挙げました。その他の回答には「人間関係」という回答も見られました。



自然に“触れる”活動をする上で心がけていること

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 周りの環境に配慮して行う (あまり生きものを刺激しない)
- その場所のルールに従っている
- 触れている自然について自分なりにもっと知ろうとしている
- 片付け、ごみ拾いを行う
- 自分の活動を他の人にも広げようとしている
- 希少な生きものを持ち帰らない
- 触れている自然が日本の伝統文化や生活に密接に関わっていることを意識している
- 道具を持ち込むときは消毒などをして、他の地域の生きものを持ち運ばないようにしている
- 特に気にしていない
- その他

[比較対応記号]

◇3

どの選択肢においても概ね満遍なく回答数が得られました。回答者数が24人であったのに対して、延べ回答件数が103件であったことから、それぞれの回答者が複数のことについて活動中に心がけており、環境に負荷を与えないように注意しながら活動していることがわかります。その他の回答としては「その土地の野草を食べる」がありました。

| | [関連する愛知目標] | | [対象の選択肢] |
|---|--|---|----------|
|  | 目標1: 普及啓発 みんなが、生物多様性は大切なんだと知ろう。その気持ちをもって、行動しよう。 | ● | |
|  | 目標5: 生息地の破壊 森など 生きものが暮らす場所が失われるスピードを半分まで抑えよう。ゼロを目指そう。 | ● | ● |
|  | 目標6: 過剰漁獲 魚や貝など水産資源は、これからも無理なく続けられるように漁獲しよう。 | ● | |
|  | 目標8: 化学汚染 化学物質・肥料・農薬は、生物多様性に有害でない範囲まで抑えよう。 | ● | |
|  | 目標9: 外来種 環境に害をあたえる外来種が増えるのを防ごう。入ってこないようにしましょう。 | ● | ● |
|  | 目標10: 脆弱な生態系の保護 サンゴ礁など、環境の変化に特に弱い生態系を守ろう。 | ● | |
|  | 目標12: 種の保全 絶滅危惧種を絶滅から防ぎ、ふつうの種に戻していこう。 | ● | |
|  | 目標13: 遺伝的多様性 一つの種のなかでも、多様さを大事にしよう。 | ● | |
|  | 目標15: 復元と気候変動対策 傷ついた生態系を、15%以上回復させよう。気候変動や、砂漠化の問題に貢献しよう。 | ● | |
|  | 目標18: 伝統的知識 生きものや自然にまつわる伝統的な知識を大切にしよう。 | ● | |
|  | 目標19: 知識・技術の向上と普及 生物多様性に役立つ知識や技術を豊かにしていこう。 | ● | |
|  | 目標20: 人材・資金 活動を支えるために大切な人材と資金を、協力を集め増やしていこう。 | ● | |

触れる活動をしている方々は、12個の愛知目標に、何かしら貢献する活動を行っていると考えられます。様々な自然環境や生きものそのものと接することを楽しみながら、生物多様性を守る活動を行っています。

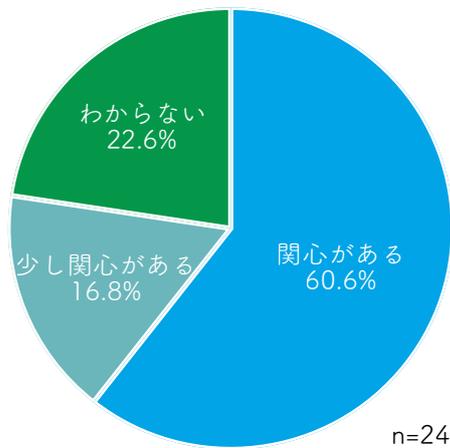
生息地の破壊をしないようにする活動（目標5）は、30%の方々が行っています。普及啓発（目標1）を心がけている方々は、12.6%でした。体験を伴う普及啓発を重視していると考えられます。

目標9に関連する外来種の問題は、日本の生物多様性の4つの危機のうちの1つです。心がけている方々は約16%でした。

人口減少などによるアンダーユースの問題も、危機の1つですが、伝統的知識（目標18）や自然と文化の繋がりに関心をもって活動している方は、8.7%でした。



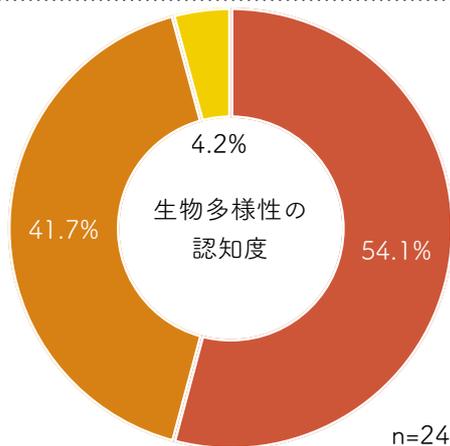
“生きもの”や“生きものの暮らし”への関心



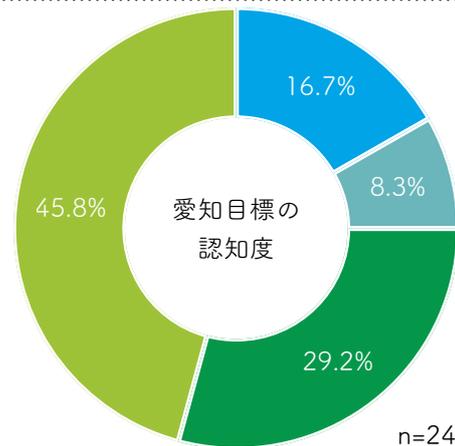
「関心がある」の回答者が61%と最も高かったです。「わからない」という回答が、他のキーワードの回答者に比べて高かったのが印象的でした。



“生物多様性”と“愛知目標”の認知度



- 人に説明できる
- 言葉の意味は知っている
- 意味は知らないが、言葉は聞いたことがある
- 知らない



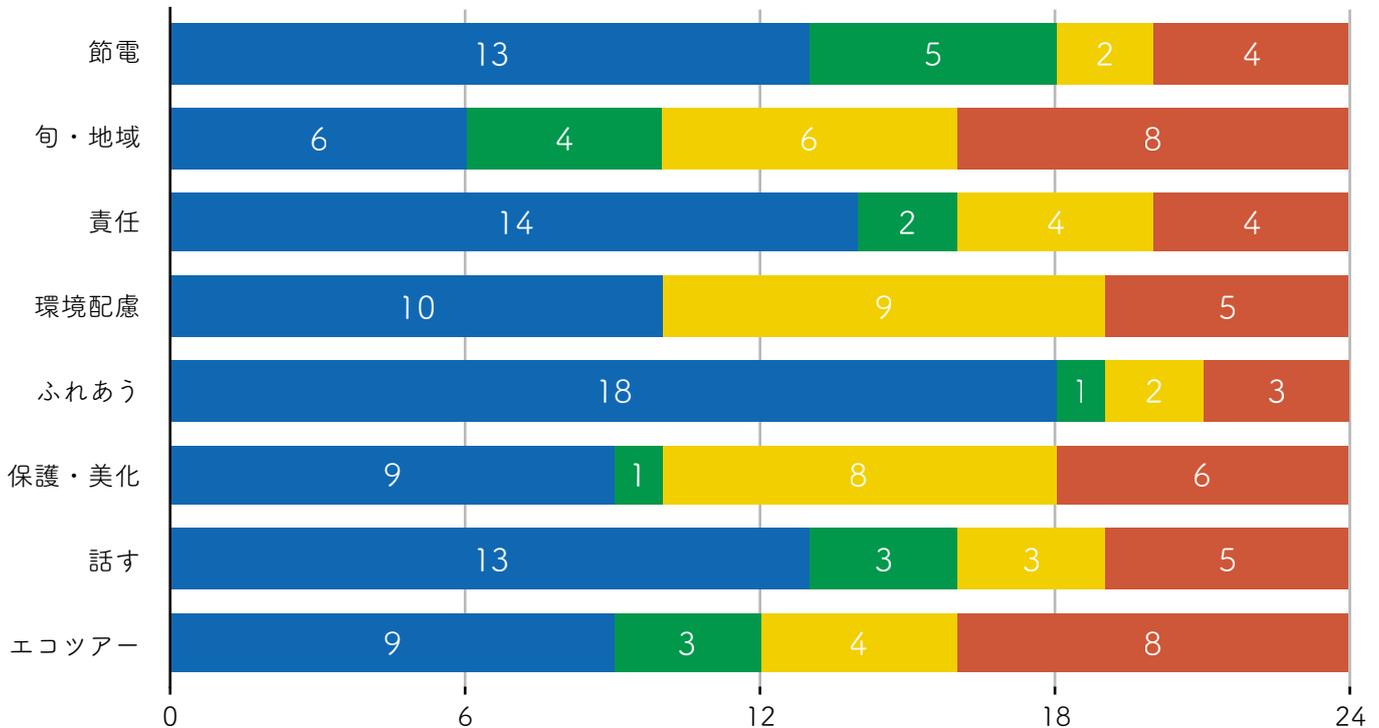
- 人に説明できる
- 言葉の意味は知っている
- 意味は知らないが、言葉は聞いたことがある
- 知らない

生物多様性については、「説明できる」・「言葉の意味は分かる」の合計割合が95.9%とすべてのアンケートの中で最も高い結果となりました。

愛知目標については、約半数の方が、愛知目標について「知らない」と答えました。しかし、「人に説明できる」という方々は、“伝える”・“守る”の回答者と並んで高い割合でした。

生物多様性に寄与する日常行動の状況

- 生物多様性に寄与していると意識しながら行動している(A群)
- 生物多様性に寄与していると意識していないが、行動している(B群)
- 生物多様性に寄与すると思っているが行動できていない(C群)
- どちらでもない(D群)



※それぞれの群の説明、行動の説明は、総合的な分析のグラフ（本白書 P.23）にあります。

「触れる」のキーワード選択者の生物多様性に寄与する日常行動の状況は以上の結果となりました。群ごとの割合はA群が47.9%、B群が9.9%、C群が19.8%、D群が22.4%でした。これは他のキーワードと比較して、A群が2番目、B群が2番目、C群が4番目、D群が4番目に多い結果となりました。C群、D群が全体的に低く、**「触れる」活動をしている回答者は行動することが多い**と言えます。

次に行動ごとの結果を見ていきます。「節電」はA群が54.2%、B群が20.8%、C群が8.3%、D群が16.7%でした。A群がもっとも大きかったです。他の行動と比較するとB群の割合が最大で、啓発活動によりA群を大きくすることが可能だと考えられます。

「旬・地域」はA群が25.0%、B群が16.7%、C群が25.0%、D群が33.3%でした。D群が最大でした。A群の割合は他の4つのキーワードと比較しても、他の7つの行動と比較してもワーストでした。一方で、**B群の割合も大きい点が特徴的で啓発活動の有効性**がみられます。

「責任」はA群が58.3%、B群が8.3%、C群が16.7%、D群が16.7%でした。A群の割合は他の4つのキーワードと比較して最も大きく、他の7つの行動と比較しても2番目に大きいものでした。「触れる」の回答者には昆虫採集を趣味としている方なども含まれるため、生きものを飼育する

機会が多いと考えられます。また、日常的に自然に触れる方々は身の回りの自然に潜む外来種にも目を向ける機会が多いためか、生きものの飼育に責任を感じるようになったと考えられます。

「環境配慮」はA群が41.7%、B群が0.0%、C群が37.5%、D群が20.8%でした。A群が最大でしたが他の4つのキーワードと比較するとワーストでした。この要因はB群がおらず、C群がかなりの割合を占めることから**経済的要因**が考えられます。

「ふれあう」はA群が75.0%、B群が4.2%、C群が8.3%、D群が12.5%でした。A群の割合が他の4つのキーワード、他の7つの行動と比較して最も大きい結果となりました。「ふれあう」は"触れる"活動の根幹をなす行動であるため納得の結果でした。

「保護・美化」はA群が37.5%、B群が4.2%、C群が33.3%、D群が25.0%でした。A群が最大で他の4つのキーワードと比べて遜色のない結果となりました。また、C群がかなりの割合を占めており、「保護・美化」活動を身近なものにしていく必要があります。

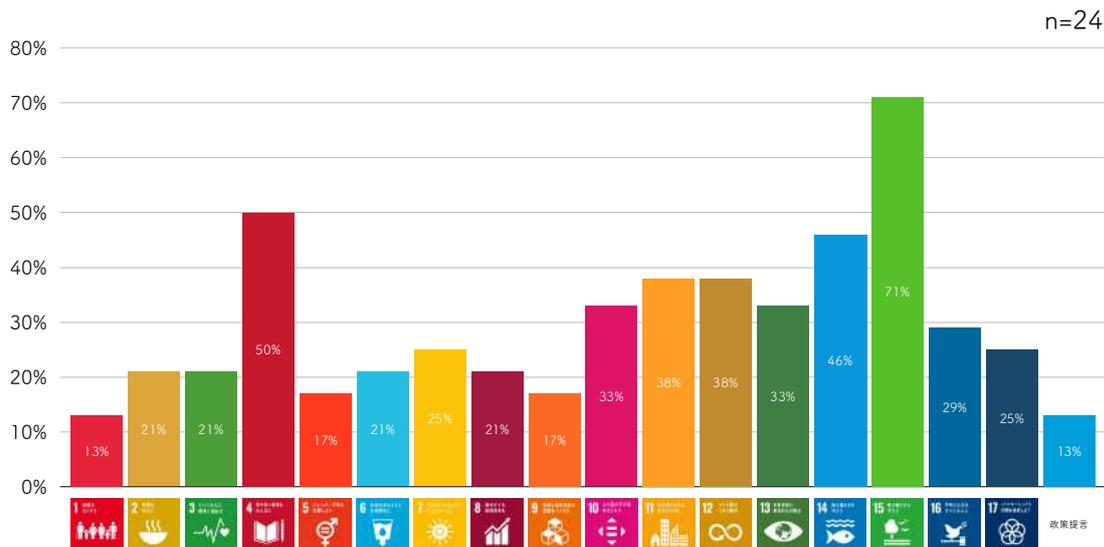
「話す」はA群が54.2%、B群が12.5%、C群が12.5%、D群が20.8%でした。A群が最大でした。どの群も他のキーワードや行動と比較して遜色ない結果となりました。B群の割合とC群の割合が一致しているので啓発活動と話す機会の創出の二つに取り組むことが必要です。

「エコツアー」はA群が37.5%、B群が12.5%、C群が16.7%、D群が33.3%でした。A群が最大で他の4つのキーワードと比較しても最大でした。"触れる"活動者がエコツアーや自然体験会に良く参加していることが伺えます。





日頃の活動に関連するワードとSDGs



触れる×いきものの暮らしの回答者のうち、最も多くの人を選択していたのは、目標15（陸の豊かさを守ろう）の71%、その次に多かったのが、目標4（質の高い教育をみんなに）の50%でした。“触れる”の回答者は、触れたり体験したりすることが、理解や知識の普及のために重要な手段であると考えている方が多いのではないのでしょうか。他のキーワードの回答者同様に、目標1（貧困をなくそう）や政策提言を選択した方は、他の目標と比べて少ない結果となりました。

② “触れる”のまとめ

“触れる”は5つのキーワードの中で2番目に回答を集めました。回答者は、フィールドで環境教育や研究、自然学校などを通して自然に触れている方が多かったです。最も多かったのは見たり聞いたり感じたりして触れている方で、自然を体感することを重視している方が多いようです。

触れている自然環境は、森林、里山などが特に多く選択されていました。多くの方が複数選択しており、様々な環境が相互に影響しあっている複合生態系をフィールドとして活動を行っている可能性があります。

このような生きものや自然に触れるときは「一人で」もしくは「学生と」行われることが多く、60%以上の回答がありました。

取り組む理由は「生きものやその環境が好きだから」、「周りの人と一緒に活動するのが楽しいから」という回答が多く、その他の回答には「自然環境に興味を持っている人や専門家の人と

繋がりたい」というものもありました。一方で困っていることとして「資金繰り」、「活動場所のアクセス」、「技術、知識、経験不足」が最も回答を集めました。

愛知目標を絡めて「活動する上で気をつけていること」を尋ねた結果、どの選択肢も満遍なく回答を得られました。愛知目標別にみると少なくとも**生息地の破壊をしないようにする活動（目標5）は、約30%の人が行っていました**。日本の生物多様性の4つの危機の1つである外来種の問題（目標9）について心がけている人は約16%でした。

"触れる"を選択した方の生物多様性に寄与する日常行動と意識の質問では**活動しつつ、生物多様性を意識している層が最も多く他の4つのキーワードと比較しても守るについて2番目に多かった**です。顕著だったのは「身近な生きものを観察したり、外に出て自然とふれあう」という回答で**約75%が生物多様性を意識しながら行動していました**。

SDGsに関連させて社会課題に対する興味を尋ねる質問では、最も回答が多かったのは**目標15（陸の豊かさを守ろう）の約71%**、その次に多かったのが、**目標4（質の高い教育をみんなに）の約50%**でした。

わかものネットとして

生きものや自然に触れるための活動を行っている方々は様々なフィールドで活動していることがわかりました。「より多くの美しい自然を見たい！ 風のざわめきや木々のそよめき、動物たちのじゃれた声を聞きたい！ 季節の花々や緑の香りを楽しみたい！」など自然と一体となって**五感をフルに活用したい！**ということがわかります。

より有意義に生きものや自然に触れるための活動を行うためには、多くの方々との情報交換、そして触れたときの感情の共有が大切だと考えられます。触れる活動に取り組む理由としても「人との交流」を挙げている方も多いです。

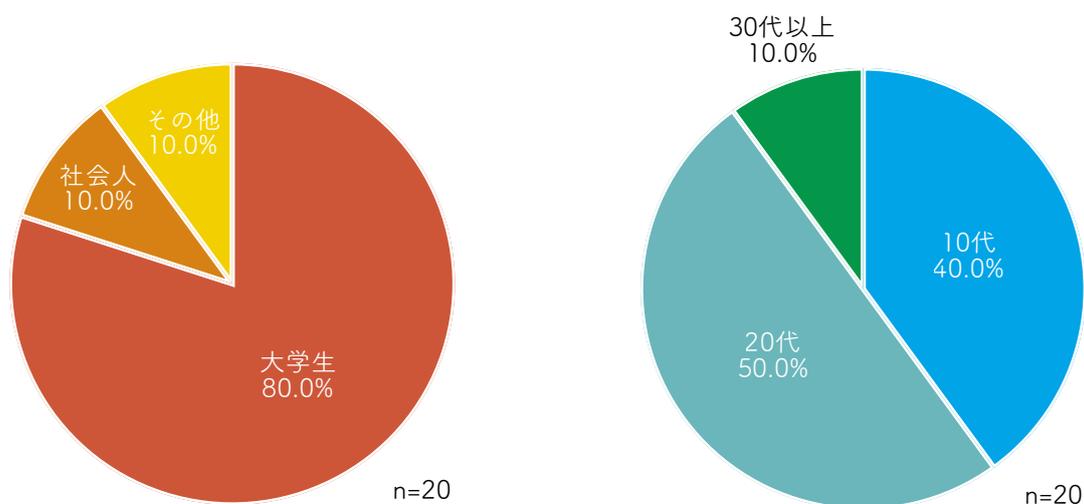
弊団体としては、こういった方々がお互いに繋がりやすい仕組みを作っていく必要があります。具体的には**イベントのアイスブレイクを工夫したり、イベント中に参加者同士のコミュニケーションが自然発生的に起こるよう工夫することが求められます**。

“伝える”の分析結果

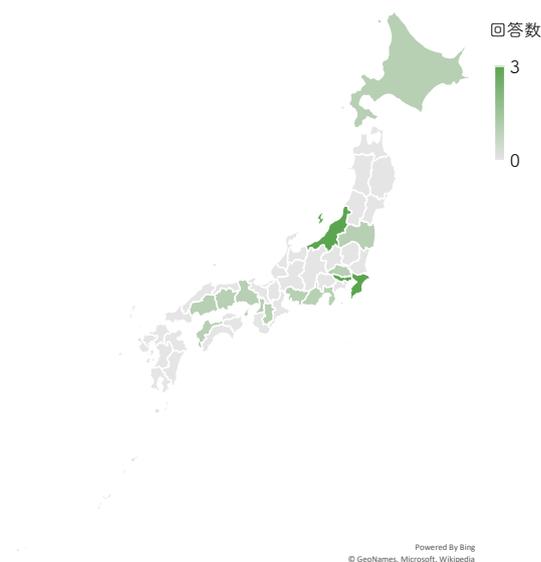
① 各アンケートの分析



所属・年齢



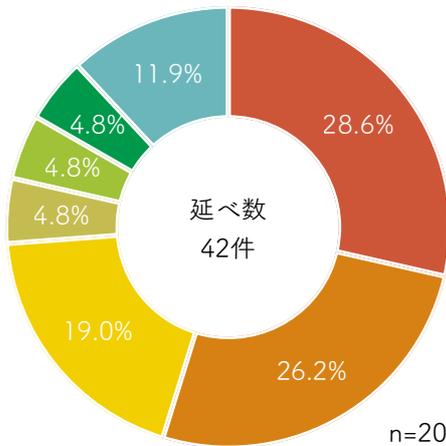
出身地(愛着のある土地)





“伝える”活動をどのようにしているか

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- SNS・メディアなどでの広報
- 勉強会・セミナーなどの実施
- 自然体験イベントの実施
- 地域の人と
- 自然にまつわる技術などのレクチャー
- 芸術（詩歌・音楽・絵画など）での表現
- デモ活動への参加
- その他

[比較対応記号]

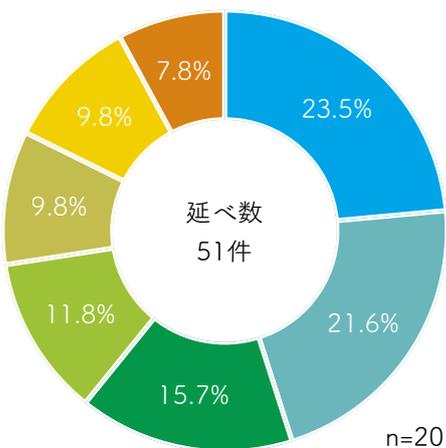
○1

特に多かった回答は、「SNS・メディアなどでの広報」・「勉強会・セミナー等の実施」という回答でした。その他の回答の中には、「環境啓発団体の実行委員活動」、「環境教育にまつわるゲームの実施」、「自然体験活動のボランティア」、「環境団体以外の一般所属団体への口伝え」などの回答が見られました。SNSやメディアは“伝える”という活動において主要な手段となっていることがわかります。しかし、勉強会やセミナー、イベントのような対面で直接伝達することも積極的に行われているということが読み取れます。



誰に伝えているか

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 小学生
- 大学生
- 大人・社会人
- 不特定多数
- 中学生
- 高校生
- 小学生未満

[比較対応記号]

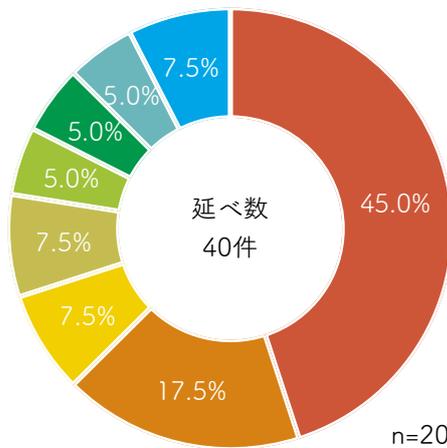
○2

特に回答数が多かったのは、「小学生」、「大学生」という結果になりました。回答人数が20人であったのに対して延べ数が51件であったことから、複数の年齢層にアプローチしている方々が多いと考えられます。



誰と活動しているか

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 学生と
- NGOやNPOなどの団体のメンバーと
- 1人で
- 地域のひと
- 会社の社員と
- 専門家(大学の教授や研究所の方など)と
- 先生と
- その他

[比較対応記号]

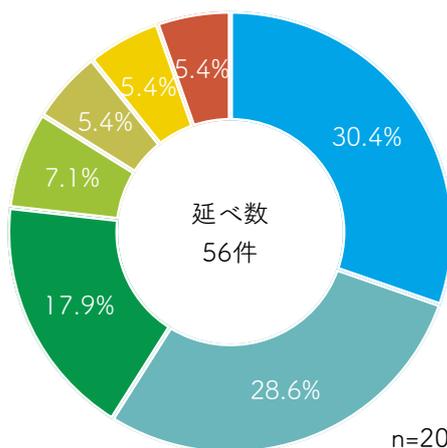


特に多かった回答は、「学生と」と「NGOやNPOなどの団体メンバーと」という回答でした。さらにその他の回答の中には、「ESDユースコンファレンスのメンバーと」、「企業・行政などと」などの回答が見られました。この結果から「1人で」活動している方も少なからずいるものの、大多数の方々が他の方と一緒に活動しているということがわかりました。



“伝える”活動をするモチベーション

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 生きものやその環境が好きだから
- 周りの人と一緒に活動するのが楽しいから
- 生きものやその環境の価値や現状を表現したいから
- 仕事の一部、信念(ライフワーク)だから
- 自分のせいで犠牲になる生きものを減らしたいから
- 良いことをした気分になるから
- 特に意識したことはない
- その他

[比較対応記号]

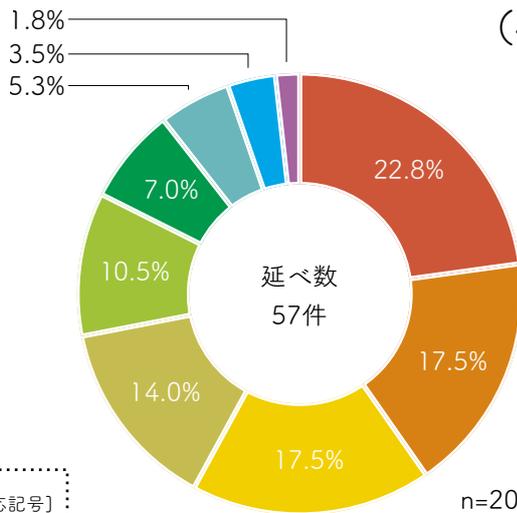


「生きものやその環境が好きだから」、「周りの人と一緒に活動するのが楽しいから」という回答が多かったです。その他の回答の中には、「知らなかった考え方に興味や関心を持って欲しい」、「未来の子供たちにとって暮らしやすい地球(社会)にしたい」、「自分が地球上の人間に産まれた使命だと思うから」などがありました。



伝える活動をする上で困っていること

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 技術、知識、経験不足
- 資金繰り
- 人手不足 (参加者が少ないなども含む)
- 活動場所の確保
- ネットワーク不足
- 周りからの理解
- 人間関係
- 法制度、手続きの煩わしさ
- 特に困っていることはない
- その他

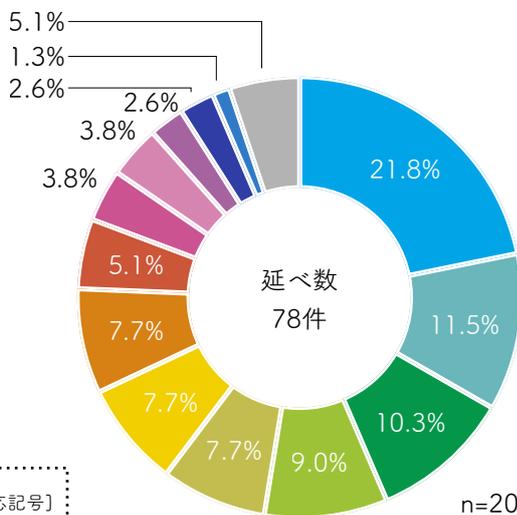
[比較対応記号]

◇2

特に回答が多かったのは、「技術、知識、経験不足」、「資金繰り」、「人手不足」でした。その他の回答には、「指導力不足」などの回答が見られました。



伝えている内容 (複数回答可)



[グラフ凡例]

- 環境を守るための行動
- 生きものの価値や現状
- 生産や消費が生きものの暮らしに影響を与えているという現状
- 気候変動のこと
- 多様な生きものがあることが、私たちの暮らしや福祉のためにも大切だということ
- その地域の生きものや自然に関する古くからの知恵や知識
- 農業、林業、養殖業が行われている地域の現状や魅力、課題
- 保護地域の現状や魅力、課題
- 外来種のこと
- 地域に根づいた作物や家畜、野生動物のこと
- サンゴ礁やマングローブなど、ダメージを受けやすい生態系のこと
- 種の絶滅やホットスポットのこと
- 水産資源の乱獲のこと
- 化学汚染のこと
- その他

[比較対応記号]

◇3

特に多かった回答は、「環境を守るための行動」、「生きものの価値や現状」、「生産や消費が生きものの暮らしに影響を与えているという現状」でした。回答結果から多岐にわたるトピックについて"伝える"活動をしていることがわかります。また、その他の回答では、「環境保全活動を介した、学生の対外意識向上」、「SDGs全般をテーマに、教育現場での取組事例紹介」、「多様な生きもの（植物を含む）と共存していること」などが見られました。

| | [関連する愛知目標] | [対象の選択肢] | |
|---|--|----------|---|
|  | 目標1: 普及啓発 みんなが、生物多様性は大切なんだと知ろう。その気持ちをもって、行動しよう。 | ● | ● |
|  | 目標4: 生産と消費 環境に無理をさせず続けられる生産と消費を行おう。 | ● | |
|  | 目標5: 生息地の破壊 森など 生き物が暮らす場所が失われるスピードを半分まで抑えよう。ゼロを目指そう。 | ● | |
|  | 目標6: 過剰漁獲 魚や貝など水産資源は、これからも無理なく続けられるように漁獲しよう。 | ● | |
|  | 目標7: 農業・林業・養殖業 農業・養殖業・林業が行われる地域を、長く無理なく活動できるよう管理しよう。 | ● | |
|  | 目標8: 化学汚染 化学物質・肥料・農薬は、生物多様性に有害でない範囲まで抑えよう。 | | |
|  | 目標9: 外来種 環境に害をあたえる外来種が増えるのを防ごう。入ってこないようにしましょう。 | ● | |
|  | 目標10: 脆弱な生態系の保護 サンゴ礁など、環境の変化に特に弱い生態系を守ろう。 | ● | |
|  | 目標11: 保護地域 陸地の17%、海の10%は、なにがあっても守る場所に決めよう。 | ● | |
|  | 目標12: 種の保全 絶滅危惧種を絶滅から防ぎ、ふつうの種に戻していこう。 | ● | |
|  | 目標13: 遺伝的多様性 一つの種のなかでも、多様さを大事にしよう。 | ● | |
|  | 目標14: 生態系サービス 生態系を守り、自然の恵みが子どもや貧しい人々にも届くようにしよう。 | ● | |
|  | 目標15: 復元と気候変動対策 傷ついた生態系を、15%以上回復させよう。気候変動や、砂漠化の問題に貢献しよう。 | ● | |
|  | 目標18: 伝統的知識 生き物や自然にまつわる伝統的な知識を大切にしよう。 | ● | |

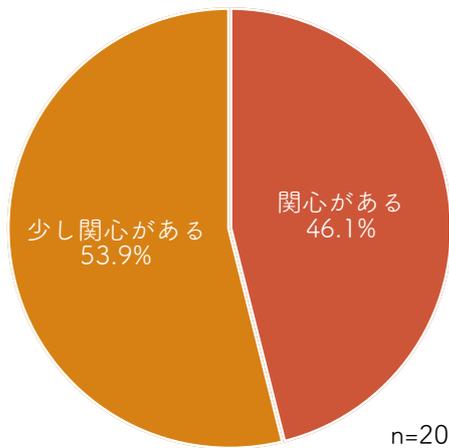
“伝える”の回答者は、**普及啓発（目標1）に関わることを伝えている方々が33.3%と、最も高い割合**でした。また、生産や消費（目標4）気候変動（目標15）に関する活動も10%前後でした。

化学汚染に関して伝えている方々はいませんでした。農薬に関することを伝えている方々は7.7%前後いるため、農薬などの化学汚染については伝えていることも考えられます。

外来種に関しては、“触れる”の回答者に対して心がけていることについて問う質問P. 43 の選択肢にも含まれていましたが、“伝える”の方が低い割合でした。



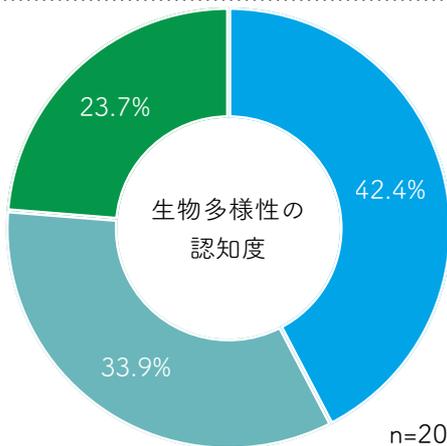
“生きもの”や“生きものの暮らし”への関心



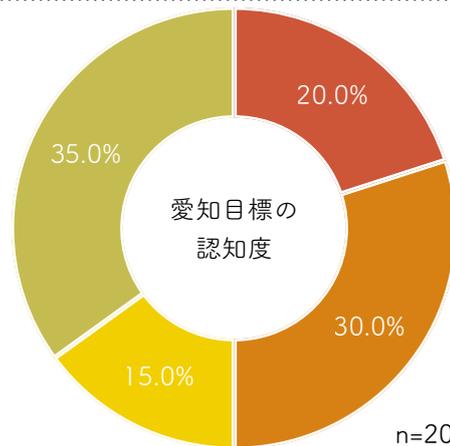
わからないと答えた方々はいませんでした。一方で、選ぶと同様に、「関心がある」方々のほうが、「少し関心がある」よりも少ない結果となったのが特徴的でした。



“生物多様性”と“愛知目標”の認知度



- 人に説明できる
- 言葉の意味は知っている
- 意味は知らないが、言葉は聞いたことがある
- 知らない



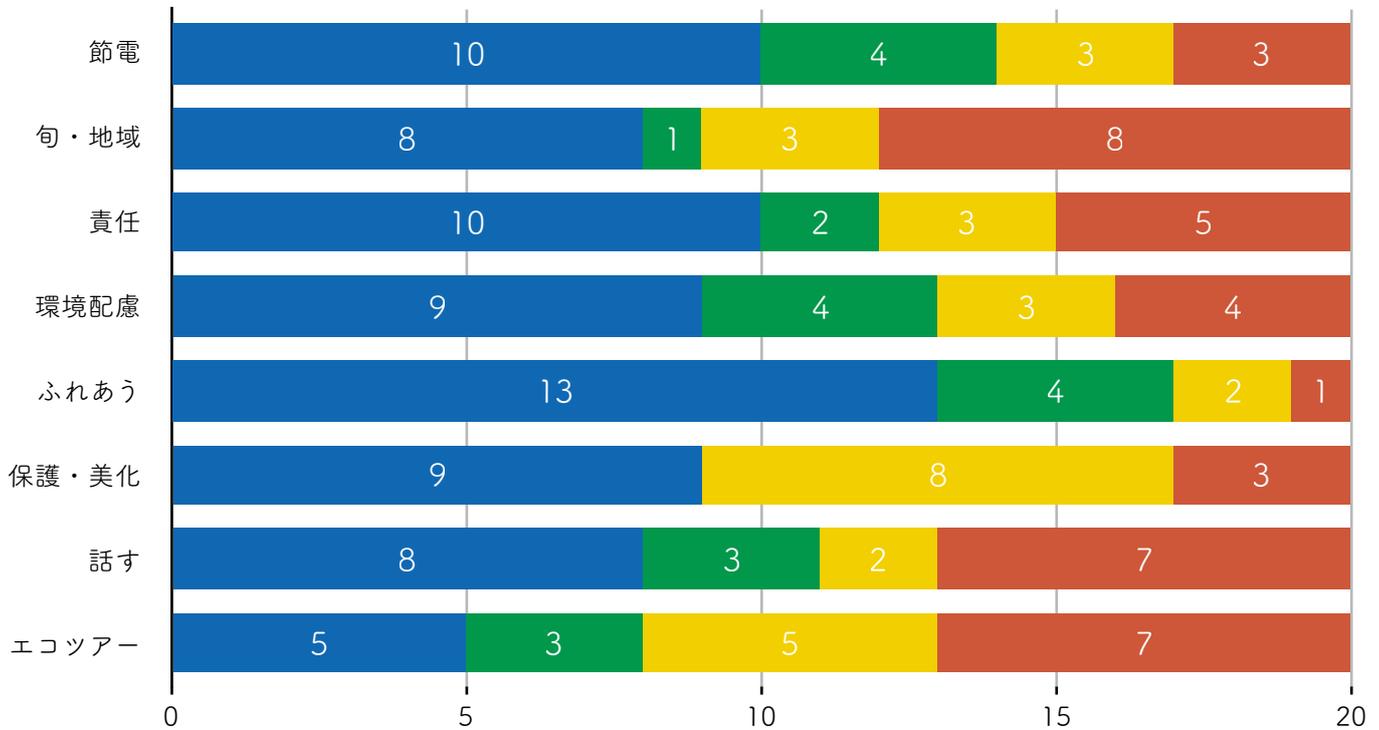
- 人に説明できる
- 言葉の意味は知っている
- 意味は知らないが、言葉は聞いたことがある
- 知らない

生物多様性については、「意味は知らないが、聞いたことはある」と答えた回答者が多いのが特徴的でした。このアンケートの回答者は、地域や生きものの分野に特化した内容を伝える活動をしている方々が多いと考えられます。

愛知目標については、「人に説明できる」と答えた人の割合が、他のキーワードのアンケートに比べ、最も高かったです。生きものの暮らしに関連することを伝える上で、愛知目標などについても発信する担い手となっている方々が多いのではないかと思います。

生物多様性に寄与する日常行動の状況

- 生物多様性に寄与していると意識しながら行動している(A群)
- 生物多様性に寄与していると意識していないが、行動している(B群)
- 生物多様性に寄与していると思っているが行動できていない(C群)
- どちらでもない(D群)



※それぞれの群の説明、行動の説明は、総合的な分析のグラフ（本白書 P.23）にあります。

"伝える"のキーワード選択者の生物多様性に寄与する日常行動の状況は以上の結果となりました。群ごとの割合はA群が45.0%、B群が13.1%、C群が18.1%、D群が23.8%でした。これは他のキーワードと比較して、A群は4番目、B群は1番目、C群は5番目、D群は3番目という結果でした。A群とB群の合計で見ると他のキーワード中トップであるため**"伝える"活動者はもっとも日常的に生物多様性に寄与する行動が多い**と言えます。一方で、"伝える"のキーワード選択者の特徴としてB群の割合が他のキーワードと比較して最も大きい点です。B群が大きいということは**8つの行動と生きものの暮らしの関わりをあまり理解していない**ということです。"伝える"活動をする上でこの点の理解は重要であると考えられるため、"伝える"活動をしている方々への普及啓発が必要です。

次に行動ごとの結果を見ていきます。「節電」はA群が50.0%、B群が20.0%、C群が15.0%、D群が15.0%でした。A群が50.0%で最も大きかったです。他のキーワードと比較するとワーストでした。また、**他のキーワードと比較してC群の割合が最も大きい**結果となりました。"伝える"活動にはプロジェクターなどの電気を使用する活動も多いため、このような結果となったのではと考えられます。

「旬・地域」はA群が40.0%、B群が5.0%、C群が15.0%、D群が40.0%でした。A群とD群が同率で最大でした。D群は他の4つのキーワードと比較して最も大きい割合となりました。C群がB群より大きいため、この場合D群が多い原因として経済的要因が大きいと考えられます。

「責任」はA群が50.0%、B群が10.0%、C群が15.0%、D群が25.0%でした。A群の割合が最大で他のキーワードと比較して遜色のない結果でした。

「環境配慮」はA群が45.0%、B群が20.0%、C群が15.0%、D群が20.0%でした。A群が最大でした。他の4つのキーワードと比較するとB群の割合が大きく、**「環境配慮」商品の購入と生きものの暮らしとの関わりを結びつける仕組み作りが必要です。**

「ふれあう」はA群が65.0%、B群が20.0%、C群が15.0%、D群が20.0%でした。A群の割合が最大で他の4つのキーワードと比較しても“触れる”の次に多い結果となりました。理由として、P.51下部にある「“伝える”活動のモチベーション」を尋ねた際のグラフを見てみると、「生きものやその環境が好きだから」という回答が最も多く、**生きものやその環境と「ふれあう」ことでそれらが好きになり、“伝える”活動に至った**と考えられます。

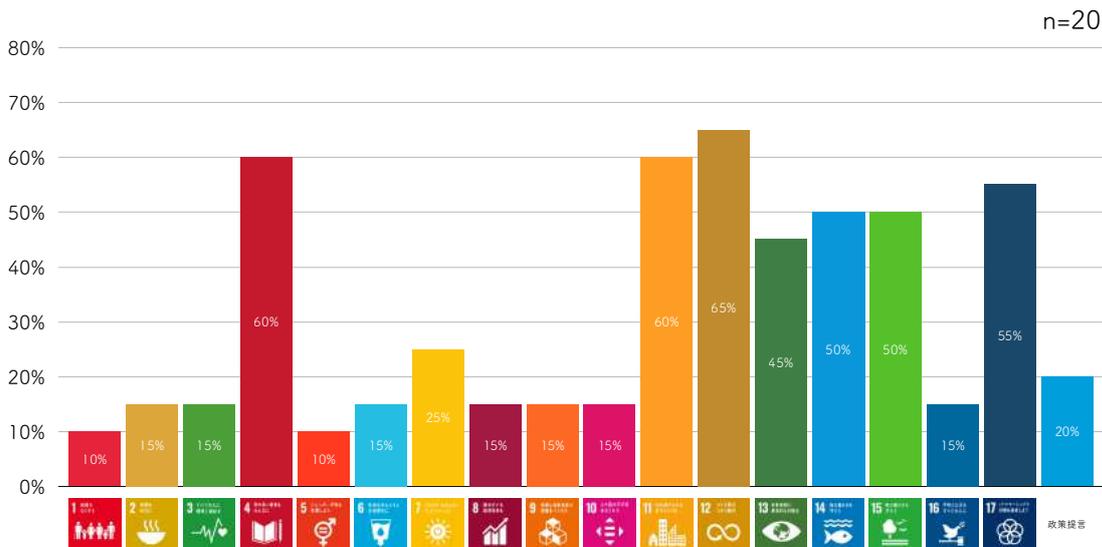
「保護・美化」はA群が45.0%、B群が0.0%、C群が40.0%、D群が15.0%でした。A群が最大で“守る”の次に多く、**“伝える”活動者も「保護・美化」活動に熱心である**と考えられます。

「話す」はA群が40.0%、B群が15.0%、C群が10.0%、D群が35.0%でした。「話す」行動は“伝える”活動と密接に関わっているためA群の割合が大きいことが予想されました。結果、A群が最大ではありましたが他の4つのキーワードと比べると3番目に多い結果となりました。この結果は**“伝える”活動者は前に出て話すことが多くても身近な人とは生きものやその環境について話すことが少ないこと**を示唆しています。生きもののお話を身近にできる工夫が必要です。

「エコツアー」はA群が25.0%、B群が15.0%、C群が25.0%、D群が35.0%でした。D群が最大でした。他の4つのキーワードと比較してもA群が2番目に大きく、D群が2番目に小さい結果となりました。D群が最大であったのは、人により「エコツアー」に関わったことがあるかどうかの違いが大きいと思います。**より“伝える”活動者の「エコツアー」との関わりを活発にするためにセミナーなどで“伝える”方々と「エコツアー」指導者の方々との交流が望まれます。**



日頃の活動に関連するワードとSDGs



“伝える”の回答者は、全体として、社会的課題に対して関心が高いと言えます。すべてのターゲットに関わる項目で、10%未満のものは見られませんでした。1人あたりが選んだ目標の数も、約5.6個と最も多かったです。政策提言に関わる活動をしている割合も、5つのキーワードの中で、最も高い割合でした。目標4（質の高い教育をみんなに）、目標11（住み続けられるまちづくり）、目標12（つくる責任、つかう責任）などの関心が高いこともわかりました。最も関心が低かったのは、目標5（ジェンダー平等を実現しよう）、目標1（貧困をなくそう）でした。どちらも地域によっては環境問題を深刻化させる社会問題ですが、わかものがこの2つの目標のために活動する機会が少ないことが考えられます。経済が発展している現在、私たちの生活が遠く離れた環境に影響を与えています。生物多様性に関心のあるわかものの多くが関心のある目標14・15だけでなく、目標1・5にも相乗的に貢献できる活動が求められます。

② “伝える”のまとめ

“伝える”は5つのキーワードの中で3番目に回答者数が多いキーワードでした。

伝え方としては「SNS・メディアなどでの広報」、「勉強会・セミナー等の実施」という方法が多くとられました。伝える対象としては「小学生」や「高校生」が多かったです。また、複数の対象に“伝える”活動をされている方もいました。

“伝える”活動は「学生と」や「NGOやNPOなどの団体メンバーと」行われていることも分かりました。「SNS・メディアなどでの広報」も団体として行っていると考えられます。

活動を行うモチベーションとしては、「生きものやその環境が好きだから」、「周りの人と一緒に活動するのが楽しいから」と答えている方が多かったです。一方、困っていることとしては「技術、知識、経験不足」、「資金繰り」、「人手不足」というものが挙げられました。

“伝える”内容は「環境を守るための行動」、「生きものの価値や現状」、「生産や消費が生きものの暮らしに影響を与えているという現状」という選択肢を選んだ人が多くいました。愛知目標との関連性の観点見ると、“伝える”の回答者は、愛知目標1（普及啓発）に関わる事を伝えている人が33.3%と、最も高い割合でした。また、**愛知目標4（生産や消費）、愛知目標15（気候変動）に関する活動も10%前後と、関心が高いようです。愛知目標9（外来種）に関連する活動は、“触れる”の回答者に比べ、低い割合になりました。**

生物多様性に寄与する日常行動と意識の質問では、活動しつつ、生物多様性を意識している層が最も多い結果となりました。A群が最も多かったのは「身近な生きものを観察したり、外に出て自然とふれあう」で、他の4つのキーワードと比較しても“触れる”の次に多い結果となりました。

SDGsに関連させて社会課題に対する興味を尋ねる質問では、“伝える×生きものの暮らし”の回答者は、全体として**社会的課題に対し関心が高い**ということがわかりました。すべてのターゲットに関わる項目で、10%未満のものは見られず、政策提言に関わる活動に関心を持つ人も5つのキーワードの中で、最も高い割合でした。関心が集まったSDGsの目標として、目標4（質の高い教育をみんなに）、目標11（住みつつげられるまちづくり）、目標12（使う責任、作る責任）が挙げられます。

わかものネットとして

弊団体として、“伝える”活動をさらに盛り上げるために「困っていること」に着目し、「**技術、知識、経験不足**」の改善に取り組んでいきます。弊団体の3つの軸のひとつである「普及啓発」で得られた知見や経験を活かし、日本全体、ひいては世界全体で生物多様性保全の流れを引き起こします。そのためにも“伝える”活動を行うユースの団体と弊団体が手を取り合い、切磋琢磨することで「技術、知識、経験不足」を改善していきます。

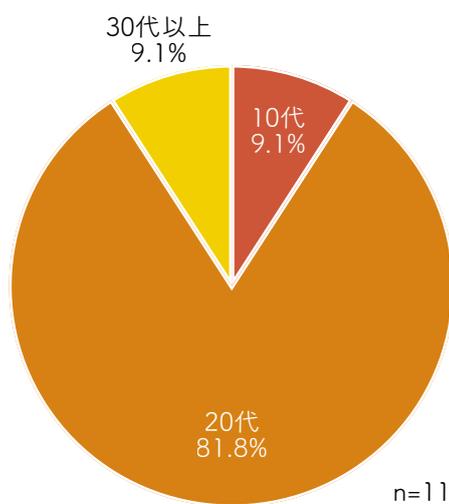
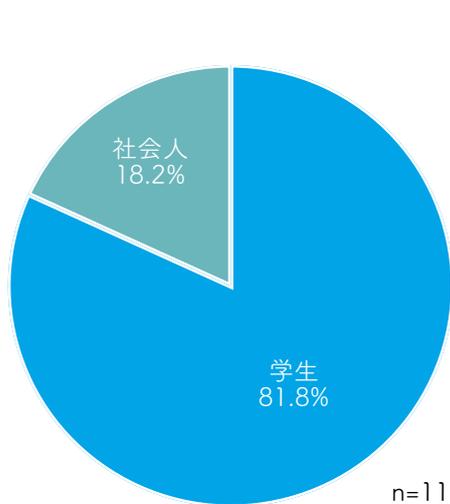
また、“伝える”を選択した方々は幅広い社会問題に関心があることがわかりました。弊団体としても**幅広い社会問題と生物多様性のつながりを意識していく必要**があります。そして、“伝える”活動を行っている団体と協働をするときにどのようなニーズにも対応できるように準備をしていきます。

“守る”の分析結果

① 各アンケートの分析



所属・年齢



出身地(愛着のある土地)

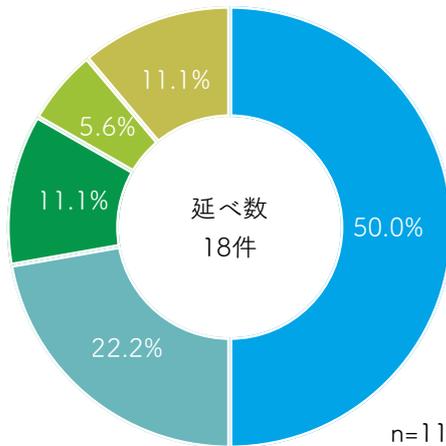


Powered By Bing
© GeoNames, Microsoft, Wikipedia



“守る”ためにしている活動

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 生きものの住む環境・生息地を守る活動
- 生きものの暮らしを守れるような地域の活動への参加
- 特別な生きものや、希少な生きものを守る活動
- 生きものや、その生息地を守るための制度や法律を作る・提案する活動
- その他

[比較対応記号]



回答者が“守る”活動を行っている場所は、「森林」から「海」まで多様な結果となりました。その他の回答の中には「雪原」での活動に携わっている方もいました。

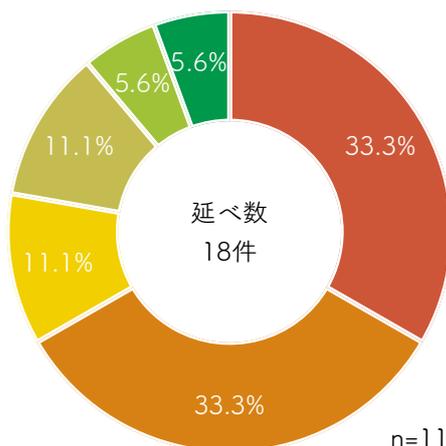
具体例：

北海道駒ヶ岳、大沼国定公園、荒浜、印西市、谷津干潟、御岳山、多摩川、早瀬川・老馬谷ガーデン



誰と活動しているか

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 学生と
- NGOやNPOなどの団体のメンバーと
- 専門家（大学の教授や研究者の方など）と
- 地域の人と
- 1人で
- その他

[比較対応記号]

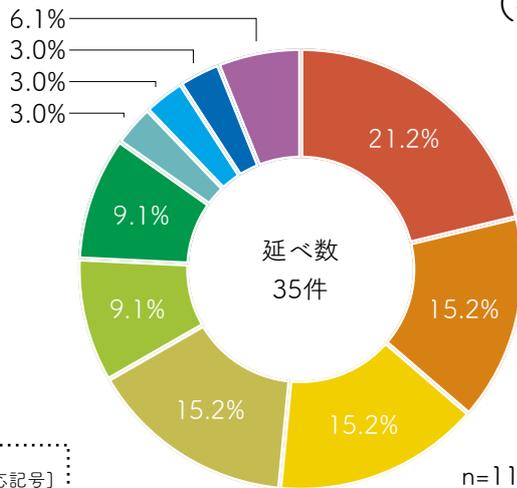


「学生と」・「NGOやNPOなどの団体のメンバーと」という回答で全体の66.7%を占める結果となりました。



その活動に取り組んでいる理由

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 環境問題に取り組みたいから
- 脆弱な生きものや、その環境を守りたいから
- 周りの人と一緒に活動するのが楽しいから
- 生きものやその環境が好きだから
- 生きものが好きだから
- 思い入れのある場所だから
- 自分のせいで犠牲になる生きものを減らしたいから
- いいことをした気分になるから
- 自分が住んでいる地域のことから
- その他

[比較対応記号]



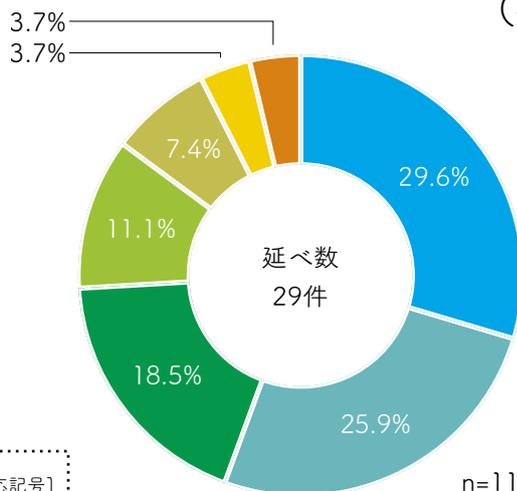
特に目立った回答は、「環境問題に取り組みたいから」、「脆弱な生きものやその環境を守りたいから」、「生きものやその環境が好きだから」、「周りの人と一緒に活動するのが楽しいから」という結果となりました。

"守る"活動に関わっているわかものは、生きものへの関心を仲間と楽しく活動することで追求していることがわかります。



"守る"活動をする上で困っていること

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 技術・知識・経験不足
- 人手不足(参加者が少ないなども含む)
- 資金繰り
- 活動場所のアクセス
- ネットワーク不足
- 特に困っていることはない
- その他

[比較対応記号]

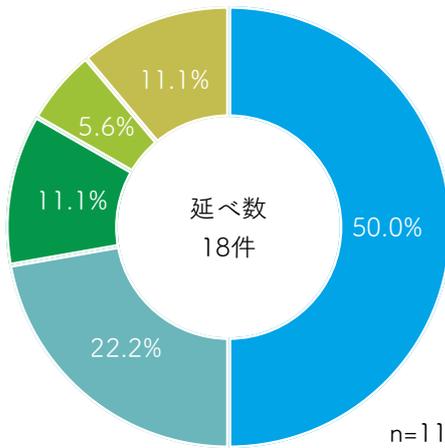


「技術、知識、経験不足」・「人手不足」などが特に課題だと考えていることがわかりました。また、「資金繰り」なども大きな課題となっています。また、「周りからの理解などではあまり困っていない」ことがわかりました。これは、「守る」という活動が多様で、個人で行うことができる活動も多くあること、もともと理解のある環境での活動が多いからだと考えられます。



“守る”ためにしている活動

(複数回答可)



【グラフ凡例】

- 生きものの住む環境・生息地を守る活動
- 生きものの暮らしを守れるような地域の活動への参加
- 特別な生きものや、希少な生きものを守る活動
- 生きものや、その生息地を守るための制度や法律を作る・提案する活動
- その他

【比較対応記号】



【関連する愛知目標】

【対象の選択肢】



目標1: 普及啓発

みんなが、生物多様性は大切なんだと知ろう。その気持ちをもって、行動しよう。



目標5: 生息地の破壊

森など、生き物が暮らす場所が失われるスピードを半分まで抑えよう。ゼロを目指そう。



目標8: 化学汚染

化学物質・肥料・農薬は、生物多様性に有害でない範囲まで抑えよう。



目標10: 脆弱な生態系の保護

サンゴ礁など、環境の変化に特に弱い生態系を守ろう。



目標11: 保護地域

陸地の17%、海の10%は、なにがあっても守る場所に決めよう。



目標12: 種の保全

絶滅危惧種を絶滅から防ぎ、ふつうの種に戻していこう。



目標17: 効果的・参加型戦略

みんなが参加しながら作戦を立て、みんなが実現しよう。



目標19: 知識・技術の向上と普及

生物多様性に役立つ知識や技術を豊かにしていこう。



「生きものの暮らし、生息地を守る活動」のような、目標5, 7, 10に貢献する活動が主に行われていることがわかります。

“守る”の選択者は、研究室で活動を行っている人も多いからではないかと考えられます。その他の回答では、地域緑化ボランティアなどの活動が挙げられました。

❶ コラム⑤：今さら聞けないSATOYAMAの話

皆さんは「里山」と言われて何を思い浮かべますか？人の手の行き届いた山々や、昔ながらの田舎の風景でしょうか。では、SATOYAMAと言われると…？ 実は、皆さんの知らないところで「SATOYAMA」という言葉は世界進出しているのです！

◇里山とは

「里山」とは、人と自然の交流が作り出した、稲作地、森林地帯、草原、池、灌漑用水路などから成る風景や地域のことです。日本の人々は、長い時間をかけて得た知識と経験に基づいて、自然環境を慎重に利用し、作り直すことによって、周りの環境に適応した生産活動を行ってきました。そのような生活様式により、人と自然が調和したモザイク状の複雑で多様なシステムをつくりだしました。里山は人間によって様々な方法で利用され、生産活動だけでなく、宗教や文化的活動を行う場として重要な役割を果たしています。また長い間、人間の管理によって維持されてきた里山は、独自の生態系が作られ、生物多様性の面でもとても重要です。

◇SATOYAMAとは

世界の様々なところで、里山のような人間と自然の持続可能な調和関係は存在しています。近年、都市化や近代化、地方の過疎化などの悪影響が明らかになる中で、里山のような特徴をもつ環境と土地利用の重要性が様々な人に認識され始め、海外でもSATOYAMAという言葉が使われるようになりました。“socio-ecological production landscapes and seascapes”(SEPLS)と呼ばれることもあります。

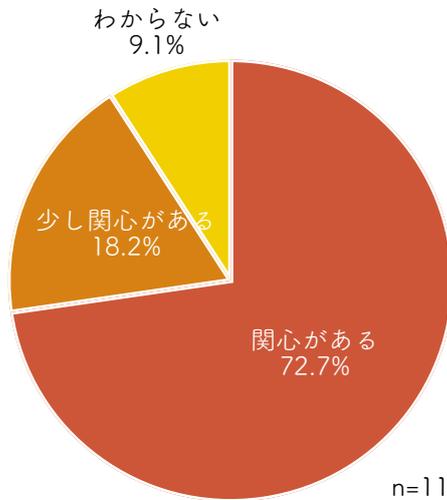
◇SATOYAMAと生物多様性の関係

世界のSATOYAMAのいくつかは、生物多様性ホットスポット内にあることを知っていますか？生物多様性ホットスポットとは、1500種以上の固有維管束植物（種子植物、シダ類）が生息しているが、原生の生態系の7割以上が改変された地域のことです。面積が狭いけれど早急に保全しなければならないと考えられている地域です。生物多様性ホットスポットには、約19億6千万人が生活しており、その多くが地元の自然に大きく依存した生活を送っています。日本に暮らすわたしたちは、ホットスポットである地域に依存し、多くの資源を輸入することで、SATOYAMAの生態系破壊を引き起こしています。身近な自然を守るだけでなく、生産や消費に関心を向けて活動することで、はるか遠くのSATOYAMAの環境を守ることができるかもしれません。





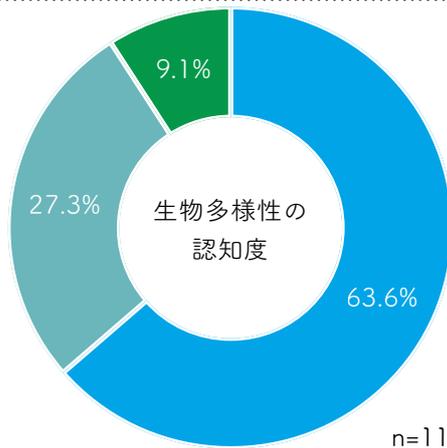
“生きもの”や“生きものの暮らし”への関心



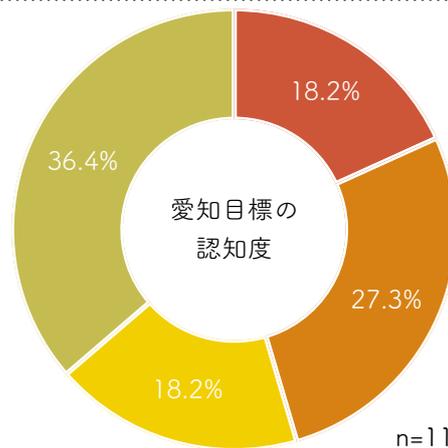
「わからない」、という回答が、“食べる”のアンケートと同様に多かったのが特徴的でした。



“生物多様性”と“愛知目標”の認知度



- 人に説明できる
- 言葉の意味は知っている
- 意味は知らないが、言葉は聞いたことがある
- 知らない



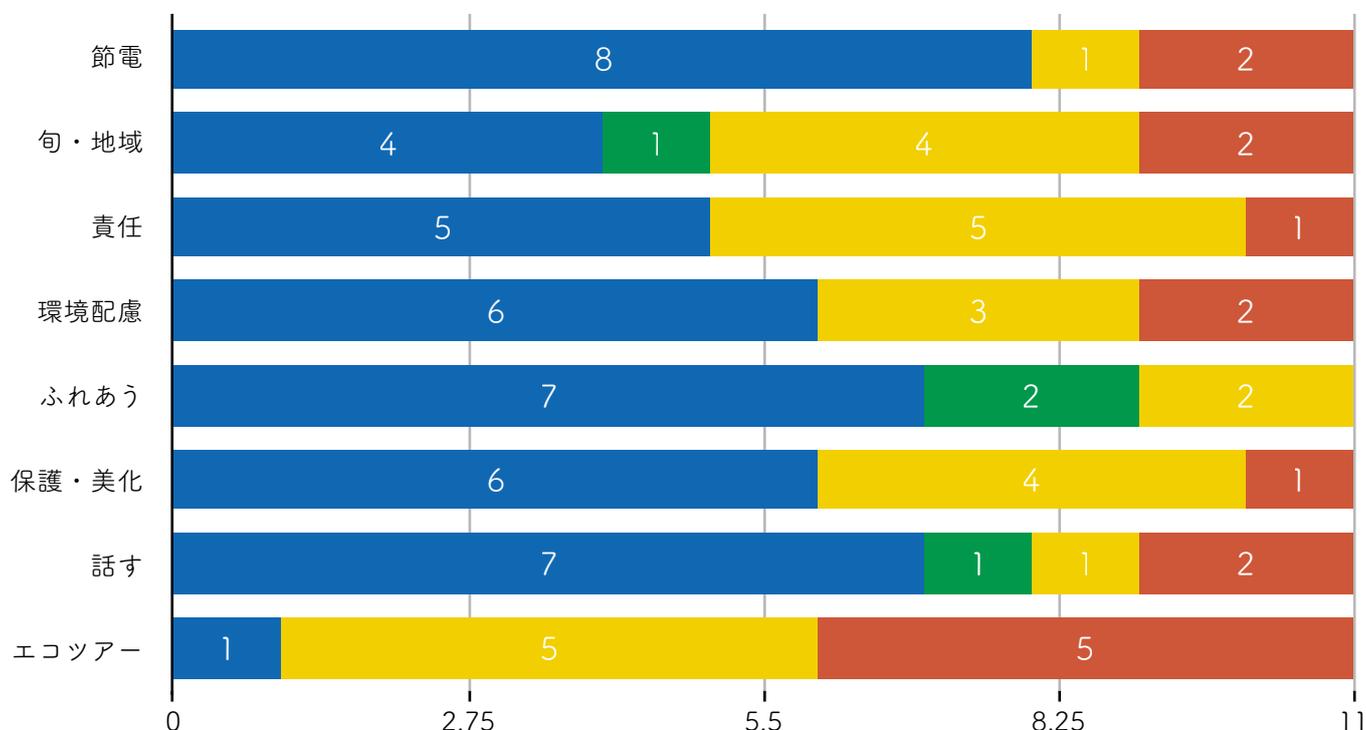
- 人に説明できる
- 言葉の意味は知っている
- 意味は知らないが、言葉は聞いたことがある
- 知らない

生物多様性については、生物多様性という言葉を「人に説明できる」という方々と、「言葉は聞いたことがある」という方々の割合が、他のアンケートに比べてどちらも高かったです。

愛知目標については、愛知目標を「知らない」と回答した割合は、すべてのアンケートの中で、最も低い結果でした。生きものの暮らしに対して“守る”という意識を持っている方々は、愛知目標などの国際的な取り決めなどについても、他の回答者に比べ、関心が高い可能性があります。

生物多様性に寄与する日常行動の状況

- 生物多様性に寄与していると意識しながら行動している(A群)
- 生物多様性に寄与していると意識していないが、行動している(B群)
- 生物多様性に寄与していると思っているが行動できていない(C群)
- どちらでもない(D群)



※それぞれの群の説明、行動の説明は、総合的な分析のグラフ（本白書 P.23）にあります。

"守る"のキーワード選択者の生物多様性に寄与する日常行動の状況は以上の結果となりました。群ごとの割合はA群が50.0%、B群が4.5%、C群が28.4%、D群が17.0%でした。これは他のキーワードと比較して、A群が1番目、B群が5番目、C群が1番目、D群が5番目に多い結果となりました。A群がトップに輝き、**"守る"活動者が日常的に生きものの暮らしを意識しながら行動していることが分かります。**また、A群とC群の合計も全キーワード中トップであり、これらの行動の意欲の高さも伺えます。

次に行動ごとの結果を見ていきます。「節電」はA群が72.7%、B群が0.0%、C群が9.1%、D群が18.2%でした。全キーワード中、A群でトップだった一方、D群でもワーストでした。**"守る"活動を行っている方でも自然保護に主眼を置いている方々、自然との対話に主眼を置いている方々の2派があります。この2派の差がこの結果を生んだと推測できます。**

「旬・地域」はA群が36.4%、B群が9.1%、C群が36.4%、D群が18.2%でした。A群とC群がともに36.4%で最大でした。他のキーワードと比較するとA群が4番目でしたが、C群ではトップでした。今後、C群をA群にするために「旬・地域」の食材を購入する際の妨げを取り除いていく必要があります。

「責任」はA群が45.5%、B群が0.0%、C群が45.5%、D群が9.1%でした。A群とC群の占める割合が最大でした。C群は多いものの行動できていないというよりも単に生きものを飼育していないことが考えられます。

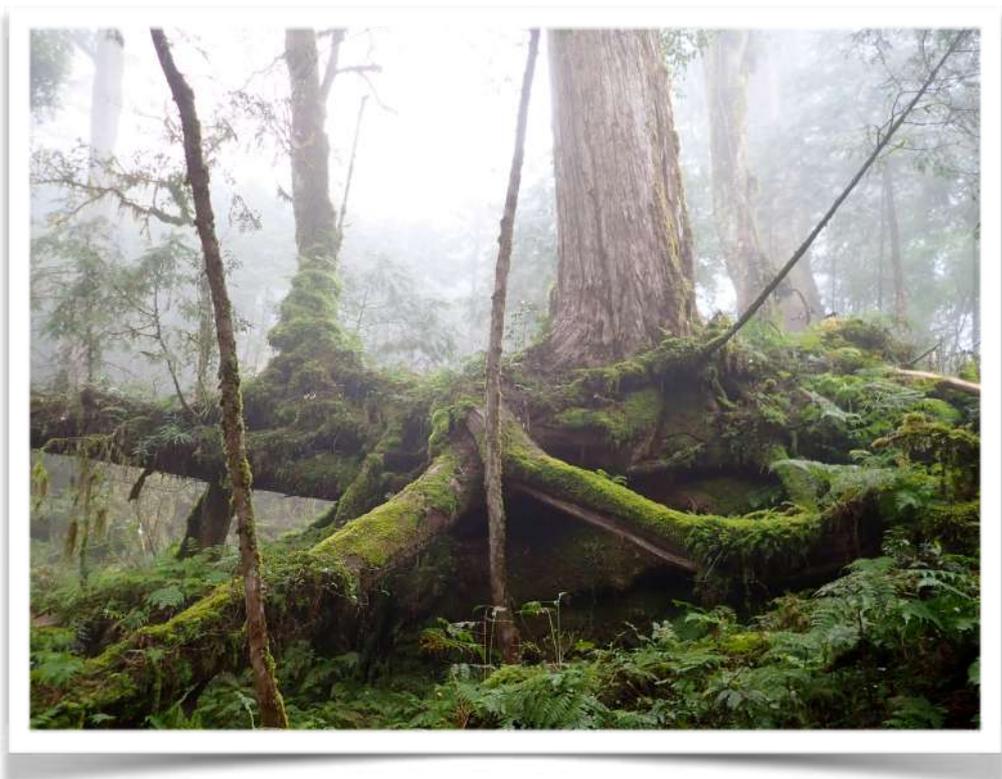
「環境配慮」はA群が54.5%、B群が0.0%、C群が27.3%、D群が18.2%でしたA群で半数を超えており、全キーワード中で見ても2番目と"守る"活動者の意識の高さが伺えました。

「ふれあう」はA群が63.6%、B群が18.2%、C群が18.2%、D群が0.0%でした。A群が63.6%で最大でした。一方、D群では0.0%と驚異の数字がみられました。"守る"のアンケート回答者が少ないとはいえ、すばらしい数字です。

「保護・美化」はA群が54.5%、B群が0.0%、C群が36.4%、D群が9.1%でした。**A群が54.5%と全キーワード中トップでした。**

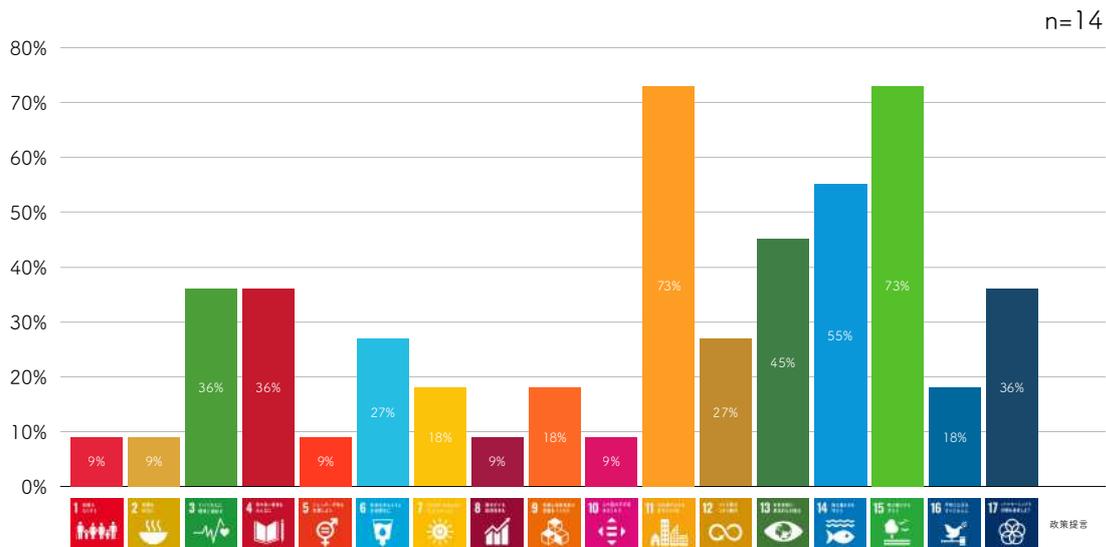
「話す」はA群が63.3%、B群が9.1%、C群が9.1%、D群が18.2%でした。こちらもA群が全キーワード中トップでした。"守る"活動において、課題解決や収穫などのために会話することが多いと予想されます。

「エコツアー」はA群が9.1%、B群が0.0%、C群が45.5%、D群が45.5%でした。C群とD群がともに45.5%で最大でした。しかしながら、他の4つのキーワードと比較した順位ではC群がトップであったにもかかわらず、D群ではワースト2番目を位置しました。C群の多さについては"守る"活動で満足していること、"守る"ことに時間を取られていることが考えられます。一方、D群の多さについては自分が保護している活動地で自然体験会や観察会が頻繁に開催されるときに衝突があったのではないかと推測されます。





日頃の活動に関連するワードとSDGs



守る×生きもの暮らしの回答者のうち、73%が、目標15（陸の豊かさを守ろう）、目標11（住み続けやすいまちづくり）に関する活動を行っているとは回答していました。目標14（海の豊かさを守ろう）を選択した人は55%でした。現在日本では、人口減少などが原因で自然に対する働きかけが減少しています（アンダーユース）。アンダーユースによって、里山が減少したり、放棄地が増加したりすることで景観にも影響を与えるため、目標14,15は住みやすいまちづくりのためにも重要な目標です。生態系を活かしたまちづくりにも関心があると予想されます。

他のキーワードの回答者に比べて、目標2(飢餓を0に) や目標12(作る責任、使う責任) の選択割合が少ないのが印象的でした。

政策提言に関わる活動を行っているとは回答した人はいませんでした。“守る”の回答者は、実際に生きものが身近にいる環境で活動を行っている方が多かったです。“守る”の回答者にとって、政策提言などの活動は異なる視点が必要なため、自分たちとはあまり関係がないと感じている可能性があります。しかし、分野横断的に活動できるわかものだからこそ、政策提言などの活動に関わる機会がある場合もあります。地域に根付いた活動を行っている“守る”活動をしているわかものが国際的な枠組みに関心を持ち、意見を発信することで、現実の活動に取り入れやすい政策作りに貢献することが出来るのではないのでしょうか。

② “守る”のまとめ

活動する自然環境に大きな偏りはなく、森林、川、湖、里山、湿地、海、まちなど多様な環境でわかものによる保全活動が行われていることが分かります。他のアンケートと比べて「NGOやNPOなどの団体のメンバーと一緒に活動している」という回答の割合が高かったのが特徴的でした。これは、“守る”という活動の特性としてフィールドでの専門知識や経験が必要、または活かされるという点が関係していると考えられます。個人や学生だけで取り組むよりNGOやNPOなどの団体と一緒に行動することでより行動範囲や行動内容が広がるため、このような結果となったのではないかと分析しました。

また、「環境問題への興味」、「生きものへの関心」、「周りの人と一緒に活動する楽しさ」が活動のモチベーションになっている回答者が多いです。活動をする上で困っていることについては、「技術、知識、経験不足」、「人手不足」、「資金繰り」などの回答が目立ちました。単独での活動、既存のNGOのフィールドでの活動などもあるため、周りからの理解を課題と考える方々はほとんどいませんでした。また、“守る”ための具体的な活動内容について、約50%が「生息地や生き物が暮らす環境を守る活動」であると回答しました。回答者は少なくとも8つの愛知目標に貢献する活動を行っています（P. 62）。

生物多様性に寄与するという認識に基づいて行動していることの中で特徴的だったのは「身近な生きものを観察したり、外に出て自然とふれあう」、「自然や生きものについて、家族や友人と話す」でした。前者について生物多様性の保全に繋がらないと回答した割合が0.0%であったことから、積極的に生きものと触れ合うことは生物多様性の保全に繋がるという認識が強いのか、実際に行動している方々が多いことがわかります。後者については、“守る”活動の中で生きものについて話す機会が多いことが推測できます。周りの人との対話も生物多様性保全に寄与すると認識している方々が多いことから、普及啓発の意識も強いのではないかと考えられます。

わかものネットのこれから

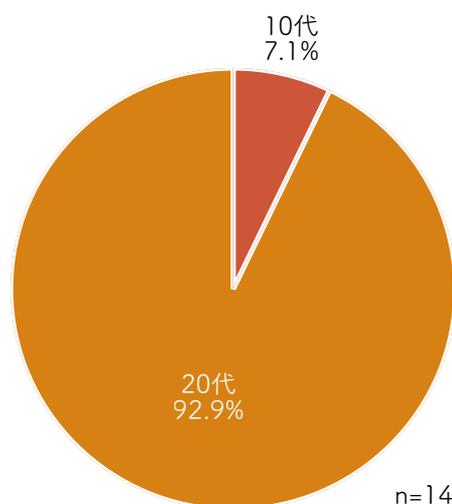
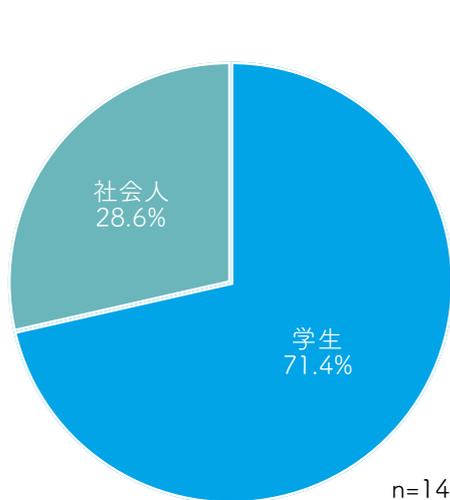
生物多様性に寄与するという認識が低く、また取り組みもあまり行われていない行動として顕著だったのは「エコツアーや自然体験会に参加する」という結果になりました。ツーリズムは一步間違えると自然破壊の原因となってしまうことから、“守る”活動との衝突が生まれるのではないかと考えられます。これから生物多様性わかものネットワークが貢献できることとして、**エコツアーと“守る”活動に携わる人々をつなぐネットワークを構築することができれば、より連携した生物多様性保全に繋がるのではないかと考えます。**

“選ぶ”の分析結果

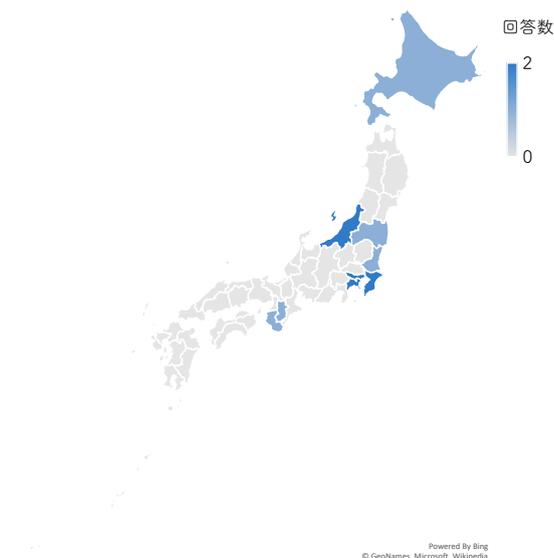
① 各アンケートの分析



所属・年齢



出身地(愛着のある土地)

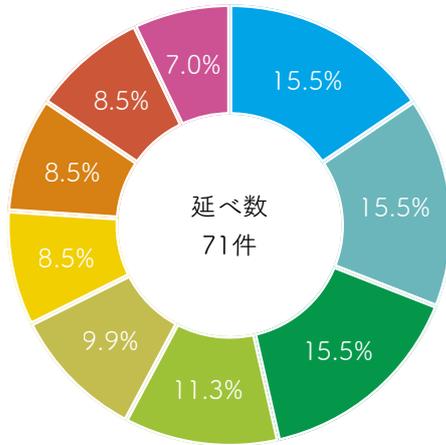


Powered By Bing
© GeoNames, Microsoft, Wikipedia

④ “選ぶ”ことでどのような活動をしているか

(複数回答可)

[グラフ凡例]



- 認証マークがついた商品(フェアトレードの商品など)を買うようにしている
- オーガニック(無農薬)食材を買うようにしている
- 地産地消を心がけている
- 旬の食材を積極的に選ぶようにしている
- すぐに消費できるものは、賞味期限が近いものを買っている
- 食べる分だけ買い、食料廃棄を出さないようにしている
- エコマークなど環境に優しい生産方法で作られたものを選ぶようにしている
- マイバッグを買い物に持参している
- 使い捨てになるものを買わないようにしている(詰め替え商品を買う)

[比較対応記号]

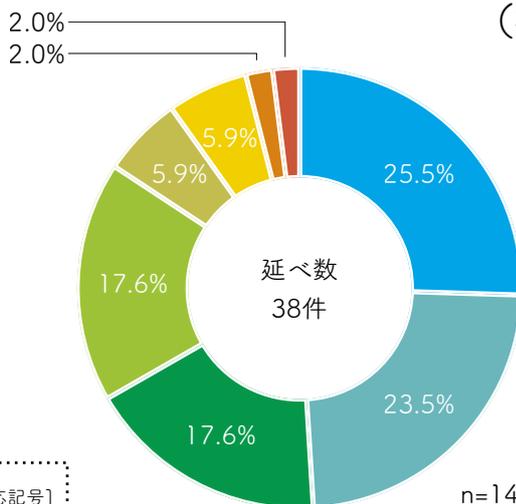
○1

最も回答割合が多かったのは「認証マーク」・「オーガニック」・「地産地消」に関する活動でした。「マイバッグを買い物に持参している」の回答者が少なかったのが印象的でした。手軽な活動ではありますが、実家暮らしのわかものには行いづらい活動であると推測されます。洋服を買う際にエコバックを利用するなど、工夫の余地があるのではないのでしょうか。

④ 買ったことのある認証マーク

(複数回答可)

[グラフ凡例]



- フェアトレード認証
- エコマーク商品
- 有機JASマーク
- グリーンマーク商品
- FSC認証
- レインフォレスト認証
- MSC認証
- RSPO認証

[比較対応記号]

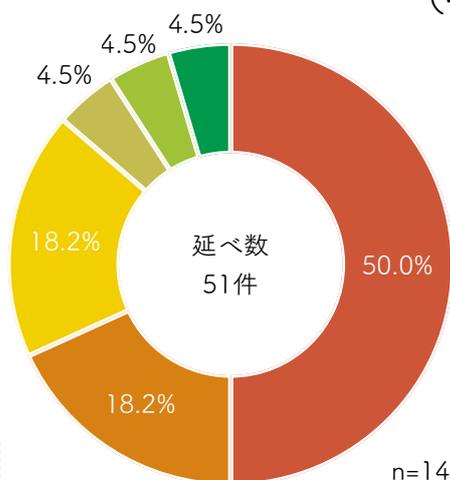
○2

特に目立った回答は「フェアトレード認証」、「有機JASマーク」、「グリーンマーク商品」、「エコマーク商品」という結果になりました。買ったことがあると回答した方々が少なかった認証マークについては、そもそも認証マーク自体の知名度が低かったり、認証を得ている商品があまり出回ってなかったりする理由が考えられます。



誰と活動しているか

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 1人で
- 学生と
- NGOやNPOなどの団体のメンバーと
- 会社の社員と
- 地域の人と
- その他

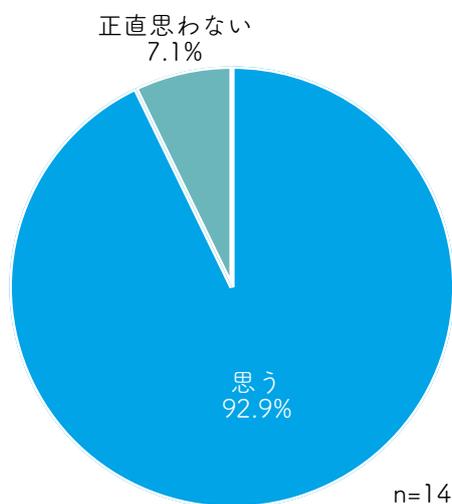
[比較対応記号]



「一人で」活動していると答えた方々が半数と、他の4つのキーワードに比べて突出して高い結果でした。他のキーワードに比べて1人で取り組みやすい活動が多いことが理由と考えられます。



“選ぶ”ことで生きものの暮らしを守れると思うか



[比較対応記号]



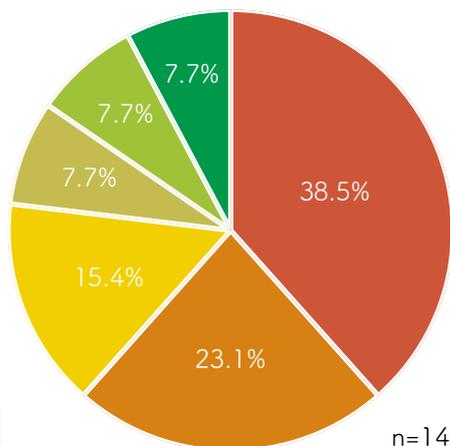
回答者の92.9%の人が「“選ぶ”ことを通して、生きものの暮らしを守れると思う」と回答しました。

「思う」と回答した方の理由としては、「1人では難しいかもしれないが、たくさんの方がより良い選択をすることで変わることが出来ると思うから」などがありました。

「正直思わない」と回答した方の理由は、「生活の中で小さな工夫を行っているが、オーストラリアの森林火災で動物達が苦しんでいると思うと、この行動は意味があるのかと考えてしまう。」というものでした。

④ モノやサービスを選ぶとき大切にしている基準

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 品質
- 認証・認定
- 価格
- 販売者・企業
- 評判・口コミ
- その他

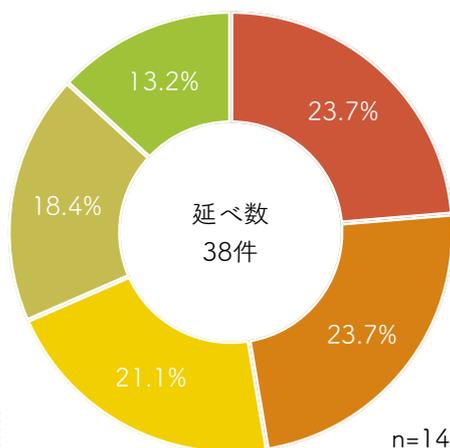
[比較対応記号]

○4

全体の77.0%を占めていたのは、「品質」、「認証・認定」、「価格」でした。満足度やコストに直結する品質・価格に加え、認証・認定を選択の基準にしている方の割合が高かったのは注目すべき点です。

④ 食べ物を“選ぶ”とき、気を付けること

(複数回答可)



[グラフ凡例]

- 農産などを極力使わず、健康にも良いものを選ぶ、作る
- 材料や、原料が作られる地域の人々や環境にやさしい食べ物を選ぶ
- 地元で採れた(獲れた)ものを食べる、地産地消する
- 旬の食材を選ぶ
- 計画的に生産されているもの、乱獲されていないものを食べる

[比較対応記号]

◇

どの選択肢についても満遍なく回答数が得られました。農産を極力使わず、生産の過程で環境に負荷をあまり与えないもの、そして自分の健康にもいいものを選択することを心がけている傾向が見られました。乱獲や計画的な生産に関しては、他の選択肢に比べて、選択数が低かったです。この項目は、目標4,6,7に関連する行動です。消費者が判断しやすい仕組みづくりや、計画的に生産しているものに関する情報提供が必要です。

[関連する愛知目標]

[対象の選択肢]

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
|  | <p>目標4: 生産と消費 環境に無理をさせず続けられる生産と消費を行おう。</p> | ● | | | |
|  | <p>目標5: 生息地の破壊 森など、生きものが暮らす場所が失われるスピードを半分まで抑えよう。ゼロを目指そう。</p> | ● | | | |
|  | <p>目標6: 過剰漁獲 魚や貝など水産資源は、これからも無理なく続けられるように漁獲しよう。</p> | ● | | | |
|  | <p>目標7: 農業・林業・養殖業 農業・養殖業・林業が行われる地域を、長く無理なく活動できるよう管理しよう。</p> | ● | ● | ● | ● |
|  | <p>目標8: 化学汚染 化学物質・肥料・農薬は、生物多様性に有害でない範囲まで抑えよう。</p> | ● | | | |
|  | <p>目標18: 伝統的知識 生きものや自然にまつわる伝統的な知識を大切にしよう。</p> | ● | | | |

目標7に貢献する活動は、79%の方が行っていました。“食べる”の回答者にも、同様の質問を行いました。伝統知識（目標18）に関しては、“触れる”の方が関心が低いという結果となりました。また、化学汚染（目標8）は“選ぶ”の回答者がより気をつけている結果となりました。

みんな知ってる？ 認証マーク



フェアトレード認証

適正価格で取引をすることで不利な立場にある生産者を守り、持続可能な生活と生産を支える商品であることを示す。



RSPO認証

環境や社会に配慮して生産されたパーム油を使用した製品であることを示す。



有機JASマーク

化学合成農薬や化学肥料に頼らず、環境負荷を極力少なくして生産された農産物・農産加工食品であることを示す。



グリーンマーク

古紙の回収・利用の促進を図るため、原料に古紙を利用した製品であることを示す。



FSC認証

環境・経済・社会の3つの側面から適切な経営・生産が行われている森林、または木材製品であることを示す。



エコマーク

材料・作り方・運び方・使用後全体が環境への負担が少なく、環境保全に役立つことを示す。



MSC認証

適切に管理された持続可能な漁業で獲られた水産物であることを示す。

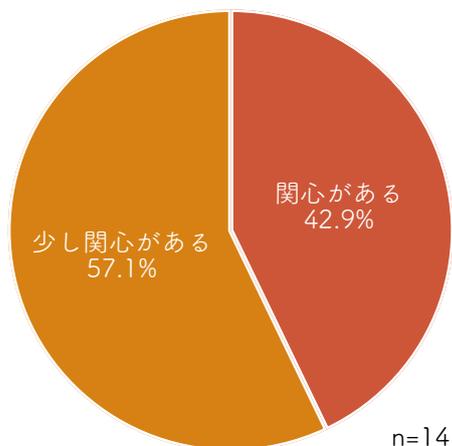


レインフォレスト認証

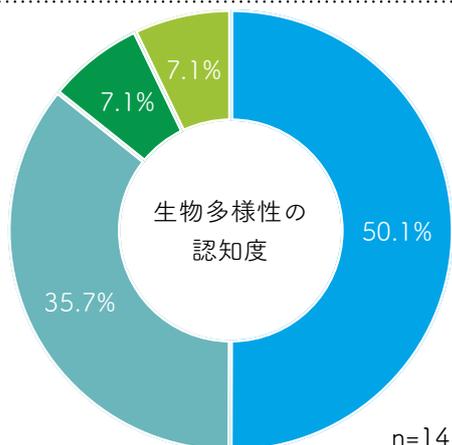
農業・林業・観光業の側面から環境・社会・経済面の持続可能性が基準を満たしていることを示す。

④ “生きもの”や“生きものの暮らし”への関心

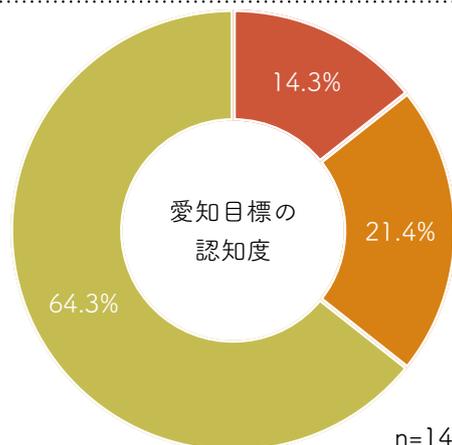
“守る”と同様に、「関心がある」方々のほうが、「少し関心がある」よりも少ない結果となったのが特徴的でした。



④ “生物多様性”と“愛知目標”の認知度



- 人に説明できる
- 言葉の意味は知っている
- 意味は知らないが、言葉は聞いたことがある
- 知らない



- 人に説明できる
- 言葉の意味は知っている
- 意味は知らないが、言葉は聞いたことがある
- 知らない

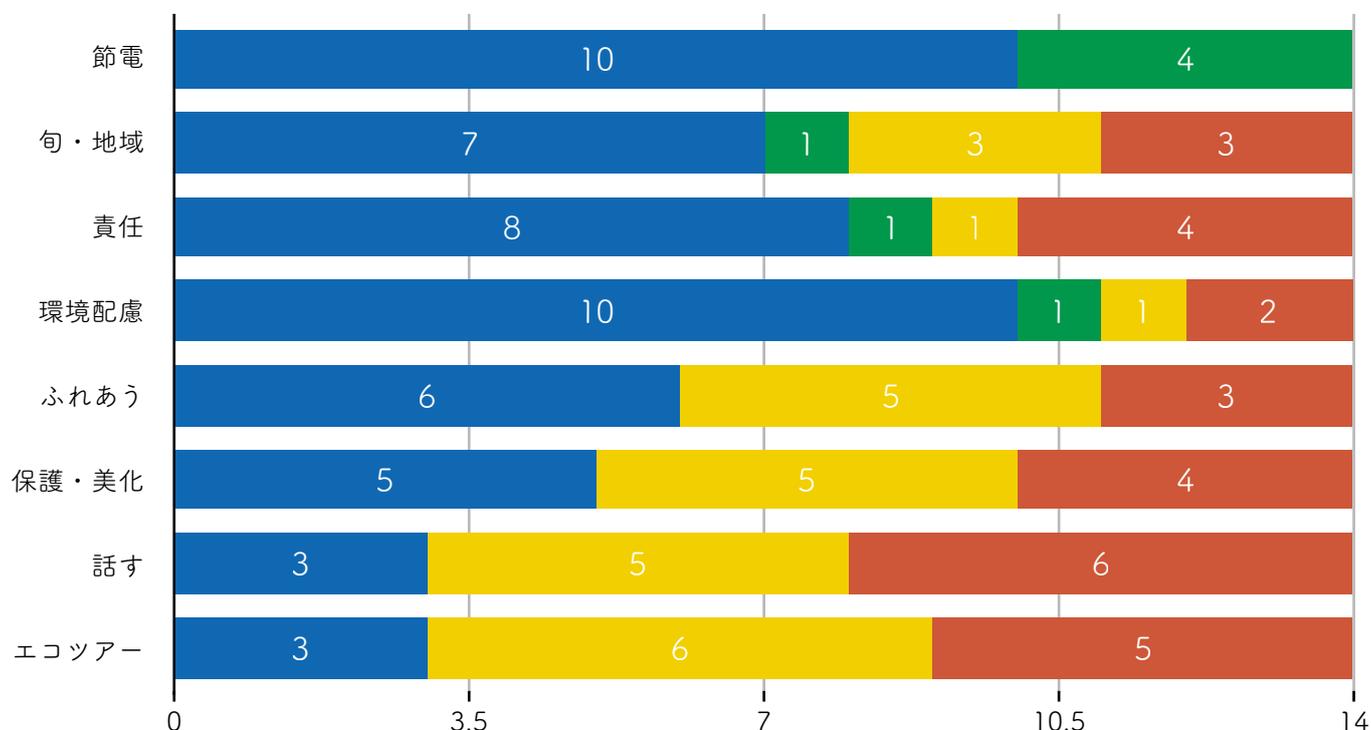
生物多様性については、「知らない」と答えた方の割合が、5つのアンケートの中で“食べる”のアンケートと並んで、最も多い結果となりました。

愛知目標については、すべてのキーワードの回答者の中で、愛知目標について、「知らない」と答えた方々が、最も多かったです。「意味は知らないが聞いたことがある」と答えた方はいませんでした。

私たちの消費行動が、生きものの暮らしに与える影響は大きいため、“選ぶ”活動をしている方々に、愛知目標のような国際条約にも興味をもってもらえるように働きかけることは、消費行動を変えるきっかけになるかもしれません。

生物多様性に寄与する日常行動の状況

- 生物多様性に寄与していると意識しながら行動している(A群)
- 生物多様性に寄与していると意識していないが、行動している(B群)
- 生物多様性に寄与していると思っているが行動できていない(C群)
- どちらでもない(D群)



"選ぶ"のキーワード選択者の生物多様性に寄与する日常行動の状況は以上の結果となりました。群ごとの割合はA群が46.4%、B群が6.3%、C群が23.2%、D群が24.1%でした。これは他の4つのキーワードと比較して、A群が2番目、B群が4番目、C群が同率2番目、D群が2番目に多い結果となりました。行動別にみるとA群の大きさがトップやそれに近い行動がある一方、ワーストの行動やそれに次ぐ行動も見られるなど、行動ごとに大きな開きのあるキーワードでした。

次に行動ごとの結果を見ていきます。「節電」はA群が71.4%、B群が28.6%、C群が0.0%、D群が0.0%でした。**A群、B群を合計して100%が「節電」をしていました。** 今後はB群に焦点を当てた普及啓発が重要です。

「旬・地域」はA群が50.0%、B群が7.1%、C群が21.4%、D群が21.4%でした。全キーワード中、A群の大きさがトップでした。"選ぶ"というキーワードと「旬・地域」の食材を購入することは密接に繋がっていると考えられるため、納得のいく結果でした。

「責任」はA群が57.1%、B群が7.1%、C群が7.1%、D群が28.6%でした。全キーワード中、A群の大きさが「触れる」に次ぐ2番目でした。これはペットを飼育するときにも自分の現在の状況を分析し、購入する前に考える判断力が働いていると考えられます。

「環境配慮」はA群が71.4%、B群が7.1%、C群が7.1%、D群が14.3%でした。A群で他のキーワード中、大きく差を開いてのトップでした。“選ぶ”と「環境配慮」商品の購入は最も密接にかかわっていると考えられるので妥当な結果となりました。

「ふれあう」はA群が42.9%、B群が0.0%、C群が35.7%、D群が28.6%でした。A群が最も大きかったものの、他のキーワードと比較するとA群でワースト、D群の大きさも最大でした。一方、C群でもトップであったため、**時間的余裕や「ふれあう」機会の提供が必要**になっていきます。

「保護・美化」はA群が35.7%、B群が0.0%、C群が35.7%、D群が28.6%でした。A群とC群がともに34.7%で最大でした。一方、他の4つのキーワードと比較するとA群が4番目、D群が最大という結果になりました。**“守る”のキーワード選択者では“選ぶ”と密接にかかわる「環境配慮」商品の購入でA群が大きかったことに比べて、“選ぶ”のキーワードを選択した方々では“守る”と密接にかかわる「保護・美化」D群が大きかったのは興味深い**です。

「話す」はA群が21.4%、B群が0.0%、C群が35.7%、D群が42.9%でした。D群が42.9%で最大でした。他の4つのキーワードと比較してA群でワースト、D群も最大でした。A群でワーストであったのはC群の大きさからも**生きものの暮らしについて「話す」環境づくりが必要**だと考えられます。一方でD群が大きいのは、“選ぶ”活動が基本的に個人で行われることのためだと考えられます。

「エコツアー」はA群が21.4%、B群が0.0%、C群が42.9%、D群が35.7%でした。C群が42.9%で最大でした。他の4つのキーワードと比較するとA群が3番目C群が2番目、D群が3番目と遜色ない結果となりました。一方で、ほかの7つの行動と比較すると、他の4つのキーワード同様「エコツアー」の低さが顕著なため、まずは「エコツアー」に対する理解を促進することが必要です。

❶ コラム⑥：イベント紹介 〈みんなでエコラボ！〉

サークルや学生団体の悩みの一つとして毎年メンバーが入れ替わり、それに伴って団体の活動の当初の想いが伝わらずマンネリ化したり継続が難しくなってしまうケースがありました。

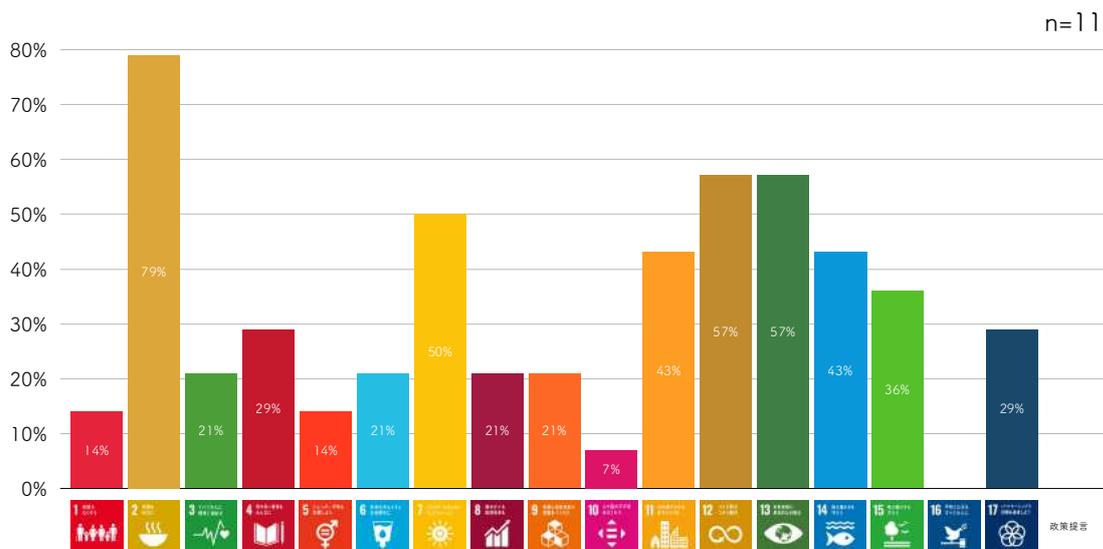
わたしたち生物多様性わかものネットワークはこの悩みを解決しようと「みんなでエコラボ！」というイベントを企画しています。

各地域の環境系サークルや学生団体と手を組み、その団体の活動に“生物多様性”の観点を取り入れることで活動に意義付けをし、魅力的な企画づくりをみんなで学びました。2019年は新潟と関西で開催し、いずれも大変盛況でした。





日頃の活動に関連するワードとSDGs



選ぶ×いきものの暮らしの回答者は、目標2（飢餓をゼロに）が79%と最も高い割合で選ばれていました。目標12（つくる責任、つかう責任）や目標13（気候変動に具体的な対策を）も回答数が多かったです。“選ぶ”の回答者は、活動そのものが生きものの暮らし以外の社会問題に配慮した活動が多いことが理由として考えられます。他のキーワードの選択者に比べ回答割合が大きかったのは、目標7（エネルギーをみんなに、そしてクリーンに）でした。

② “選ぶ”のまとめ

5つのキーワードの中で2番目に回答数が少ないキーワードで、主な回答者の属性は20代の学生でした。

「選ぶことを通して、生きものの暮らしを守れると思いますか」という質問に対して90%以上の回答者が「守れると思う」と回答したことから、日々の暮らしの選択が生きものの暮らしに繋がっていることを認識している方々が多いということがわかります。

モノやサービスを選ぶとき特に重視する基準は、回答件数が多い順に「品質」、「認証・認定」、「価格」という結果となりました。このことから、昨今のわかものの消費者は品質や価格だけでなく責任ある資源管理や環境への負荷の軽減を示す「認証・認定」も購買行動の基準としていることがわかりました。

買ったことがある認証マークとして回答が多かったのは、「フェアトレード認証」、「有機JASマーク」、「エコマーク商品」でした。一方で、環境・社会・経済面の持続可能性を義務付けた基準を満たすことを示す「レインフォレスト認証」、持続可能なパーム油の生産・利用を目的と

した「RSPO認証」、持続可能な漁業で獲られた水産物であることを示す「MSC認証」、森林の環境保全に配慮し、経済的にも持続可能な方法で生産された木材であることを示す「FSC認証」はまだあまりわかものに購入されていないようです。理由として、(1)そもそも認知されていない。(2)認証を受けた商品が少ない。(3)認証を受けている商品が高価であり手が届かない。以上の3点が考えられます。これからより多くの認証マーク商品が取り扱われ、消費者が環境に配慮した選択をしやすくなることが理想であると考えます。そのためにこれから弊団体は、理由(1)に着目して、**認証マークの認知度を高めるためのイベントやワークショップの企画・運営、Webサイトでの情報発信**をすることができると考えます。また、その他の回答の中にはある特定の環境や生きものに配慮した商品が見られたことから、認証マークだけでなく、パッケージや宣伝によってアピールされた商品も消費者の関心を集めていることが推測できます。

食べ物を“選ぶ”ときに気をつけていることについては、持続的な生産活動（農業・林業・養殖業など）に貢献する5つの選択肢について満遍なく回答が得られました。このことから、与えられた選択肢の行動は同等のレベルで認識され、気をつけられているということがわかりました。

わかものネットのこれから

生物多様性に寄与するという認識に基づいて行動していることの中で目立ったのは「**環境に配慮した商品を優先的に買う**」という項目でした。“選ぶ”という行動についてのアンケートに答えているが故なのか、環境に配慮した商品の選択を心がけている人が多い結果でした。一方で、生物多様性に寄与するという認識が低く、また**取り組みもあまり行われていない行動として顕著だったのは「話す**」という結果になりました。「選ぶ」という行動は誰もが日常的に行っていることであり、共通の話題になりうることから、購買行動においてどのような選択をしているのかを周りの人と積極的に話しておくことが、生物多様性と日々の選択の関連性をより理解することに繋がると考えます。弊団体が貢献できることとしては「**環境に配慮した商品を“選ぶ”**」をテーマに**対話の機会を設ける**ことが考えられます。



第2章

生物多様性保全や環境問題に 取り組む団体紹介

“わかもの”が活動する
多種多様な団体をご紹介します！

① “わかもの”が活躍する団体紹介

『〇〇×生きものの暮らしアンケート』では、回答者が団体に所属しながら活動しているケースが多く見られました。そこで、アンケートに回答されていた団体の中から、18団体に対し、より詳しい活動内容について調査しました。調査した団体情報は、下記の表の項目です。生物多様性に関わりのある活動は、多種多様です。自分の身近な地域で活動している団体を探したり、新たに面白い活動を始めたりするための参考としてご活用ください！

また最後のページには、詳しい調査はできなかったものの、アンケート回答者が活動している団体を紹介しています。わかものが運営している団体だけでなく、多世代がかかわりながらもわかものが活動しやすい団体も数多くあることが良くわかります。

データの読み方

団体名:

ロゴ

生物多様性
わかものネットワーク



活動内容:

団体の活動内容の概要をご紹介します。



活動場所:

特定の活動地域がある場合、
記載しています。

活動頻度:

いつ、どれくらいの頻度で
活動しているかを
まとめています。

団体連絡先:

Webサイトや各種SNSのURL/IDを
ご紹介しています。

QRコード

読者メッセージ:

団体の方々から、本白書の読者の皆様へのメッセージをいただきました。
是非ご覧ください！

※ 団体の方々からお送りいただいた情報を掲載しております。掲載内容に関するお問い合わせは、各団体の枠内に掲載している「団体連絡先」よりお願いします。

※ 掲載している情報は、2020年5月22日現在のものです。

団体名:



Earth Week Dokkyo 実行委員会



活動内容:

夏と冬の年2回開催されるEarth Week Dokkyoの運営
メンバー内での勉強会
いつも和気あいあいとした雰囲気です活動しております！

活動場所:

獨協大学内

活動頻度:

学期中
月曜日と木曜日の週2回
休業中：不定期

団体連絡先:

メール: earthweekdokkyo@gmail.com
Twitter: @EarthWeekDokkyo
Facebook: @Earth.Week.Dokkyo



読者メッセージ:

こんにちは！Earth Week Dokkyo実行委員会です(^-^)/Earth Week Dokkyoとは、環境問題や社会問題など地球規模の問題について楽しく学ぶための1週間のことで、夏と冬の年に2回開催しており、私達はその運営を担当しています。また、メンバーの中で定期的に環境問題等についての勉強会も行っています！最近では冬のお疲れ様会を開き、ゼロウェイストをコンセプトとしてミネストローネを手作りしました。

団体名:



NPO法人 ezorock



活動内容:

青年層のネットワーク拡大とともに、北海道の地域課題に対して、若者のアイデアやパワーを届ける事業を展開。活動を通して若者が自らの人生と社会を切り開いていく機会を作り出しています。

活動場所:

北海道

活動頻度:

不定期
(年間318回(2019年度))

団体連絡先:

Web: <https://www.ezorock.org/>
メール: info@ezorock.org
Facebook: @ezorock



読者メッセージ:

“ezorock”は、「社会を揺り動かす」という理念のもと、2000年に行われた「RISING SUN ROCK FESTIVALにおける環境対策活動」をきっかけに2001年4月に設立されました。毎年、2000人以上の若者が、北海道内各地で、300回以上の活動を展開。その結果、自らの人生を変化させて地域づくりの担い手として活躍する人材も増えてきています。野外ロックフェスティバルの空間のような、当たり前「自立」と「共存」があふれる世界を、日々の活動を通して作り上げたいと思っています。

団体名:



NPO法人 日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト



活動内容:

野外活動を通じた児童、青少年に対する環境教育。青森支部による森林保全活動、関西支部による外来植物の駆除紹介。日本経済新聞他主催のエコプロダクト展に2017年度から出展。国内や海外の清掃登山。



活動場所:

北海道、青森県、山形県、福島県、東京都、愛知県、富山県、大阪府、和歌山県

活動頻度:

不定期に清掃登山、自然観察会。その他、イベントはHP参照。

団体連絡先:

Web: <http://www.hat-j.jp>
メール: info@hat-j.jp



読者メッセージ:

日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト（HAT-J）は、女性で初めてエベレストを登頂した田部井淳子女史が初代表を務めた山岳環境保全団体です。わが国及び世界各地の環境保全について、各国の関係者と情報交換を行うことにより、登山者の立場からなすべき行動について実践を通じてアピールを行うとともに、野外活動を通じて次世代を担うべき青少年に対し環境教育を行い、継続した山岳環境保全の人材育成を行っています。

団体名:



大阪大学環境サークルGECS



活動内容:

「楽しさ」を重視しながら、学生ならではの柔軟で斬新な発想を活かして、様々な環境活動に取り組んでいます。その活動内容は、箕面川清掃や、壁面緑化活動、子どもを対象とした環境イベントの開催など様々です。



活動場所:

大阪大学豊中キャンパスと
その周辺

活動頻度:

・毎週金曜日のMTG
・不定期開催のイベント

団体連絡先:

Web: <http://gecs.main.jp/>
メール: gaidai.eco.challengers@gmail.com
Twitter: @handai_gecs



読者メッセージ:

私たち大阪大学環境サークルGECSは、「『学生』という立場から環境問題の改善に貢献する」という理念のもとで、7つの環境分野(環境教育、壁面緑化、リサイクル、環境啓発、地域清掃、リユース、景観改善)に分かれ、日々環境活動に取り組んでいます。また、半年に一度、班の垣根を越えたGECS全体で新たなイベントを企画し、幅広いジャンルの環境問題を取り扱っています！

団体名:



亀成川を愛する会



活動内容:

谷津での草刈り、泥上げ、枝払い
亀成川および流域の生きものモニタリング
アメリカザリガニ、ナガエツルノゲイトウなどの外来種駆除
生きもの観察会、里山手入れ体験イベントの開催

活動場所:

千葉県印西市（亀成川流域）

活動頻度:

定例活動日：第1・3日曜日、
第4木曜日

団体連絡先:

メール: kamenarilove@yahoo.co.jp
Web: <https://kamenari-love.localinfo.jp/>
Facebook: @kamenari.love



読者メッセージ:

みなさんは里山の手入れをしたことはありますか？私たちは昔ながらの亀成川を守ろうとしたのが始まりですが、使命感だけで活動しているわけではありません。里山の手入れは楽しいのです！体を動かす爽快感があるのは勿論ですが、様々な植物、動物、そして人との出会いにあふれています。今では川を中心に湿地や森の手入れにも力を入れていて、やる事が盛り沢山です。ぜひ遊びに来てくださいね！

団体名:



環境系学生団体 海辺のたからもの



活動内容:

砂浜の生態系を、自力で稼いで保全しています。海洋プラスチックによる生物への影響が深刻になる中、砂浜でプラスチックごみを集め、アクセサリに加工し販売収益で、生態系調査や環境教育事業を行っています。

活動場所:

仙台市荒浜でCafe運営、
調査&企画は東北の沿岸部

活動頻度:

不定期

団体連絡先:

Twitter: @umibenotakaramo
Facebook: 海辺のたからもの
Instagram: umibenotakaramono



読者メッセージ:

この白書が出る頃、僕らは学生団体から株式会社になっています。数年後にはNPO法人も立ち上げます。口先だけでなく皆いくらかも言いますし、箱庭の生き物を守るだけなら少しのお金で補助金で済みます。けど、僕らはかつて故郷にあった「自然と人間が調和した里海の暮らし」をもう1度再構築したいのです。日々生物学以上に地域の民俗を学び、最先端技術に親しみます。興味ある方は連絡ください。お待ちしております。

団体名:



環境三四郎



活動内容:

小学校を中心とした環境教育
東京大学の駒場池調査と整備
五月祭や駒場祭での出し物
様々な地域での夏合宿

活動場所:

主に東京都内

活動頻度:

毎週火曜日

団体連絡先:

Twitter: @k346official
Instagram: kankyosanshiro
メール: sanshiroshinkan@gmail.com



読者メッセージ:

環境三四郎は環境や生き物について考えて行動しよう！っていうインカレです！
男女問わず様々な学部・学年の方が参加しています。
最近ではオンライン勉強会など、頻繁に活動中です。
生き物や自然が好き、教育に興味がある方は是非ご連絡ください！

団体名:

金光院SATOYAMA 環境保全Group



活動内容:

谷津田の除草作業、ピオトープ、小川、止水地整備、生き物調査。

活動場所:

千葉市若葉区金親町
(金光院の谷津田)

活動頻度:

保全活動：2～3回／月
その他：生き物調査
自然観察会

団体連絡先:

連絡先：岡田光弘
メール：de-no@jcom.zaq.ne.jp

読者メッセージ:

現在参加者は全て高齢者です、市内でも貴重な生き物が生息する自然環境です、この環境を未来へと継続をするため、若い方の参加を望んでいます。昨年、関東・水と継続のネットワークに選定されました(第11回選定)他
(https://wakaba-chiba.mypl.net/mp/nature_wakaba/?sid=65404)

団体名:



芝浦工業大学 SDGs学生委員会 一綾いと一



活動内容:

「一人でも多くの人にSDGsを他人事とせず『問題意識』をもってもらう」ことを目的に活動しています。近年注目の集まるSDGsを知識として理解してもらいだけでなく、アクションに繋がる機会を提供しています。



活動場所:

芝浦工業大学

活動頻度:

週1で会議

団体連絡先:

メール: sdgs.sit@gmail.com

Instagram: [sdgs.sit](https://www.instagram.com/sdgs.sit)

Twitter: [@SDGs60210839](https://twitter.com/SDGs60210839)



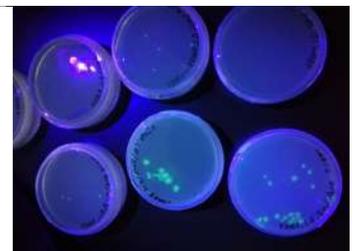
読者メッセージ:

①大学を持続可能な環境にする②連携した活動を行う③「私達」の変革を図るという3つの活動目標を柱にしています。2019年に発足し、地域イベントへの参加や小学校・高校でのSDGs教育、勉強会や学生大会への参加など、積極的に活動してきました。そして集大成として、12月に次世代SDGsフォーラムを開催しました。これからも学内から企業や他大学といった学外へとSDGsアクションの輪を広げていくため、繋がりを大切にしていこうと考えています。

団体名:



中央大学生物科学研究部



活動内容:

生物学について研究する学術系サークルです。3つの分野に分かれており、動物班は透明標本作成、植物班はニンジンのカルス作成、菌班は大腸菌形質転換実験など幅広く活動しています。研究結果は学園祭などで発表しています。



活動場所:

中央大学後楽園キャンパス

活動頻度:

通常授業中:毎週木曜
長期休暇中:1~2週間

団体連絡先:

Twitter: [@seikaken_cbc](https://twitter.com/seikaken_cbc)

メール: Chuo.brc.2017@gmail.com



読者メッセージ:

高校までで習った実験を実際に行うことで、座学では得られなかった知識やその分野の理解を深めています。また、研究活動としての一面も大事にしています。大学の設備や器具をお借りし、学生自らが実験のプランを立てるため、自主的な活動が行えることが強みです。Twitterでは日々の活動報告をしているので興味ある方は是非チェックしてください!

団体名:



中央大学工学部生命科学科
植物系統進化学西田研究室



活動内容:

化石植物を用いて植物の進化と古環境の研究を行っています。過去の生物多様性と環境を知ること、現在私たちが恩恵を受けている世界の自然と生物の大切さを認識し、それを健全な状態で次世代に伝えるべく行動します。



活動場所:

中央大学工学部
生命科学科

活動頻度:

平日

団体連絡先:

FAX: 03-3817-7193

読者メッセージ:

化石に実際に触れるという貴重な経験のできる面白い研究です。年に数回は北海道など日本各地で化石の採集もします。先生は世界各地で調査研究するだけでなく、NPO生物多様性JAPANのメンバーでもあって、文系学生も所属する生物多様性のゼミもしています。私たちの持続性を考えるとき、億年単位の時間スケールで物事を考えることは大切です。大学祭では研究室紹介や外国の民芸品フリーマーケットをしています。是非いらしてください！

団体名:

東京農業大学厚木キャンパス
農友会動物研究部



活動内容:

哺乳班、ムササビ班、野鳥班、水生両爬班、昆虫班の5つの班でそれぞれ調査活動をしています。



活動場所:

主にキャンパス周辺や高尾山

活動頻度:

各班月2回程度

団体連絡先:

Twitter: @nodoken_atsugi
Web: <https://nodai-douken.hatenablog.com/>



読者メッセージ:

動物研究部では定期調査以外にも、特別企画、文化祭や野鳥公園フェスティバルへの出展、夏合宿など様々な活動をしています！

団体名:



都市緑化研究会



活動内容:

民官学が交流して空地进行が人が憩えるような場所にする目的でガーデニングを行っています。

ネモフィラ、アジサイ、ヒマワリなどの季節ごとの花をイベントなどで育てて、きれいなガーデンを作っています。

活動場所:

神奈川県横浜市
都筑区中川3丁目
早淵川老馬谷ガーデン

活動頻度:

毎月第一土曜日、第三水曜日

団体連絡先:

メール: g1761045@tcu.ac.jp
Web: <https://guruttoryokudo.jp/localgroups/hrg>



読者メッセージ:

以前は荒地とも見て取れるほどの空地を見ていて気持ちのいい、散歩をするときに通りたくなるような空間に生まれ変わらせて地域のシンボルの一つにしたいという理念のもと、地道に活動を行い住民、区の方、大学生が一緒になって作り上げてきたガーデンです。活動している住民の方々、区の方々はとても気さくで明るい楽しい人たちが大学生の私たちも一緒にとても楽しく活動させていただいています。ぜひ興味を持たれたら足を運んでみてはいかがでしょうか？

団体名:



なごや環境大学 ユースクラブ



活動内容:

市民・企業・教育機関・行政が立場をこえて協働で運営し、問題意識を持ち寄り学び合うネットワーク。その中の大学生を中心としたクラブ。若者が若者に対して発信することを目的とし、独自の企画やイベントを実施。

活動場所:

愛知・なごやを拠点とし、里山や水辺 教室や工場・まちじゅうをキャンパスにして、活動しています。

活動頻度:

月に1.2回の会議があり、他、イベント等がある時は状況に応じて活動しています。

団体連絡先:

メール: jimun@n-kd.jp
Facebook: @nagoya.kankyo.d
Twitter: @nagoya_kankyo_D



読者メッセージ:

実際の大学とは違い、まちじゅうをキャンパスとしていて、環境問題に囚われず、関係する全ての問題を多様に学ぶことが出来ます。またユースの目線から独自にやりたいことが出来るのも魅力です。こどもから大人まで様々な人が参加するので自分のネットワークも広がります。あなたも環境首都なごやを、そして、持続可能な地域社会を目指して東海地方を一緒に盛り上げていきませんか？

団体名:



新潟環境ネットワーク N-econet



活動内容:

新潟県内の学生ボランティア団体を対象に、団体間のネットワーク構築やスキルアップ、環境啓発活動の三つを軸にした活動を行なっています。



活動場所:

新潟県

活動頻度:

不定期

団体連絡先:

Facebook: @niigata.econet

Instagram: n_econet2020

Twitter: @neconet2020



読者メッセージ:

N-econetでは「学生団体をネットワークする」という理念の下に活動しています。これは設立当初からの活動理念であり、今後も大切にしていきたい気持ちでもあります。大きな変化を迎えた年になりましたが、ネットワーク団体のさらなる関係性の強化や活動の活性化などを目的に、従来のコンテンツに加えてメンバー個人の課題意識をテーマにした動画コンテンツの作成やオンライン勉強会兼交流会を企画していきたいと思います。

団体名:

野生動物生態研究会



活動内容:

主に大学裏に隣接する野幌森林公園での動植物調査や観察、遠征を行い、「野生動物の生態やそれを取り巻く環境」について研究するサークルです。



活動場所:

主な活動: 道立自然公園野幌
森林公園

活動頻度:

週に一度: 観察会、動植物調査、勉強会

団体連絡先:

メール: rgu.wildlife.yaken@gmail.com

遠征: 道内各地や沖縄など

月に約一度: 遠征

読者メッセージ:

野生動物生態研究会、通称「野研」は生き物好きな個性豊かなメンバーが集まり、活動を行っています。主に活動を行う野幌森林公園では、風倒木や外来種の分布拡大、約78年以來のヒグマの進入など、様々な変化が少しずつ起きています。毎年積み重ねてきた調査や観察の結果からそうした森林公園の環境や生き物達の動向を探り、それを報告していくことで様々な人に野生動物や自然環境の変化へ目を向けてもらうきっかけを作っていけたらと思います。

団体名:

有志環境保全委員会

活動内容:

毎週金曜日Fridays For Future/みんなで考える気候変動対策への参加/マイバッグ販売(売り上げ寄付)/その他環境保全のための活動への参加。



活動場所:

札幌市

活動頻度:

毎週金曜日、不定期

団体連絡先:

Instagram: fridaysforfuture_sapporo
Picuki: @fridaysforfuture_sapporo



読者メッセージ:

私たちは自分たちの未来を守るべく活動を始めました。地球温暖化は私達にとって1番身近で、1番にみんなで考えていかなければいけない問題なのになぜか蔑ろにされがちですよね。解決するためにはみんなで考えてかなきゃいけないと思います。まずは今の状況について知ることから一緒に始めて行けたらいいなと思っています。より多くの人に地球温暖化について考えるきっかけを作ってあげればと思います。質問や意見は私たちのインスタグラムまでお願いします。

団体名:



早稲田大学学生環境NPO 環境ロドリゲス



活動内容:

私たち環境ロドリゲスはグループ毎に「環境×〇〇」というテーマを掲げ、環境教育、商品開発、里山整備、川、海洋プラスチック、大気環境、オリパラ、地域活性、早稲田の9つの幅広い分野で活動をしています！



活動場所:

千葉県鹿野山、多摩川、早稲田、福井県鯖江市、宮城県志津川、新潟県佐渡島

活動頻度:

各企画週1回

団体連絡先:

メール: rodo_contact@yahoo.co.jp
Twitter: @ER_rod
Instagram: er_rod



読者メッセージ:

私たち環境ロドリゲスは「学生が主体となって、多様なアプローチから環境問題の解決に貢献する」という理念のもとに活動しています。そして何より活動を楽しむことを第一にしています。例えば、ゴミ分別指導においてもただ指導をするのではなく私たち自身がイベントを楽しもう！そして、ゴミ分別を通してそのイベントをより良いものにしよう！と考えています。また、幅広い領域で活動することでメンバー1人ひとりがやりたい環境問題にチャレンジしています！

② 全アンケート回答者活動団体リスト

アンケートに回答してくださった方が、活動している団体を示しています。ユース団体でなくても、わかものが主体的に活動している団体は、赤い文字で示しています。

● 芝浦工業大学 SDGs学生委員会-綾いと-

●●●● 北海道教育大学 キッズボランティアサークル

●● 早稲田大学 環境ロドリゲス

● 亀成川を愛する会

● 谷津干潟自然観察センターボランティア

●●● 中央大学 FLP西田生物多様性ゼミ

● 酪農学園大学 生物多様性保全研究室

● 早淵川・老馬谷ガーデン運営委員会

● 海辺のたからもの

● 東京都市大学 都市緑化研究会

● NPO法人国際自然大学校

● 野外教育事業所ワンパク大学

●●●● 環境教育学研究室（北海道教育大学）

● 中央大学 生物科学研究部

● 酪農学園大学 野生動物との共存サークル

● 東京農業大学 動物研究部

● 中央大学 植物系統進化学研究室

● 中央大学 FLP西川ゼミ

● 北海道大学流域保全管理学的研究室

● 東京都市大学 環境学部北村研究室

● 野生動物医学会学生部会

●● 生物多様性学生ネットワーク

● NPO法人オーシャンファミリー

海洋自然体験センター

● NPO法人バードリサーチ

● NPO法人ezorock

●● Earth Week Dokkyo実行委員会

● 東京農工大学 水資源計画学研究室

● 千葉金光院SATOYAMA環境保全Group

● 東京農工大学 農工やさい塾

● 東京都市大学 応用生態システム研究室

● 東京大学 環境三四郎

● NPO法人樹木・環境ネットワーク協会

環境パートナーシップ会議

● ESD日本ユースコンファレンス

● 谷津干潟ユースプロジェクト

● 東京都市大学 ISO学生委員会

● 東邦大学 東邦Ecolution

● 公益財団法人ハーモニセンター

● 新潟環境ネットワークN-econet

● 古瀬研究室(帝京科学大学)

● 有志環境保全委員会

●● 大阪大学 環境サークルGECS

● 生物多様性わかものネットワーク

● ユースラムサルジャパン

● 名城大学 環境動物学研究室

● 酪農学園大学 野生動物生態研究会

● 日本野鳥の会愛知県支部

● 南遊の会

● NPO法人藤前干潟を守る会

● なごや環境大学 ユースチーム

● ぼんすけ育成会

● 東邦大学 フューチャープロジェクト

● NPO法人

日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト

● Field Assistant Network

●● 中央大学 法学部野口行政法ゼミ

● 名城大学 野生動物生態研究会

● 東京学芸大学 原子研究室

● 東京農工大学 狩り部

● 消費から野生動物の未来を変えるプロジェクト

● 酪農学園大学 栽培学研究室

● … 食べる ● … 触れる ● … 伝える ● … 守る ● … 選ぶ

第3章

おわりに

本白書の活用方法や今後の活動、参考文献など
についてご紹介しています。

Vol.4 に向けて

アンケートの最後に、本アンケートの感想を聞きました。すると、「頭の中を整理できてよかった」・「自分が環境に良いと思っていることを実践していないことに改めて気づくことができた」・「自分の活動を振り返ることができた」・「食事のおもとである生物多様性についてもっと詳しく知りたいと思った」といった回答が多く見られました。

「生物多様性わかもの白書」は発行するだけでなく、アンケートを通して回答してくださった方々を勇気づけたり、生物多様性を身近に感じるよい機会となることがわかりました。次回以降の「生物多様性わかもの白書」でもアンケートを通した生物多様性への貢献を意識していきます。

一方、「質問数が多く、選択肢も多いためやや答え辛い印象を受けました」という意見や「『どのような行動が生物多様性を守ることにつながるか。』のような質問を設ければよかったのでは?と思いました」という意見もありました。これらの貴重な意見を真摯に受け止め改善に尽くしてまいります。

さて、次回のVol.4ですが、今回のアンケート調査からさらにグレードアップを目指します。具体的には、①短くて回答しやすい予備調査を加える ②今まで生物多様性に全く関心のなかった方向けのアンケートを取り入れる ③ワークショップ型の調査の導入などが案として出ています。また、今回は新型コロナウイルス感染症の影響で断念したインタビュー調査も行っていきたいです。

今後の「生物多様性わかもの白書」の動向を温かい目で見守ってくださるようお願いいたします。

本書の利用・活用方法

本書は、以下のような利用・活用を想定し、作成しています。

- ・ 自身の活動の見直しの際の裏付けの資料として
- ・ 新たな活動を考える際の参考資料として
- ・ 政策提言・その他の提案の裏付け資料として

また、アンケートのデータをより活用してもらうために、個人が特定されない形でのデータ提供を行います。

本書を引用し作成したものを公表される際、データを利用したい際は、事前に以下のメールアドレスまでご一報ください。

hakusyo@bd-wakamono.net

参考文献・素材提供など

<全体を通して>

- ・いらすとや URL: <https://www.irasutoya.com/>
- ・“QRコード”は株式会社デンソーウェーブの登録商標です。
- ・にじゅうまるプロジェクト URL: <http://bd20.jp/know-aichi-target/>

<白書を読むにあたって>

P. 4 「MY行動宣言とは？」

- ・国連生物多様性の10年日本委員会 WEBサイト「My行動宣言 WEBで宣言する」
URL: <https://undb.jp/spread-action/entry/>

P. 12 「世界目標の紹介と国際会議について 「持続可能な開発目標(SDGs)とは？」

- ・次期生物多様性国家戦略研究会(2020年1月7日)「資料4『人と自然との共生』の考え方」
URL: http://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/initiatives5/files/04_siryoku.pdf
- ・外務省 JAPAN SDGs Action Platform WEBサイト「SDGsとは?」
URL: <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html>

P. 13 「愛知目標とは？」

- ・にじゅうまるプロジェクトWebサイト
URL: <http://bd20.jp/know-aichi-target/>
- ・環境省要約(2020)「IPBES.生物多様性と生態系サービスに関する地球規模評価報告書政策決定者向け」, 64p.

P. 14 「国際条約と日本のユースについて」

- ・生物多様性わかものネットワークWEBサイト「国際会議レポート」
URL: <https://bd-wakamono.net/cbdreport>
- ・Change Our Next Decade(2019)「生物多様性条約ガイドユース版」
URL: <https://cond2020-44733.firebaseio.com/guide-cbd.pdf>

<総合的な分析結果 ①基礎情報>

P. 17 「ジェンダーと生物多様性」

- ・UN environment programme(06 DC 2017) "Why gender is important for biodiversity conservation".
URL: <https://www.unenvironment.org/news-and-stories/story/why-gender-important-biodiversity-conservation>

P. 28 「愛知目標の現状とこれから ①愛知目標に向けた取り組み・②次の10年の目標、"ポスト愛知目標"」

- ・藤田 香(2020)「『ポスト愛知目標』の草案を発表」『日経ESG 日経ESG経営フォーラム』
URL: <https://project.nikkeibp.co.jp/ESG/atcl/news/00067/>
- ・環境省(n.d.)「みんなで学ぶ、みんなで守る 生物多様性」『地球規模生物多様性概況第4版』
URL: https://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/aichi_targets/index_04.html

<"守る"の分析>

P.63 「知っているようで知らないSATOYAMAの話」

- ・CONSERVATION INTERNATIONAL JAPAN WEBサイト「生物多様性ホットスポット」
URL: <https://www.conservation.org/japan/biodiversity-hotspots>

編集後記

高原 実那子

無事に「生物多様性わかもの白書Vol. 3」を完成させることができ、とても嬉しいです。助言や様々なサポートをくださった方々、アンケートや団体紹介に快く回答してくださった方々、そして1年以上オンラインで喧々諤々の議論をしながら一緒に白書を作ってくれたメンバー3人、本当にありがとうございました。分析を通して、わかものは様々な観点で生物多様性に関わっていることを改めて感じました。生物多様性にどのように貢献するかだけでなく、様々な問題に対して相乗効果のある活動が、わかものにとって魅力的で持続的な活動ではないかと思います。

読んでくださった方には、ぜひご意見ご指摘を頂ければと思います。生物多様性わかものネットワークの他企画や、次の白書に必ず活用させていただきます。白書を読んで下さった方の、生物多様性に関わる活動のきっかけや、発展に少しでも役に立つことを願っております。

木内 亨

“生物多様性や環境に関するわかもの活動をまとめる”という言葉でいうと非常にシンプルなことをやっていたようですが、実際は本当に苦難の連続でした。多くの“わかもの”の活動をまとめるには、どのようにしたらいいか。白書の制作メンバーは根気強く議論できるメンバーが多かったので、何度も何度も議論を重ね、企画書段階から1年半の長い歳月をかけ、この白書が完成しました。

この企画は、私と今田さんが関東ですが、高原さん・野村さんはそれぞれ北海道・九州から参加しており、ほぼ全てのミーティングがオンラインのSkype上で行われるなど、団体内の企画としても画期的でした。全国に多様なメンバーがいる生物多様性わかものネットワークとしても、この経験は大きな財産になったと思います。

今田 海斗

本白書でやり残したことがあります。インタビュー調査です。わたしたちは元々、アンケート回答者の所属団体にインタビューを行う予定でした。しかし、残念ながら新型コロナウイルス感染症の影響を鑑み、断念しました。アンケートでは、一般的な選択肢ばかりになり、具体的なことを調査できなかった所もあり、考察に推測が多くなってしまいました。次回のVol.4では、今回の白書で埋められなかった穴をインタビューやワークショップを用いて調査できればと思います。最後に、本白書の制作やアンケートにご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。

アンケートの回答から、生物多様性に寄与する行動の妨げになっていることがなんなのかということを知ることができました。普及啓発が足りなければ、発信を目的としたイベントを、経済的な理由で行動に移せないのであれば、節約しながらできる方法を考える機会作りを、というようにいろいろなアイデアが生まれる白書になったと思います。また、本白書のアンケート調査の結果に基づいて、より強い目的意識を持ってこれからの生物多様性わかものネットワークでの活動に取り組めるのではないかと思いました。最後になりましたが、本白書の制作やアンケートにご協力いただいた皆様へ、深く感謝申し上げます。

生物多様性を守るために、 あなたにできること

「MY行動宣言」に参加する

P.4 で紹介したマイ行動宣言で、自分にできることを宣言し、日々の暮らしの中で、「食べる・触れる・伝える・守る・選ぶ」に関する5つのアクションを心がけてみては？

生物多様性わかものネットワークに参加する

生物多様性わかものネットワークでは、学生と社会人が一緒になり、生物多様性わかもの白書以外にも普及啓発、ネットワーク、政策提言に関連する多岐にわたる活動を行っています。一緒に活動しませんか？

ご支援いただいた皆様

本書の作成にあたり、株式会社ダイフク様、国連生物多様性の10年日本委員会様及び、国際自然保護連合日本委員会様よりご支援、ご協力を賜りました。本当にありがとうございました。

株式会社ダイフク様

DAIFUKU

Always an Edge Ahead

国連生物多様性の10年日本委員会(UNDB-J)様



国際自然保護連合日本委員会(IUCN-J)様





2020年5月22日
国際生物多様性の日
解決の鍵は自然の中に

本白書は、2020年の生物多様性の日に合わせて発行いたしました

生物多様性
わかもの
ネットワーク

生物多様性 わかもの白書 Vol.3

2020年5月

DAIFUKU
Always an Edge Ahead



本白書は、上記の皆様のご支援により完成しました



生物多様性わかものネットワークは
にじゅうまる宣言をしています